草作遺跡

―元総社幼稚園移転新築に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告―

1985

前橋市埋蔵文化財発掘調査団

序

古代、上毛野の国は、大変栄えていました西の都奈良と並んで東国における政治や文化の一大中心地でありました。その上毛野の国の中にあってもとりわけ政治や文化の中心地であり、また先進地であったのがこの前橋の地でありました。

前橋市は、北に関東平野を一望できる名山赤城山がそびえ、西に榛名山を仰ぎみることができ、その中央には、坂東太郎で名高い利根川が急流を見せています。また、広瀬川をはじめとする小河川が市内を豊かに流れ、県木である黒松林のある公園やけやきなどの街路樹が緑濃く、まさに風光明媚な水と緑の都であります。

その前橋市の西部にあたる総社・元総社地区は、古代、現在の県庁にあたる国府や、宗教とともに教育の機関を兼ね備えた国分僧寺や国分尼寺、さらに巨大な根巻石や石製鴟尾を今にも残す山王廃寺、そして、現在でもその姿が見られる総社神社などが密集しており、そういう意味で市内でも古代を知る上で極めて重要な地域となっております。

この地も時代の趨勢から区画整理事業が避けられない問題となってきました。

このたび、その区画整理事業の一環として元総社幼稚園が移転し新築することになり、その予定地の地権者瀬下元雄氏より建築に先立つ埋蔵文化財発掘依頼書が教育委員会に提出され、本発掘の運びとなりました。

その結果、古墳時代や平安時代に人々が生活した竪穴住居址や中世になって使用された井戸を検出することができました。また、検出された遺物の中には埴輪や遺体と共に埋葬された方頭太刀の柄頭などもあり古墳の存在を裏付けております。そして、主に竈の構築材として使用されていた瓦も数多く検出することができ、考古学上非常に興味を惹くものであります。しかし、残念ではありますが現状保存という形では残すことはできず、記録保存という形になってしまいましたが、この調査の成果は将来上野国府の様子を解明するための大きな手がかりとなることを期待しております。

最後になりましたが、この調査を実施するにあたり様々に紆余曲折はありましたがここに本報告書が刊行できる運びとなり、その間物心両面にわたり御協力いただいた地権者、区画整理課の担当者および、寒風にもめげず直接調査に携っていただいた担当者、作業員の方々、大変な時間の制約を受けながらも情熱をもって整理作業にあたってくださった作業員の方々に厚く御礼を申し上げます。

1985年5月15日

前橋市埋蔵文化財発掘調査団
団長　奈　良　三　郎

例　　言

1．本書は、昭和59年度元総社明神区画整理事業に係る学校法人花園学園元総社幼稚園移転新築工事に伴う、草作（くさづくり）遺跡の発掘調査報告書である。

2．本遺跡の略称は59Ａ３とする。

3．調査主体は、前橋市埋蔵文化財発掘調査団である。

4．発掘調査の要項は次の通りである。

調査場所　　前橋市元総社町1372番地

調査期間　　昭和59年６月27～７月12日

　　昭和59年11月９日～12月24日

調査担当者　　唐澤保之（現・元総社小教諭）、井野修二、桑原　昭、原田和博、加部二生（調査補助員）

試掘調査担当者　木暮　誠、中野　覚、福田瑞穂

また、調査にあたっては、瀬下工営株式会社、学校法人花園学園元総社幼稚園に費用及び協力を得た。

5．本書の執筆および編集は担当者間で協議して行った。遺物整理、図面整理、図面作成、遺物写真等は担当者及び整理作業員が分担して行った。特に遺物実測図作成と縄文時代の遺物の項にあたっては前原　豊が担当した。また、陶磁器の項・その他の遺物の項及び遺物観察表は加部二生が担当した。

6．発掘調査および遺物整理にあたり、群馬県埋蔵文化財調査事業団　大江正行氏、中沢悟氏、群馬県文化財保護課　松田　猛氏、元総社小教諭　松田　稔氏の御教示をたまわった。

7．調査ならびに本書作成にかかわった方々は次の通りである。記して感謝する次第である。

発掘作業員

粟岡エミ子、石関秀男、岩木　操、内田誠一、大木道子、大塚竹男、狩野安次、小金沢貴美子、小島勝雄、斉藤守弘、柴崎まさ子、城田和泉、新保一美、須藤恒雄、住谷文彦、関　哲哉、反町百合子、高島　康、高橋利男、千明香根子、渡木秋子、中川　保、長岡徳治、藤田タカ、藤田光夫、森永　保、湯浅たま江、湯浅道子

整理作業員

白井栄恵、城田和泉、新保一美、住谷文彦、関　哲哉、竹内敏江、千明香根子、福島裕子、森永　保、湯浅たま江、湯浅道子

測量委託

関越測量㈱

凡　　例

1．各遺構の略称は次の通りである。

H…土師器使用の住居址、I…井戸、W…溝、D…土坑、P…ピット

2．遺構・遺物の実測図の縮尺は次の通りである。

遺構　住居址・井戸…1/60、竈…1/30、試掘トレンチ図…1/300、全体図…1/200

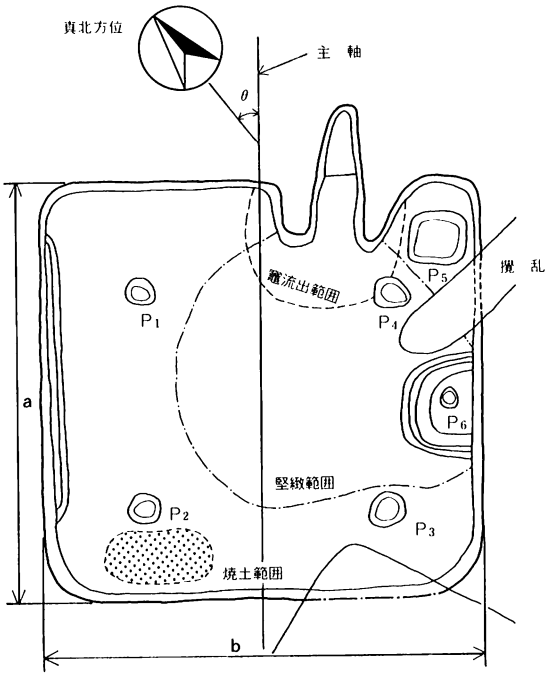
遺物　土器…1/4、金属製品・カワラケ皿・土製紡錘車…1/2、臼玉…1/1、瓦・埴輪…1/6

3．遺物番号は、遺物を取り上げた際の番号を使用した。接合により複数の番号をもつ遺物は、一つに代表させてある。

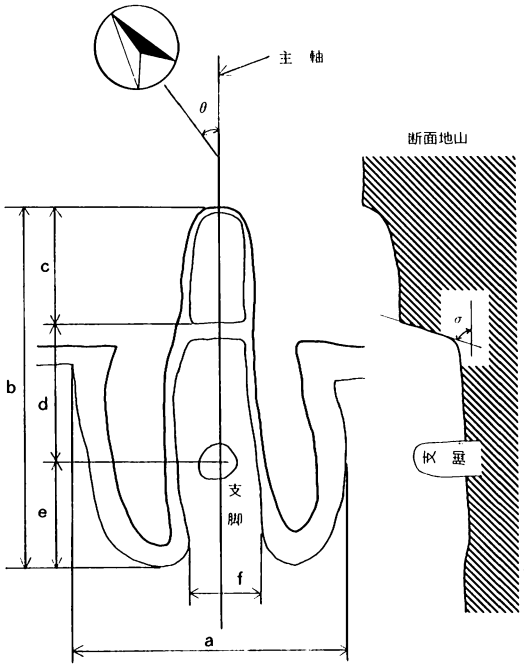
4．前橋市におけるスクリーントーン使用例は次の通りである。

地　山	焼　土	礫	貼り床	白色粘土
203	112	91	704	22

掘り残し	表　土	礫　層	A、B、C、FA	炭化物
81	413	426	112	320



a：南北軸長　b：東西軸長　θ：主軸方位

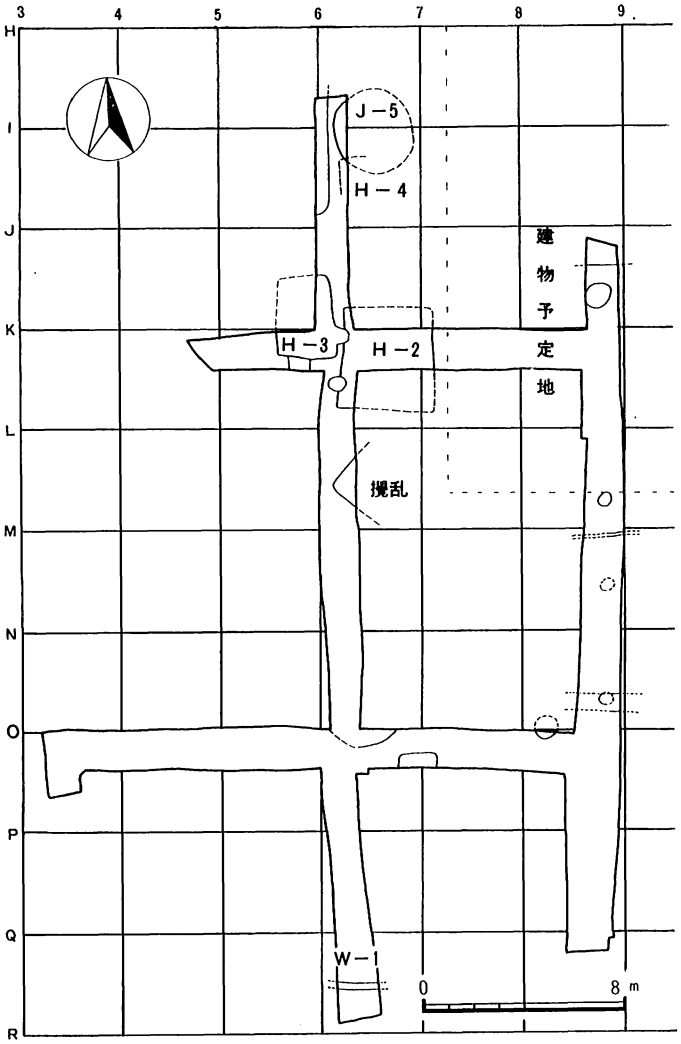


a．最大幅　b：全　長　c：煙道部長　d：燃焼部長
e．炊き口部長　f：炊き口部幅　θ：主軸方位　σ：煙道部立ち上がり角

目　　次

序
例　言
凡　例
Ⅰ　発掘調査に至る経過……1
Ⅱ　遺跡の位置と環境……2
Ⅲ　発掘調査の経過……5
Ⅳ　標準土層……6
Ⅴ　遺構と遺物……7
1　住居址……8
(1)　古墳時代の住居址……8
(2)　平安時代の住居址……15
2　井戸……36
3　グリッド遺物……39
(1)　縄文土器……39
(2)　出土陶磁器類……39
(3)　その他の遺物……41
Ⅵ　まとめ……44

Ⅰ　発掘調査に至る経過

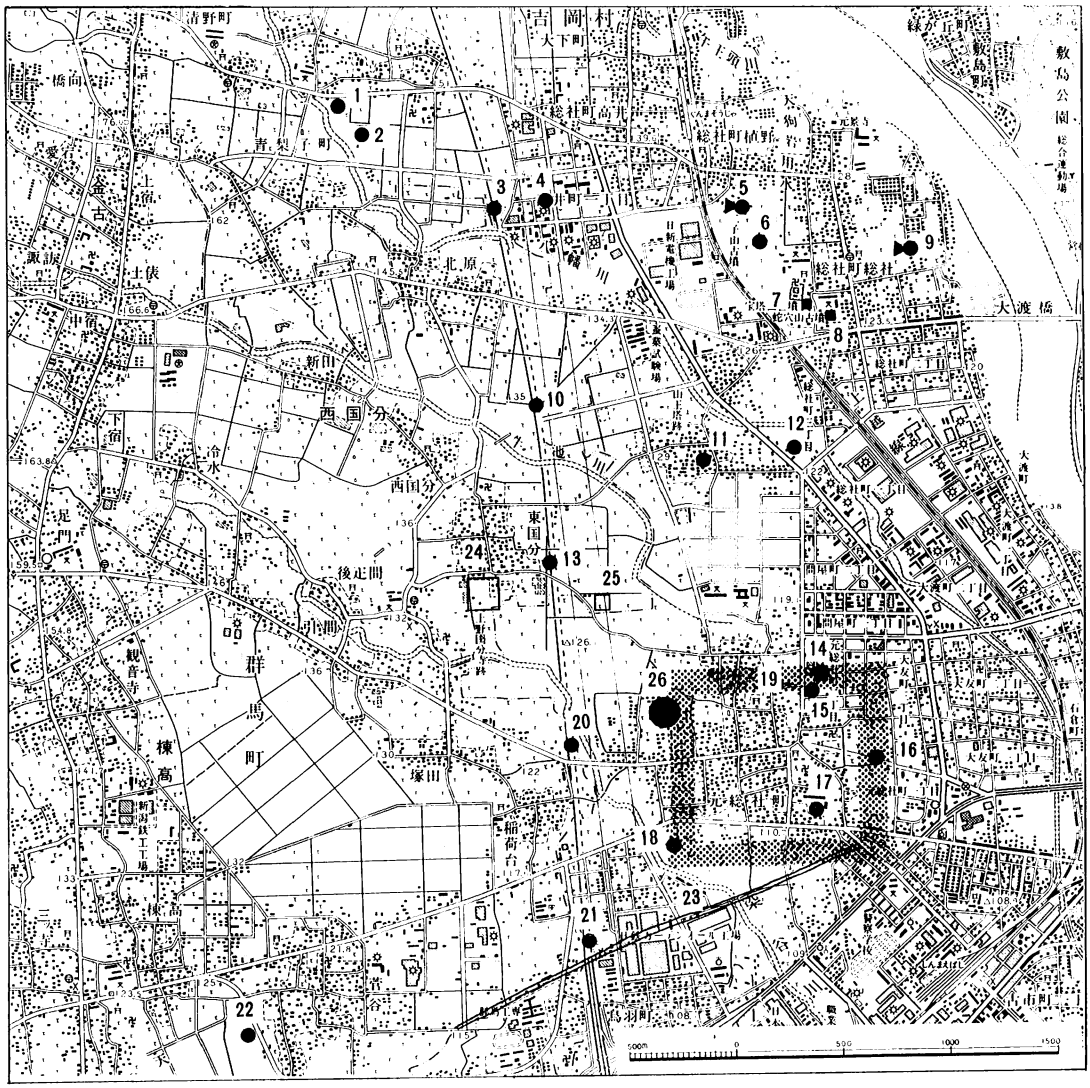


第１図　試掘結果（１/300）

前橋市教育委員会は前橋都市計画事業西部第三明神地区土地区画整理事業に先立つ埋蔵文化財発掘調査を昭和57年以来元総社明神をはじめとして実施してきた，今回の発掘調査も区画整理事業の一環として元総社幼稚園が移転新築することになったことに端を発した。その移転先の地権者である瀬下元雄氏より建築工事に先立って埋蔵文化財の有無について前橋市教育委員会に照会があったのは昭和59年５月であった，それを受けて踏査した結果、遺物の散布が認められその旨を昭和59年５月に回答した，さらに、瀬下元雄氏より昭和59年６月に埋蔵文化財確認調査依頼書が提出され、試掘を行ったのが、昭和59年６月27日より７月12日の期間であった，試掘は第１図のように東西・南北に各２本ずつトレンチを入れた結果、縄文時代の住居址や平安時代の住居址が確認でき遺構の存在が明らかとなった、この所見に基づき協議を実施し、埋蔵文化財発掘調査の依頼書が提出され本発掘の運びとなった，ところで、今回の発掘調査は、区画整理事業の一環として区画整理課が中心となり、申請人と埋蔵文化財発掘調査団との間で委託契約を締結し、申請人が費用やその他の諸条件を満たすことにより、全面的にバックアップし、とどこおることなくスムーズに本発掘が行われるよう進めていくことになった。

なお、本発掘は昭和59年11月９日より12月24日までの約１か月半行われた，

II　遺跡の位置と環境



第２図　周辺の遺跡（１/25000）

1．清里南部遺跡群
2．中島遺跡
3．下東西遺跡
4．柿木遺跡
5．(総社)二子山古墳
6．愛宕山古墳
7．宝塔山古墳
8．蛇穴山古墳
9．遠見山古墳
10．北原Ｂ遺跡
11．山王廃寺遺跡
12．昌楽寺廻村東遺跡
13．国分境遺跡
14．閑泉樋遺跡
15．閑泉樋南遺跡
16．元総社明神遺跡
17．元総社小学校校庭遺跡
18．染谷川遺跡
19．推定上野国府域（元総社の発掘成果から）
20．国分寺中間遺跡
21．鳥羽遺跡
22．菅谷古墳群
23．東山道(推定)
24．国分僧寺跡
25．国分尼寺跡
26．草作遺跡

前橋市域を地形や地質の特徴からみると四地域に分けることができる。北東部の赤城火山斜面と広瀬川・桃木川に沿って北西から南東にのびる幅２～３㎞の広瀬川低地帯（沖積低地帯）、そして低地帯の南西部の前橋台地（洪積台地）、さらに、現利根川の氾濫原である。草作（くさづくり）遺跡は、このうち前橋台地上にある。

草作遺跡が存在する前橋市元総社町1372番地は、前橋市街地である県庁付近から西へ約2.6㎞のところにある。遺跡は県道前橋・安中線の北隣に走る県道足門・前橋線の北約250ｍの地点にある。西に流れる染谷川と東に流れる牛池川のほぼ中央に位置している。また、東側に市道大友西通線（通称産業道路）があり、遺跡から南東1.8㎞の地点には、国鉄上越線新前橋駅がある。

遺跡の存在する地域は、標高約120ｍで、北西から南東へのゆるやかな傾斜地である。榛名山中に源を発する中小河川は南東方向に並走し、台地を細長く開析しており、各河川に分断された台地の幅は600～800ｍ内外である。本遺跡と周辺の河川との比高は３～５ｍを測り、高燥化しており、桑園や畑地が周辺を占める。

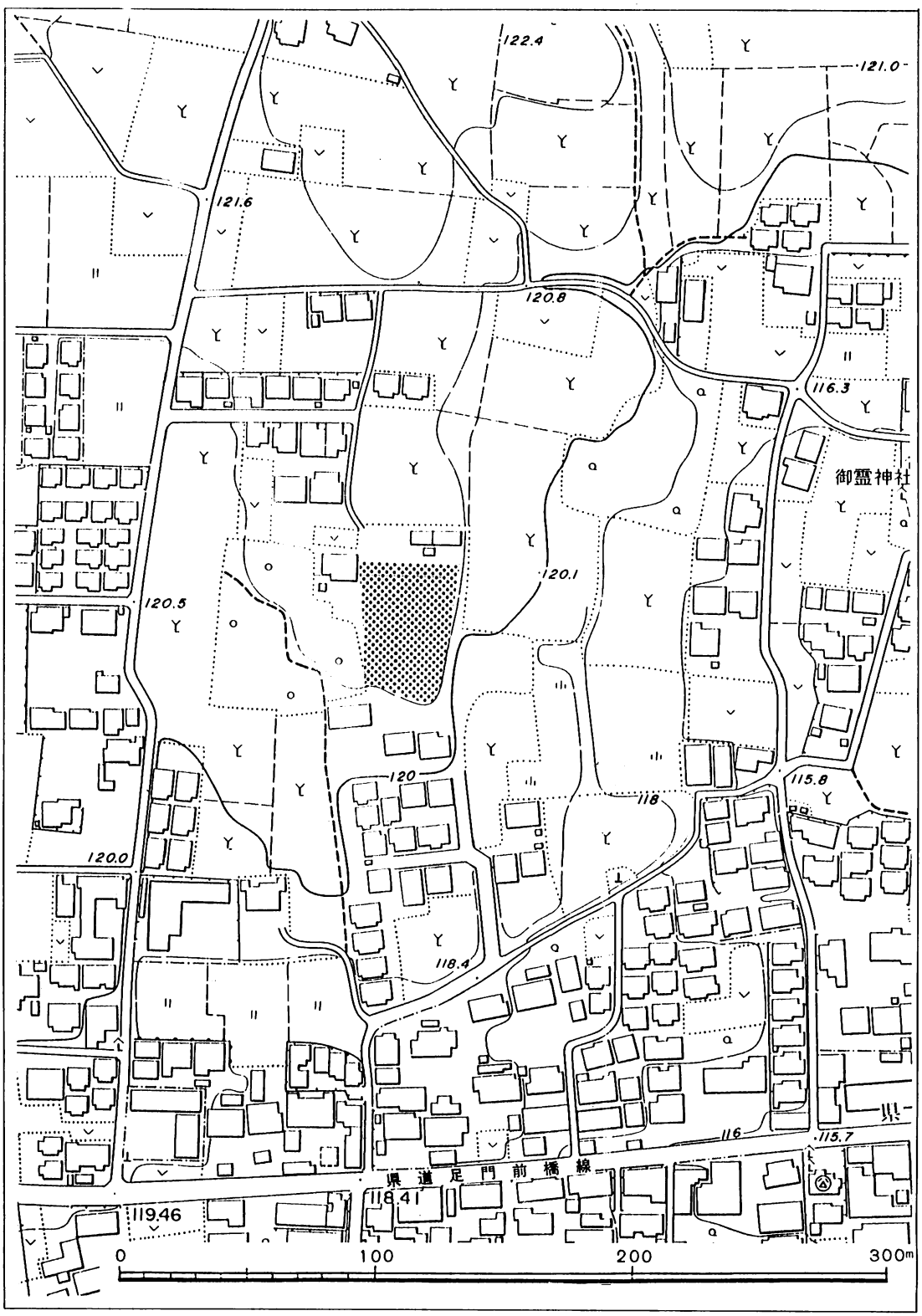
この台地上は、古くから居住地に適していたらしく、縄文時代から平安時代にかけて多くの遺跡が残されている。

遺跡の位置する前橋台地は、約24000年前の火山泥流堆積物によって形成された。そのために、それ以前の排水系が消失を受け、いたるところに沼・沢・池が形成され、上部ローム層が水成堆積をし、粘土化しているのである。遺跡の地層も表土、水成上部ローム層、砂礫層となり、これらの事実を物語っている。

また、本遺跡の周辺は、古代上野国の中枢地域であったため、極めて重要な遺跡が多く立地している。本遺跡の南東１㎞には今なお現存する総社神社があり、北西の方向0.5～0.8㎞の地点には国分僧寺、尼寺跡があり、そして、南東0.7㎞のところに八日市場城跡がある。さらに、本遺跡に隣接して上野国府推定地域がある。とりわけ注目されるのは、中世の蒼海城跡の北西隅の外堀の中に、本遺跡が含まれるかも知れないことが、寛永（かんえい）時代の蒼海城についての絵図面で明らかになったことである。

また、本遺跡周辺には、奈良・平安時代の住居址を中心とした清里南部遺跡群や柿木遺跡、奈良・平安時代の竪穴住居址、掘立柱建物址が検出された鳥羽遺跡、瓦がパン箱にして400箱弱と多量に検出され、縄文時代から奈良・平安時代の住居址が検出された国分寺中間地域遺跡、さらに、古墳時代から奈良・平安時代の住居址が検出された元総社明神遺跡、古墳時代の住居址が検出された閑泉樋遺跡があり、また、掘立柱建物址と土師器住居址７～８軒が検出された元総社小学校校庭遺跡、掘立柱建物址や井戸、溝と土師器住居址が15軒以上が検出された昌楽寺廻村東遺跡等といった遺跡が密集しており、また、多数の古墳が周辺をうずめている。

以上のように、本遺跡を含めた本地域の発掘調査の作業は、古代上野国府ひいては上野国全体を解明する上で、重要な役割と責任が課せられていると思われる。



第３図　遺跡周辺の地形（１/2500）

Ⅲ　発掘調査の経過

発掘調査の実施範囲は南北22m、東西13～14mで面積は約300m²である。そしてまず、4m四方のグリットを設定し、西から東へは算用数字、北から南へはアルファベットで呼称した。各グリッドと呼称方法は北西の杭の名称を用いている。調査は表土層を取り除いた後、グリッドを設定し、並行してプラン確認に入り、B・Mを設置した。その後、平板測量によって遺構の配置図を縮尺1/40にて作成し、各遺構の調査工程を検討した。その結果、住居址の調査については、

1　中央部でクロスするセクションベルトを設けて土層観察を行う。

2　遺物について、10cm四方以上のものは縮尺1/20により図化し、それ以下についてはドットで表記した平面図を作成する。取り上げに際しては、遺物台帳に諸属性を記録する。

3　竈の図化については、原則として縮尺1/10の図化、遺構平面図は原則として1/20にて行う。

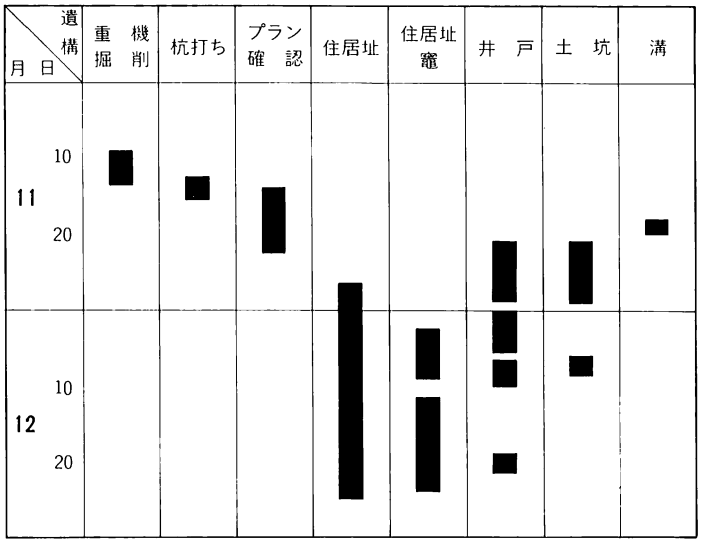
ということで、以上の方針にもとづき調査を進めた。

測量の基準点設置について、水準は日本道路公団関越自動車道（前橋－新潟線）工事現場のB・M、S1標高127.602mを移動した。平面座標については四等三角点新井（X＝＋47061.74、Y＝－74671.94）と清里土地改良事業における図根三角点D1（X＝＋47082.052、Y＝－73399.229）を利用し、本遺跡調査区内に座標を設定した。その結果、I－7グリッド杭（X＝＋43202.143、Y＝－71694.145）、L－7グリッド杭（X＝＋43190.152、Y＝－71694.598）が明らかとなり、調査区は真北からN－2°9′53″－Eを向いている。調査終了後の遺跡は埋戻され幼稚園建設が進んでいる。

発掘調査は、11月8日に発掘器材を運びこみ、翌9日には重機による表土剝ぎが始まり、12日までに遺構の全容を把握し、杭打ちと並行してプラン確認と平板測量による遺構分布図の作成を行いさらにW－2を完掘した。

そして、まず、最初に井戸跡、土坑、溝、ピットから着手し、次に住居址の調査を行うこととなった。

12月に入ってから竈の調査が各住居で始まったが特にH



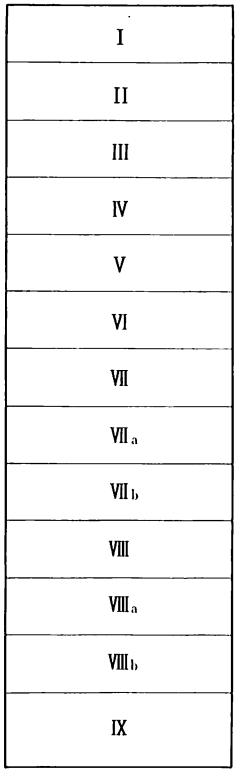
第4図　発掘の経過

－6号住居址とH－17号住居址については、構築材として瓦を始めとした多量の遺物が使用されていたため、多くの時間をかけて多くの図面と写真をとることが必要とされた。折しも厳寒の時期、雪や霜が遺構の表面を覆い作業の進渉を著しく停滞させていた。そんな中で、瀬下元雄氏の配慮のもと遺構を霜や雪から守るためのゴザやむしろが提供された，また、時間的節約を考え、遺構や地層断面の実測図を民間測量会社である関越測量㈱に委託することになった。

こうして、検出された遺構は、住居址18軒、井戸3基、土坑11基であった，

とにもかくも、ただただ忙しさの中、調査を開始してから、約1ヵ月半の後、12月24日に遺構全体写真をとることにより調査は終了した。これは、一人一人が一丸となり作業を進めた結果であった，なお、各遺構の発掘調査の経過は第4図を参照されたい，

Ⅳ 標　準　土　層



第5図　土層柱状図

発掘調査地の層位を図示すると左図の通りである。

第Ⅰ層　Ⅱ層を主体とする盛土

第Ⅱ層　灰黄褐色土層　パミスを含む。固くしまりがある，

第Ⅲ層　灰黄褐色土層　Ⅱ層とⅣ層の泥土層。Ⅱ層よりやや黒色味がかっている，

第Ⅳ層　黒褐色土層　多量のB軽石を含む，しまりやや弱い，

第Ⅴ層　黒褐色土層　C軽石を含む，F系軽石を含むか，しまり普通，

第Ⅵ層　黒褐色土層　C軽石をほとんど含まないか又は若干量。しまり普通，

第Ⅶ層　オリーブ褐色土層　ソフトローム，緻密な粒子。

第Ⅶa層　にぶい黄褐色土層　ソフトローム，緻密な粒子。

第Ⅶb層　暗オリーブ褐色土層　ソフトローム，緻密な粒子。

第Ⅷ層　オリーブ褐色土層　Ⅷa層とⅧb層の両者を包括した層。ハードローム，非常に固くしまる，

第Ⅷa層　黄褐色土層　ハードローム，非常に固くしまる，

第Ⅷb層　黄褐色土層　Ⅷa層より若干褐色味がかっている，ハードローム，非常に固くしまる，

第Ⅸ層　砂礫層　砂を主体としφ1cmの小礫が少量混入。ロームと見られる緻密な粒子も少量含む。河川堆積。

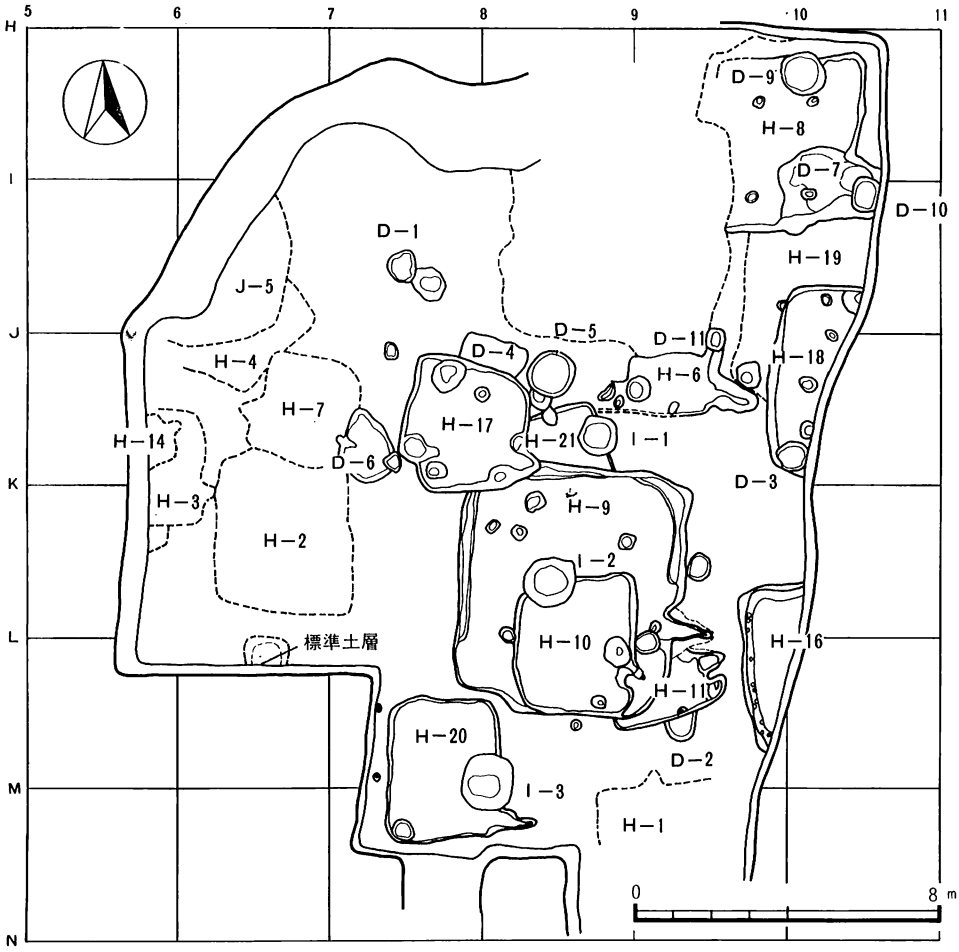
ところで、以上のように層位について述べてきたが、草作遺跡の立地する前橋台地(洪積台地)は、水はけが悪く、井戸も深く掘らなければ良い水は出ず、したがって、本格的な開発が行われたのは遅く条理制以後だといわれている，

V 遺構と遺物

遺跡の概要

今回の調査地は、地形は北西から南東にゆるやかに傾斜する平担地である。古墳・平安時代を中心とした遺跡は、主に地表下約120cmのところに堆積する地山面で検出した。地山は全体層序のⅦ層として把え、基本的にはオリーブ褐色系土層で上部ローム層が水成堆積したもので粘土化している。ところで、遺構の検出に際しては、遺構の確認が容易でなかった。さて、調査の結果、住居址、井戸、土坑、溝等が検出されこれらを検討した結果、古墳時代から平安時代にかけて集落として利用され、中世にいたって井戸が掘削されたことが判明した。

また、多くの土器と共に多数の瓦が出土し、鉄製品、陶磁器それに埴輪や縄文時代の土器片もわずかに見られた。



第6図　遺構全体図（1/200）

1．住居址

(1) 古墳時代の住居址

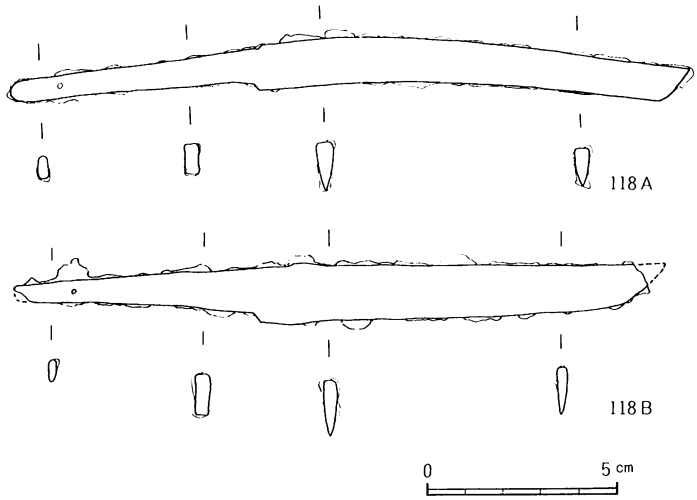
H－9号住居址

遺構　J・K・L－7・8・9グリッドに所在する。南東隅で11号住居址を、北壁側で21号井戸址を切る。本住居址の廃棄後、住居内に10号住居址と2号井戸が、南西隅を切って20号住居址が、北西隅を切って17号住居址を構築する。本住居址は本遺跡では際立って大規模な住居址である。

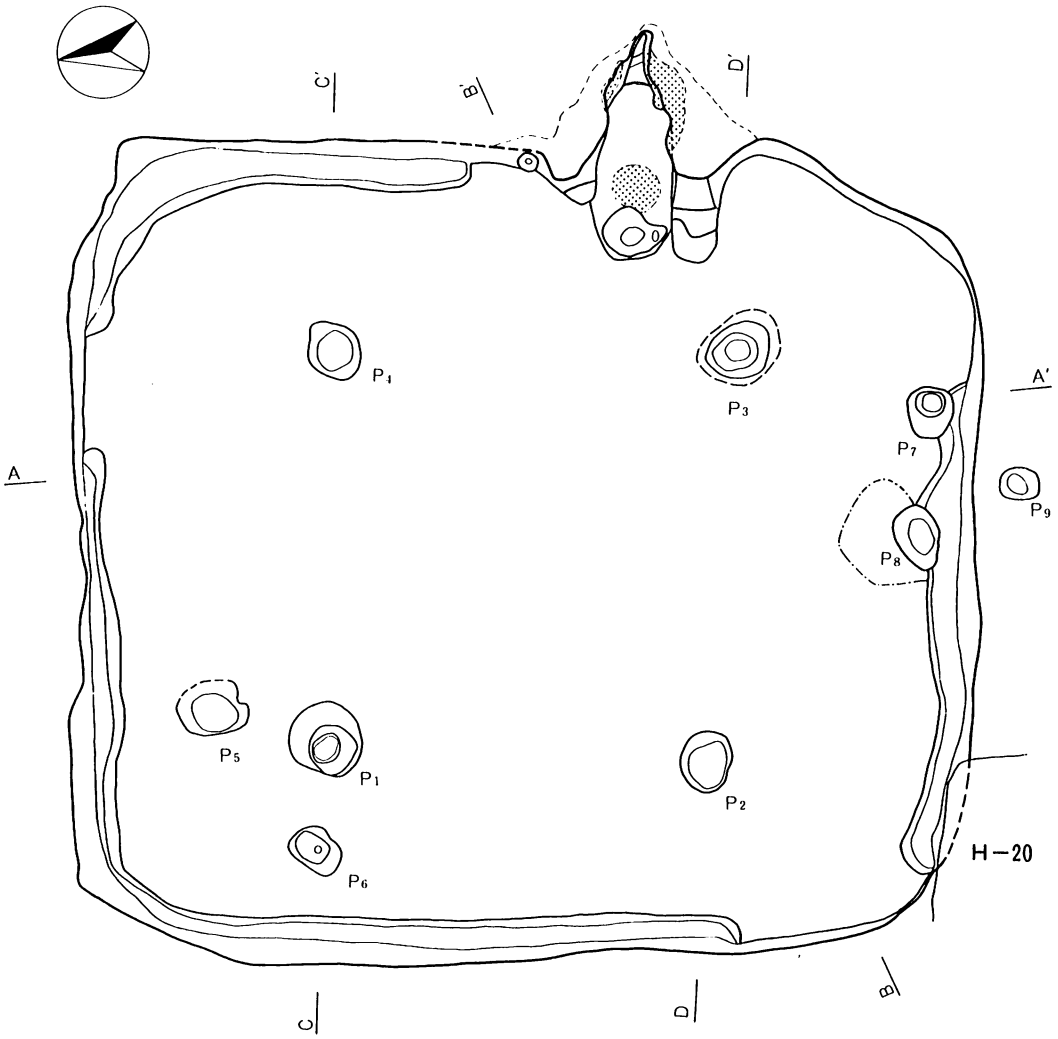
形状は隅丸長方形で、東壁南側を欠く。規模は最大で南北6.52m、東西5.90m、面積36.2m²を測る。主軸方位はN－97°－Eである。壁高は検出面から最大50cmを測る。壁下には、竈と南東隅付近を除き、深さ5～10cmの周溝を巡らす。床は地山のⅨ層をそのまま床面とする。床面の堅緻部分は南壁下中央部の所のみで、ここはP_7(深さ29.5cm)・P_8(深さ23.5cm)と住居外のP_9(深さ32cm)の存在とも考え合わせ、住居の出入口部と推測される。床面の対角線上には、深さ64～68.5cmの柱穴が4本検出された。柱穴間の中心距離は、$P_1-P_2=2.75$m、$P_2-P_3=3.00$m、$P_3-P_4=2.90$m、$P_4-P_1=2.85$mを測る。P_1とP_3は底部を2段にする。また、P_1とP_3には柱痕を残すがその径は20cm弱である。P_1に隣接するP_5(深さ17cm)、P_6(深さ29cm)は性格不明である。

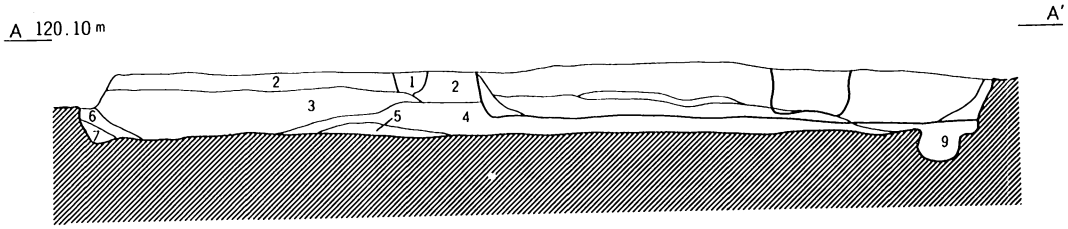
竈　東壁南寄りに付設する。竈は掘形掘削後、底部を除く内面にシルト質の黄褐色粘質をまく。火床面は地山のままである。構築材に石・瓦・土器等が使用された形跡はない。灰かき穴(深さ11cm)及びそれに続く火床面の円形の強い焼けから考えて、両者の接点が焚口と考えられる。これを基準に竈の規模を計測すると、全長1.27m、焚口部幅55cm、燃焼部長90cmを測る。火床面は床面とほぼ同じレベルである。

出土遺物　土師器が中心で、小量の須恵器と若干の鉄滓・鉄製品を出土する。南壁下のP_8～西約1.5mの床面上には集中して小さな長石(転石)、土師器甕(150)、同坏(135・147)等が出土し注目された。また、南西隅付近では鉄製刀子(118)2本が重なって、北東隅付近では釘状鉄製品(208)が、いずれも床面から10cm前後浮いて出土した。これらは出土状態からみて、本住居と関連を持つ遺物と推測される。なお、須恵器305・309は床面上で、同97・107は覆土中から出土した。



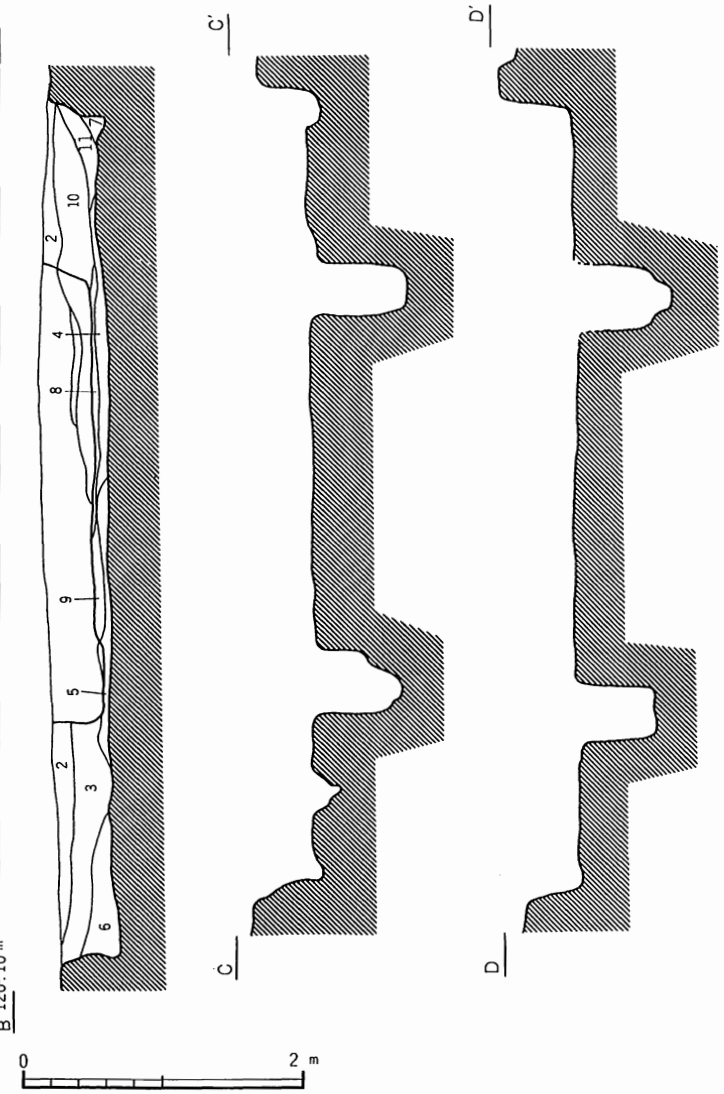
第7図　H－9号住居址出土遺物(1/2)



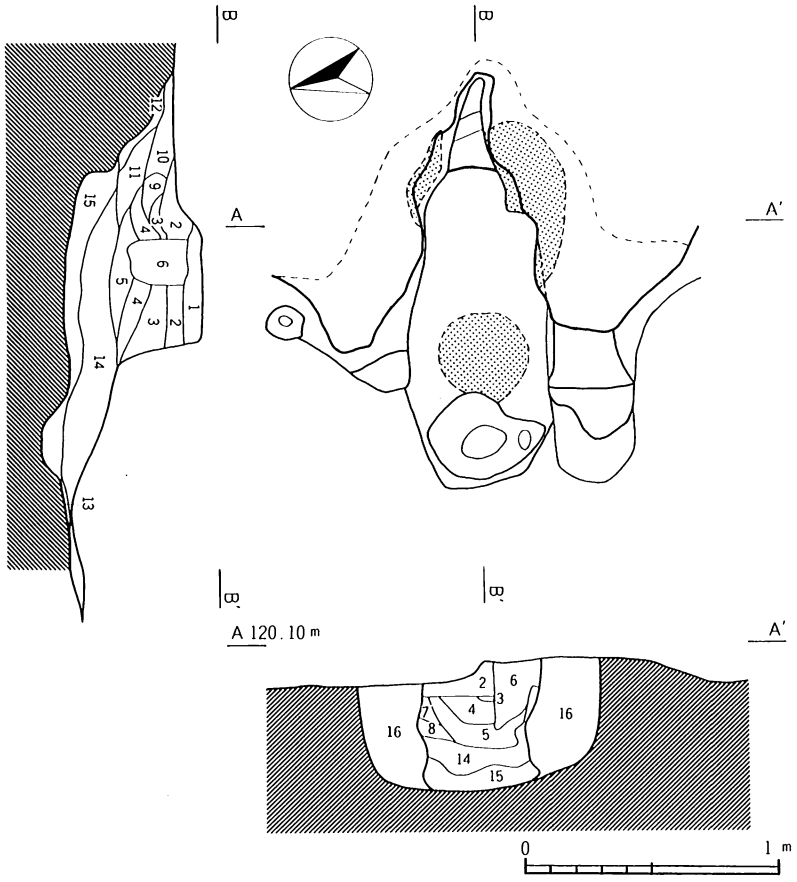


1層　10YR3/3暗褐　B軽石を多く含む砂質土。しまり弱い。
2層　10YR4/4褐　焼土粒2％、C軽石含む。
3層　10YR3/4暗褐 φ1cmのロームブロック（Ⅷ層）と焼土ブロック1％、全体にローム粒をやや多く含む、しまり良好、C軽石含む。
4層　10YR5/3にぶい黄褐 φ3～10mmの焼土ブロック3％、シルト状の黄灰色ブロック（φ5～10mm）3％含む。全体にやや白味がかる。しまり良好、C軽石含む。
5層　10YR4/4褐φ5mmのロームブロック（Ⅷ層）5％、全体にローム粒を多く含む。やや固くしまる。C軽石を含む。
6層　10YR2/2黒褐 φ2～3mmのロームブロック3％、しまり普通、若干のC軽石を含む。
7層　10YR2/2黒褐 φ2～30mmのロームブロック3％、しまり弱い、全体にローム粒を含む。
8層　10YR3/2黒
9層　10YR3/2黒
10層　10YR3/4暗
ックの大き
11層　10YR3/4暗

第8図　H－9号住居址（1/60）

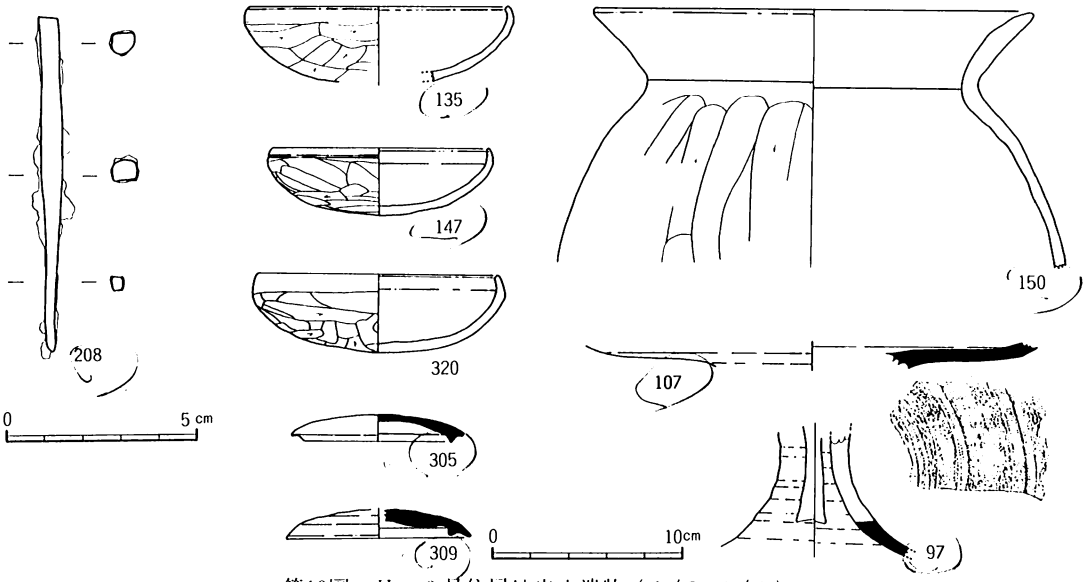


部分的に黒色炭化物を厚さ5㎜位で層状に含む。踏みしめられて固くしまる。
焼土粒、炭化物を少量含む。しまり弱い、C軽石含む。
基本的に9層に似た構成であるが、全体に白色味が一層強く、シルト状ブロ
もの（φ50㎜）を少量含む。しまり良好。
比較的混入物が少ない。しまりやや弱い。



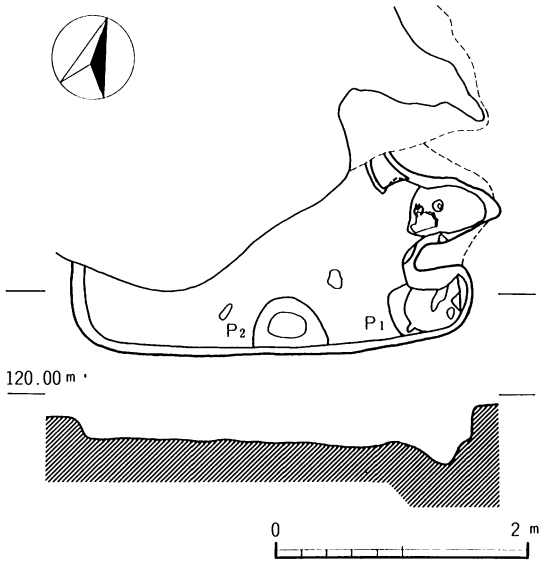
1層　10YR3/3暗褐　焼土ブロック3%、C軽石含む。
2層　10YR3/4暗褐　焼土シルト1%、C軽石含む。
3層　10YR4/3にぶい黄褐　焼土7%、C軽石含む。
4層　10YR5/3にぶい黄褐　焼土7%、C軽石含む。
5層　10YR5/3にぶい黄褐　焼土、シルト5%含む。
6層　10YR3/3暗褐　B軽石を多量に含む砂質層。
7層　10YR4/3にぶい黄褐　シルトブロック2%含む。
8層　10YR4/3にぶい黄褐　焼土5%含む。
9層　10YR5/3にぶい黄褐　シルト主体層、しまり良。
10層　7.5YR5/4にぶい褐　焼土40%含む。固くしまる。
11層　7.5/3にぶい褐
12層　10YR6/3にぶい黄橙　シルト多い。しまり有り。
13層　10YR2/3黒褐　焼土含む。
14層　10YR5/3にぶい褐　焼土10%、灰、炭化物含む。
15層　10YR6/1褐灰　灰主体層焼土ブロック7%含む。
16層　10YR4/3にぶい黄褐　シルト10%含む。

第9図　H－9号住居址竈（1/30）



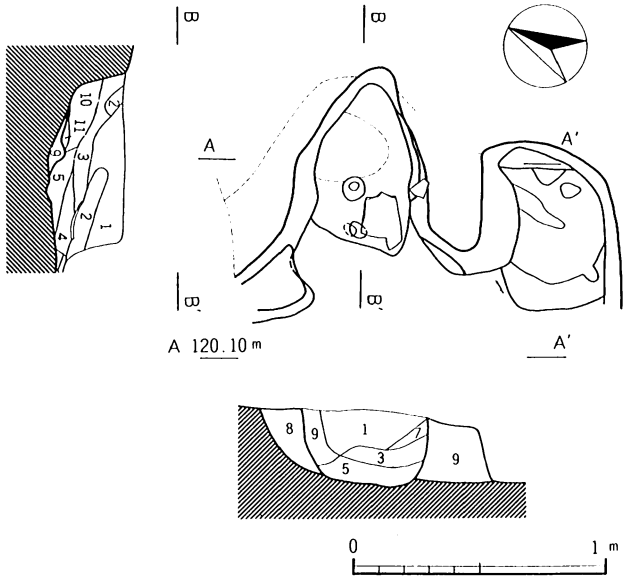
第10図　H－9号住居址出土遺物（1/2・1/4）

H－11号住居址



第11図　H－11号住居址（1/60）

遺構　L－8・9グリットに位置する竪穴住居址である。形状は隅丸長方形と推定されるが、竈から北側の大部分がH－9号住居址により切られているため、全体の形状は不明である。確認された長軸・短軸寸法は、長軸（南北）寸法が1.5mで短軸（東西）寸法が3.16mである。柱穴については確認されず、また、ないものと推定される。周溝は確認されなかった。貯蔵穴（P_1）は住居址の南東隅に位置し、竈のすぐ南側にある。長径66cm、短径40cm、深さ20cmを測る。また、貯蔵穴覆土中には多量の灰や焼土粒、焼土ブロックが含まれていた。この貯蔵穴の北壁は竈袖部となっている。主軸方位は、N－68.5°－Eである。壁高は、確認壁高で33cmを測る。壁の状況は、南壁がゆるやかな孤を描くようになっている。床面は、地山のⅦ層下端ないし、Ⅷ層上端をそのまま利用していて、固く踏みしめられた堅緻面はない。南壁下中央部付近に位置するP_2は、長径58cm、短径40cmで、深さは約10cmを測る。H－9号住居址にも同じ位置に小さなピットがあり、時代的にもほぼ同時代と考



1層　10YR3/3暗褐　シルト状ブロック3%、C軽石を含む。しまり有り。
2層　10YR5/3にぶい黄橙　シルト状黄灰色土主体。やや粘性有り、しまり良好。
3層　10YR3/3暗褐　φ2～5mmの焼土3%含む。
4層　10YR5/3にぶい黄褐　φ20～30mmの固い焼土ブロック40%、灰15%含む。
5層　10YR4/1褐灰　灰層でφ2mmの焼土ブロック3%含む。
6層　10YR2/3黒褐　黄灰色ブロック5%、黒灰を多く含む。やや固くしまる。
7層　7.5YR3/4暗褐　φ10mmの焼土ブロック7%含む。
8層　7.5YR3/3暗褐　C軽石、ローム、黄灰色土含む。
9層　7.5YR5/2灰褐　シルト粒を多量に含み、やや粘性を帯びる。しまり良好。
10層　10YR3/3暗褐　φ2～10mmの焼土10%、焼土粒の多い炭化物と灰5%含む。
11層　10YR3/3暗褐　φ5mmの焼土5%、炭化物と灰3%含む。

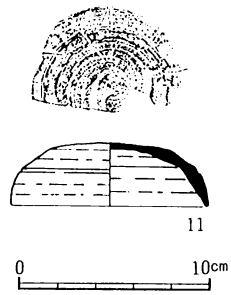
第12図　H－11号住居址竈（1/30）

えられるものである。H－10号住居址同様、その位置から出入口施設に係わるものと考えられるかも知れない。

竈　東壁やや南よりに位置するが、東壁の大部分はH－9号住居址に切られているため詳細な位置関係は不明。残存状態は余り良くなく天井部が落ちている状態で検出され（竈地断2・4層）、側壁上部は検出時或はそれ以前に破壊されている。掘形にシルト質の灰褐灰色土を埋めて竈内面とする。火床面の一部にも同様な造作が見られた。火床面中央部には支柱を立てた痕跡とみられる小ピットがある。覆土中には天井崩落層（シルト質灰褐色土）があり、この中に須恵器大甕片があった。架構材として利用されたものとも考えられる。

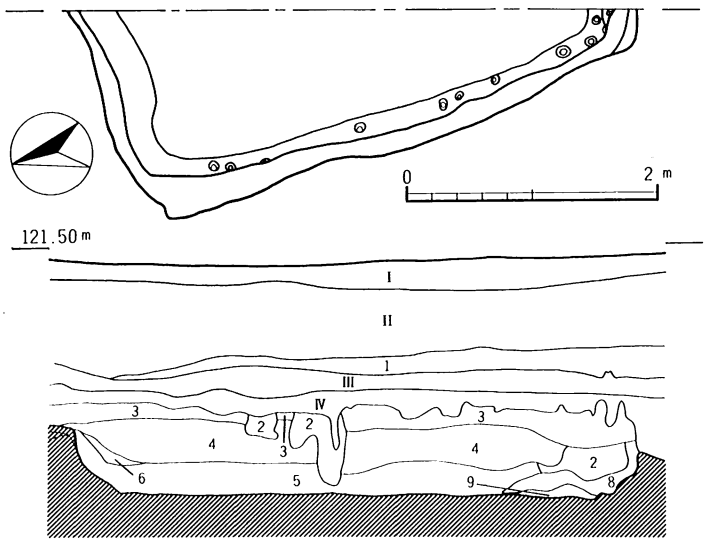
出土遺物　本址の出土遺物は土師器6点、須恵器6点と、このほかに、安山岩が3点出土している。この中には須恵器坏蓋があり、陶邑TK217型式併行かも知れない。

以上のことから本住居址は、古墳時代のものと推定される。



第13図　H－11号住居址出土遺物(1/4)

H－16号住居址



1層　5Y⅔オリーブ黄　砂質を含む。シルト状か火山灰状。発泡した砂は含まない。しまり良好。
2層　10YR⅓にぶい黄褐　3層、4層Ⅳ層の混土層。
3層　10YR⅔灰黄褐　C軽石含む。しまりやや有り。
4層　10YR⅔褐　Ⅷa層小ブロック1％含む。C軽石混じる。
5層　10YR⅓にぶい黄褐　Ⅷa小ブロックφ5～20mmを7％含む。
6層　10YR⅔黒褐　しまり弱い。
7層　10YR⅓にぶい黄褐　Ⅷa小ブロックφ5～20mmを70％含む。しまり弱い。
8層　10YR⅔暗褐　C軽石少なく、しまり弱い。
9層　10YR⅓にぶい黄褐　Ⅷa小ブロック混入、しまり弱い。

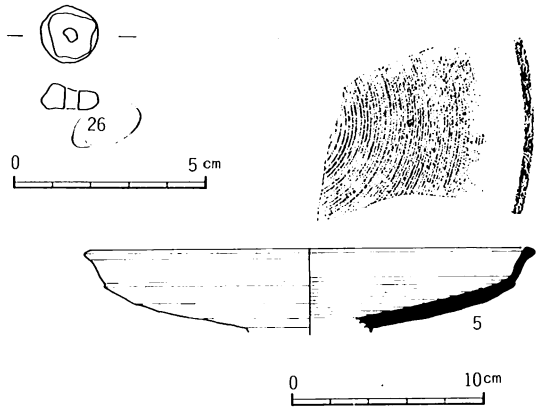
第14図　H－16号住居址（1/60）

遺構　これは、遺跡南東隅に¼～⅕ほど検出された方形あるいは長方形と推定される竪穴住居址である。大部分が調査地区外にあるため、全体を発掘し全容をつかむには至らなかった。そのため、長軸・短軸寸法、住居址面積は測定できない。柱穴も遺物から古墳時代と考えられることから、存在が予想されたが、調査地区外部分に含まれるものと思われる。周溝は検出されなかった。貯蔵穴は調査地区外部分に検出されるかもしれない。主軸はN－100°－Eと推定するにとどまった。

土層は基本的には3層で、レンズ状に堆積している。上、中層にはC軽石が含まれている。壁高は44cmを確認し、地断から55cmと推定した。壁は平均73°で、やや傾むくが、しっかりした形で、直線的に検出されている。西壁と北壁の一部とが検出されたが、他は調査地区外である。床は標準土層の第V層を切りこんで造られていた。わずかに貼り床が検出された。掘り方面の凹凸を調節していた。壁面から床面に続く位置に径10cm、深さ10～30cmほどのピットを13個検出した。壁に伴う施設のものと考えられた。

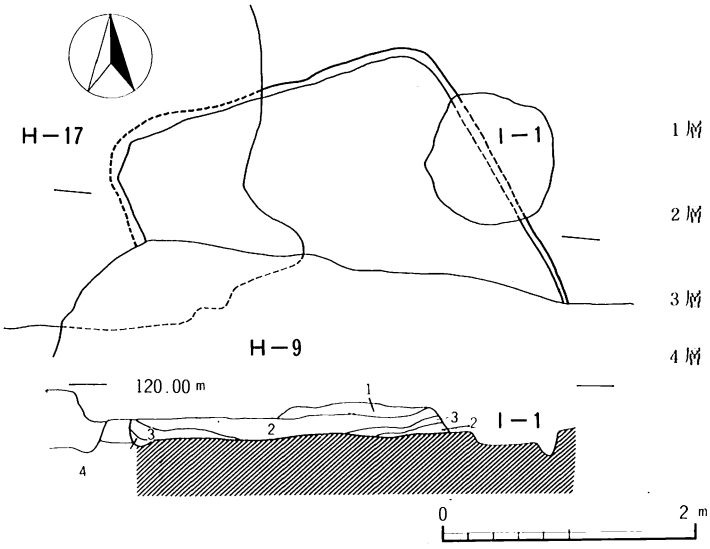
竈　住居址の年代から考えて、存在が予想されたが、調査地区外部分に存在するものらしく、検出できなかった。

出土遺物　出土は27点で、実測可能なものは、土師の甕と、須恵の高坏、滑石製の臼玉である。高坏は無高台盤の模倣と考えられるものである。7世紀第Ⅲ四半期ころのものか。



第15図　H－16号住居址出土遺物（1/2・1/4）

H－21号住居址



1層　10YR3/4暗褐 φ10～40mmロームブロック1％ φ3～5mm焼土ブロック1％、C軽石含む。しまり良好。

2層　10YR4/3にぶい黄褐　ややローム粒が多く褐色味がかかる。φ10～40mmロームブロック(Ⅷ層)3％、C軽石含む。しまり有り。

3層　10YR3/2黒褐　φ5～10mmロームブロック(Ⅷ層)1％、やや固くしまる。C多し。

4層　10YR5/3にぶい黄褐　ローム粒、ロームブロック(φ10mm)40％、しまり弱い。

第16図　H－21号住居址（1/60）

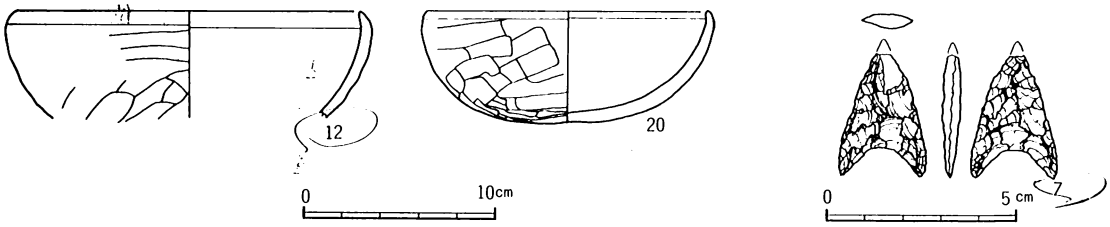
遺構　遺跡中央付近に検出された、隅丸方形か隅丸長方形と推定される竪穴住居址。2/3近くを重複のために掘り取られており、全容をつかむには至らなかった。形状は平行四辺形に近いかもしれない。長軸・短軸の寸法、住居面積も測定できない。柱穴も住居址の年代から考え、存在を予

想したが、検出できなかった。周溝は検出されなかった。貯蔵穴も、遺跡内の同時期のものから考えて存在が予想されたが、重複により掘り取られた部分にあったと推定され、検出することはできなかった。主軸方位も、これだけの検出状況では、決定することはできない。土層は、基本的に3層を確認した。レンズ状に堆積しており、C軽石を含む層である。確認壁高は26cmであるが、原状の壁高がどれくらいであるか推定できなかった。壁は、平均82°で、ほとんど垂直に近いが、重複のため、北壁と東壁の一部を検出したにとどまった。床は標準土層の第Ⅷ層を切りこんでいる様子が確認されたが、その上の土層が、重複により掘りとられており、当時の地山が、第何層であったか、確認できなかった。床面はほぼ平坦で、貼り床もなかった。

竈　竈の存在が予想されたが、重複のため掘りとられたものらしく、検出できなかった。床面近くから砂岩の焼石が検出されており、関係があるのかも知れない。

出土遺物　42点の遺物が出土したが、実測できたものは、土師の坏、甕と石鏃である。坏は2点とも大型のものである。若干口縁が内湾している。器形から考えると、真間期のものと思われる。

なお、重複関係を示すと、H－21→H－9→H－17→I－1の順となり、H－21とH－9は遺物から考えて古墳時代、H－17は平安時代、I－1は中世のものと考えられる。またH－21の北に、重複する形で、竈が検出されたが、北に焚き口をもち、北の重複する土坑に灰を多量に流出させていたことから考え、同じ古墳時代のものではあるが、H－21より新しいものと判定した。内部から古墳時代の土器1片だけが出土している。

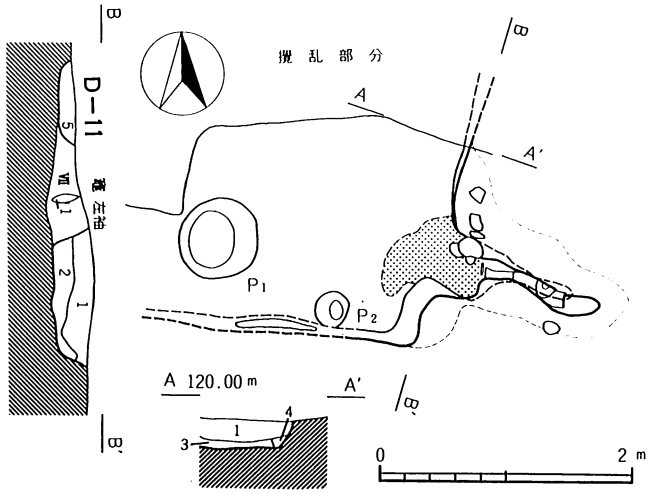


第17図　H－21号住居址出土遺物（1/2・1/4）

(2) 平安時代の住居址

H－6号住居址

遺構　遺跡中央やや東寄りに存し、J－8・9グリットに位置する。D－11土坑と重複関係にあり、本址の方が古い。プランは、東壁、竈、南壁の一部を確認したのみで、北西部に攪乱が入り全体を確認できなかった。しかし、東壁、南壁、竈の位置等から横長の長方形と推定される。確認面からの壁高は20cmで、残存状態が悪く、壁の位置を平面的に確認したにとどまった。周溝は南壁東側でわずかに確認された。幅4～6cm、長さ56cmを測る。また、住居址南西隅で貯蔵穴と思われるピット（P_1）を検出した。長径66cm、短径62cm、深さ45cmを測り形状は円形である。さらに住居址南側にピット（P_2）が検出された。円形を呈し、長径28cm、短径26cm、深さ15cmを測



住居覆土は、標準層位第Ⅴ層に相当する。
1層　10YR3/3暗褐　C軽石と少量の焼土粒を含む。しまりやや弱い。
2層　10YR3/3暗褐　粘性の強い黒褐色土(10YR2/2)ブロック(φ30～50㎜)5％含む。1層よりC軽石は少ない。φ5㎜の焼土ブロック2％含む。
3層　10YR5/3にぶい黄褐　Ⅶ層粒多い。しまり弱い。
4層　10YR5/3にぶい黄褐　Ⅶ層粒子多い。しまり弱い。

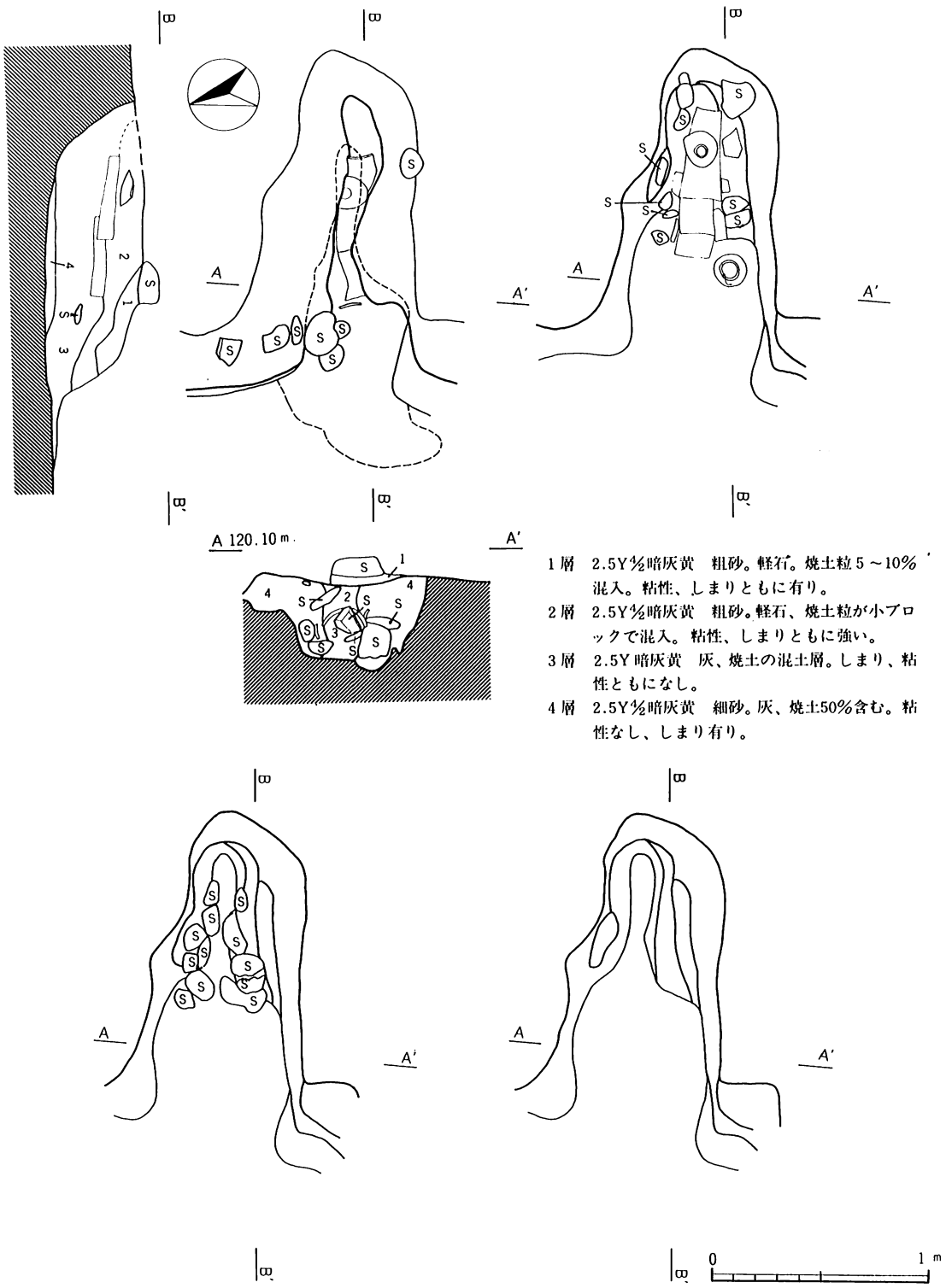
土坑覆土は、標準層位第Ⅳ層に相当する。
5層　10YR3/4暗褐　やや多量のB軽石を含み砂質。しまり弱い。

第18図　H－6号住居址（1/60）

る。土層は5層を確認し、レンズ状に堆積していた。そして、上位の層にはC軽石が混入し、これは標準土層の第Ⅴ層にあたる。床面は標準土層第Ⅶ層を掘り込んで造られている。北半分も攪乱によってあらされており、1/3ほどを確認したのみである。床面はほぼ平坦で、竈の前に灰と焼土の流出が見られた。

竈　住居址東壁やや南にあたると思われるが、北壁を検出していないため、位置を確定することはできない。主軸方位は、N－105°－Eである。燃焼部天井と右袖石を欠くくらいで、ほぼ完全な形で検出された。これは構架材には石、瓦を用い、粘性のある土で造られていたためと思われる。地山を掘り込み、煙道部分に円礫とワレを置き、その上に瓦を置き煙道としている。燃焼部も同様と思われる。煙道部12個の石のうち、2個は同一個体を二つに割ったものである。石は花こう岩と安山岩で、いずれも焼成を受け、炭化物が付着していた。焚口部幅は35cmほど、燃焼部長50cm幅55cmである。高さは25cmほどと推定した。左側に石がすえてあり、天井部の土台石とも思われた。煙道部は左に5個右に7個の円礫と礫をすえ、No.61とNo.62の丸瓦2枚を一部重ねあわせて天井とし、上に粘性のある土をかぶせていた。外側の瓦No.62の上に皿が1枚、逆位で出土したが、煙出し部の補強かもしれない。煙道部長60cm、幅10～15cm。支脚については、すえた跡も検出されていない。竈内からは、羽釜、甕、埦が出土している。

出土遺物　65点出土している。うち、竈内からは18点検出されており、比較的実測に耐えるものが多い。また遺跡内の平安時代の住居に共通して瓦の使用が多く、1つの特徴になっている。遺物は、羽釜、甕、埦、瓦、鉄滓である。羽釜は口縁が比較的長いもので、つばが三角形の断面をしている。使用によるものか、竈内にあったためか、すすが付着している。鉄滓は、他の住居址からも検出され、他の鉄製品の存在と共に、近くにたたらの存在を予想させた。



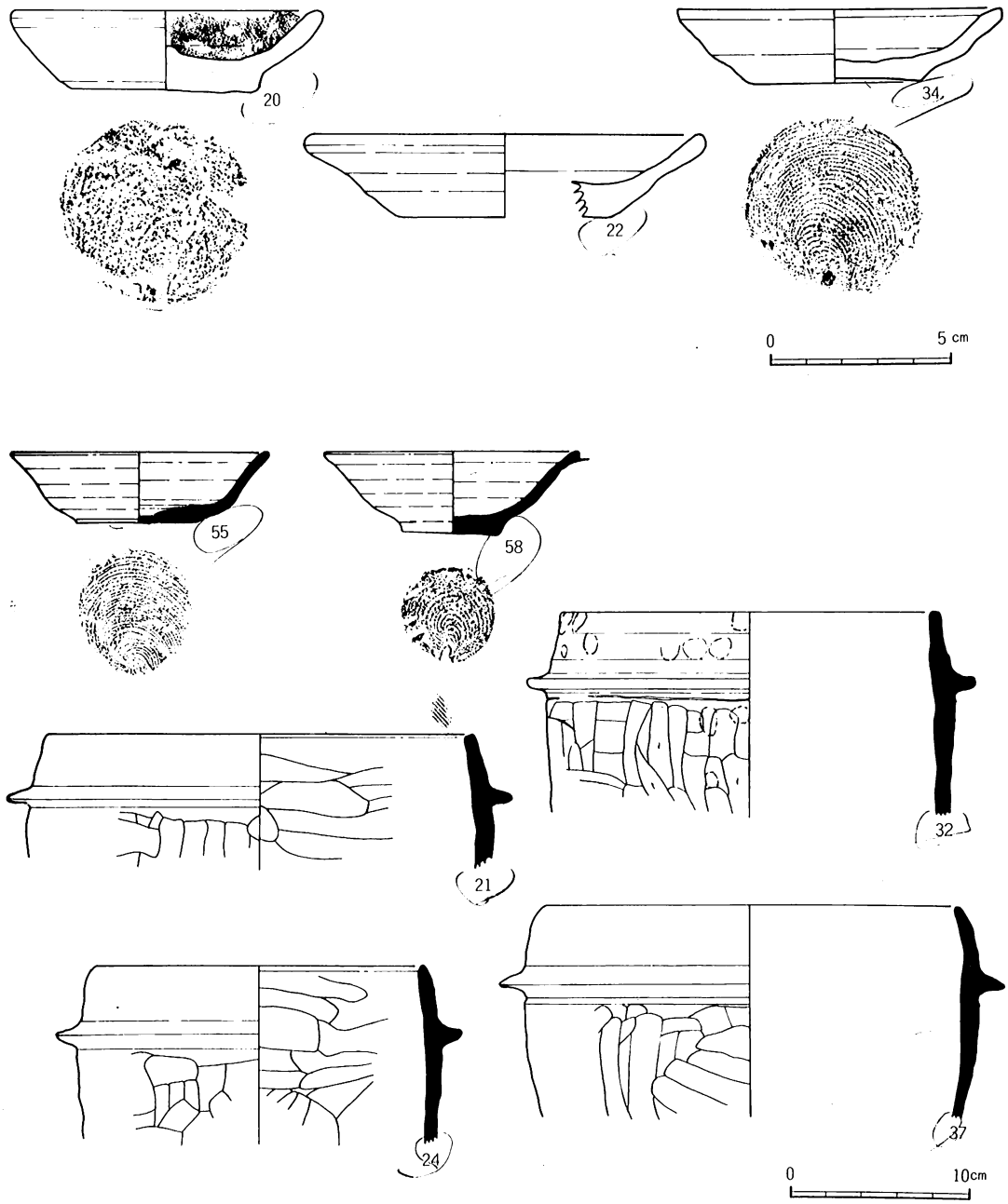
1 層　2.5Y ½暗灰黄　粗砂。軽石。焼土粒 5 ～10%混入。粘性、しまりともに有り。

2 層　2.5Y ½暗灰黄　粗砂。軽石、焼土粒が小ブロックで混入。粘性、しまりともに強い。

3 層　2.5Y 暗灰黄　灰、焼土の混土層。しまり、粘性ともになし。

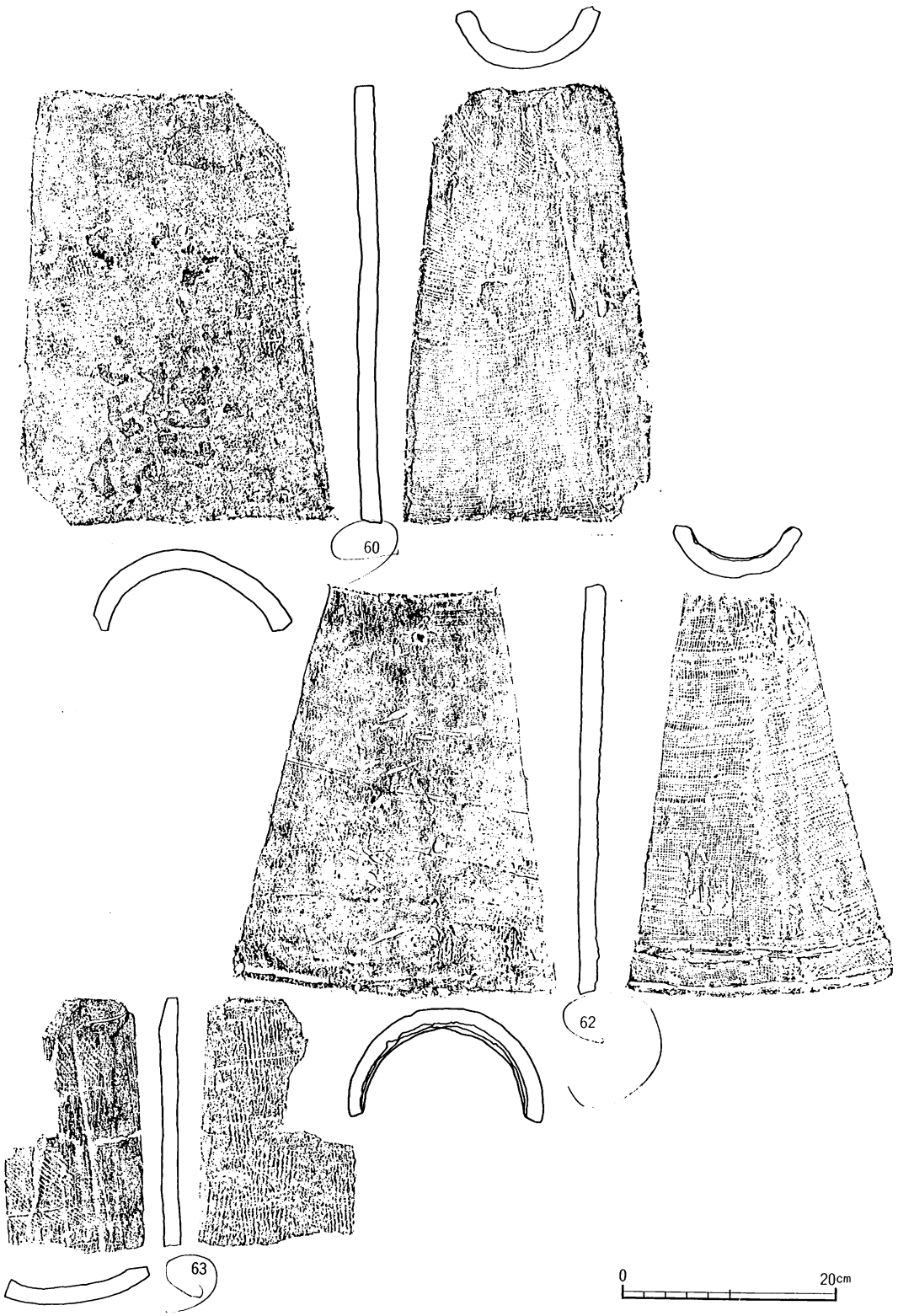
4 層　2.5Y ½暗灰黄　細砂。灰、焼土50%含む。粘性なし、しまり有り。

第19図　H－6 号住居址竈（1/30）



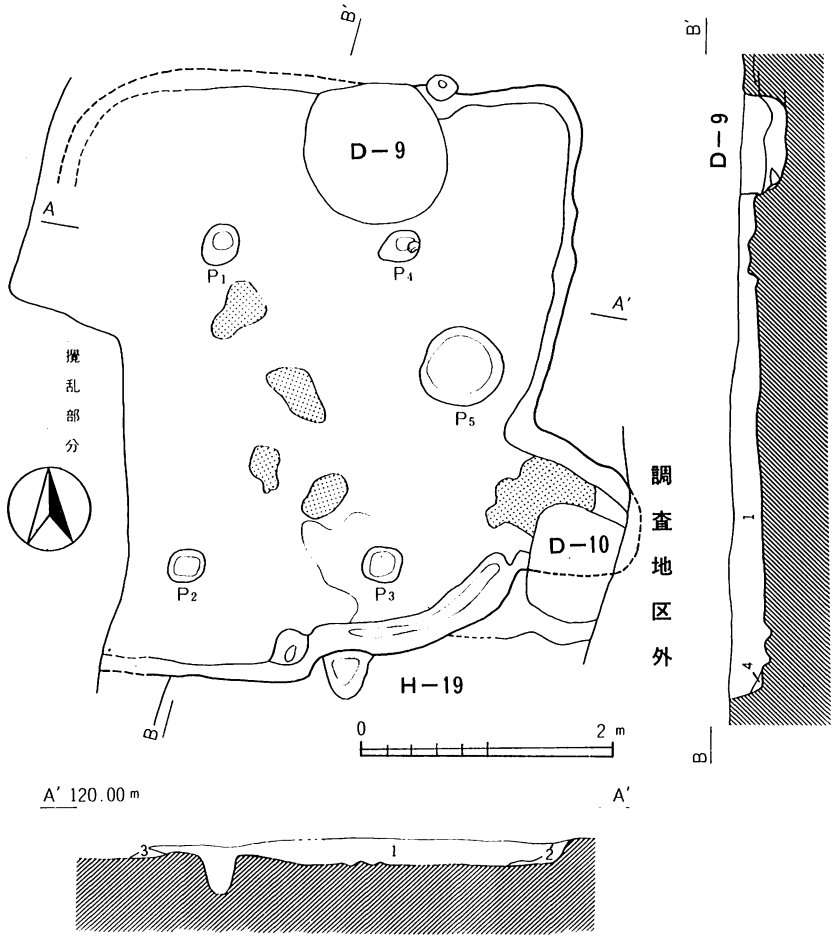
第20図 H－6号住居址出土遺物（1／2・1／4）

松田猛氏の御教示によれば、No.62の瓦は、山王廃寺の古い時代の六葉単弁の軒丸瓦に近い瓦の丸瓦部で、厚い瓦当がはめこまれていたと推定されるものである。内に布、外に粘土板の接合痕がある，秋間古窯と思われるものとのことであった。また、No.63、65の瓦は、17号住居址のNo.165の瓦と同一個体であることも指摘された，



第21図　H－6号住居址出土遺物（1/6）

H－8号住居址



1層　10YR3/3暗褐 Ⅷ層ロームブロック2%、C軽石、焼土粒を若干含む。
2層　10YR4/3にぶい黄褐多量のローム粒、若干のC軽石を含む。しまり弱い。
3層　10YR2/3黒褐 Ⅷ層ロームブロックφ15～30mmを7%、若干のC軽石含む。しまりやや弱い。
4層　10YR5/4にぶい黄褐　多量のローム粒が混入する。しまり弱い。

第22図　H－8号住居址（1/60）

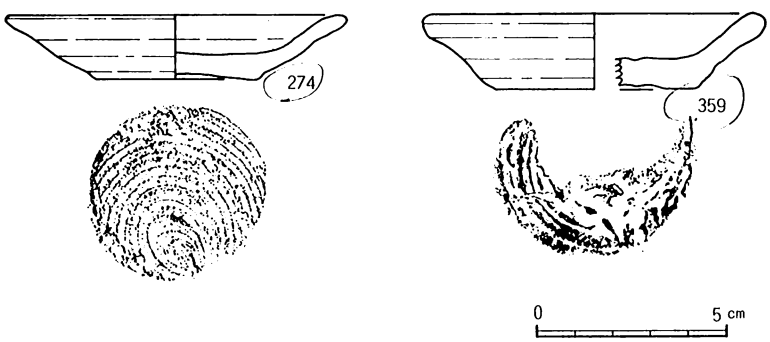
遺構　遺跡北東隅　H・I－9・10グリッドから検出された不整隅丸方形の竪穴住居址。西壁は北は検出面が深かったこと、南はごみ穴による撹乱により破壊され、壁のあり方や方向は不明である。北壁と南壁西半は、ほぼ平行になっている。住居址長軸は4.78m、短軸は約4mを測ったが、面積を出すには至らなかった。柱穴は4本を確認した。対角線でなく、軸対称に造られている。P_1、35×29cm、深さ28.5cm、P_2、32×28cm、深さ18cm、P_3、32×28cm、深さ35cm、P_4、36×24cm、深さ24.5cmである。柱穴間寸法はN1.43m、S1.54m、E2.54m、W2.60mである。周溝は南壁東半分から検出されている。幅15～20cm、深さ8cm前後である。貯蔵穴は、竈左袖部に検出されたP_5が該当すると思われるが、この遺跡の同時代の住居址の例から考えて、南西隅に存在が予想されたが、ごみ穴による撹乱と重複しており、確認することはできなかった。主軸方位は、N－93°－Eである。土層は、壁付近を除いて1層(暗褐色土)を検出したのみである。壁高は、地断を測った

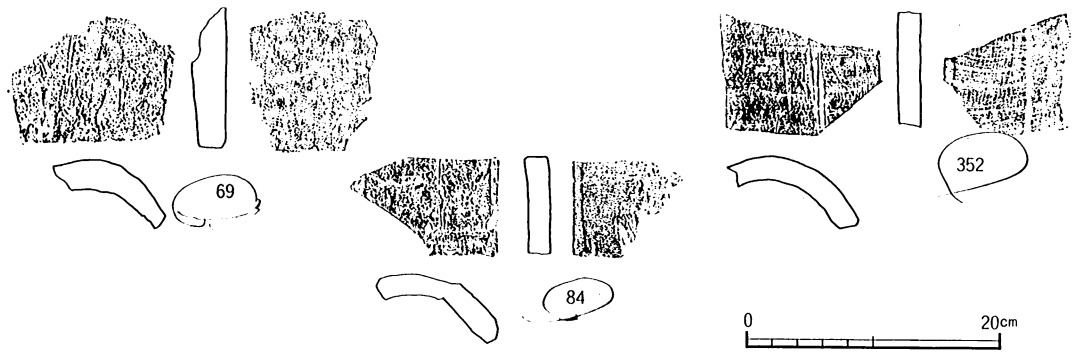
ところで26cmであったが、原状の壁高を推定できなかった。壁の傾斜は、50～72°で、平均60度ほどであり、やや傾いている。北壁と南壁西半は、ほぼ直線的でほぼ平行、東壁と南壁東半は孤を描くようにして造られている。南側中央部P_6の所で、カギ型に直角に折れており、西半分が張り出し状になっている。床面は、標準土層の第7層をそのまま使っている。表面は全体に固くなっている。床面中央に四ヶ所焼けている所が検出されている。貯蔵穴と思われるP_5は66×63cm深さ31cm、南壁中央にあるP_6は38×36cm、深さ17cmである。北壁東よりのP_7は24×20cm、深さ20cmであるが、これは検出面からの深さで、床面からは9cmである。このP_6・P_7は、この住居址に属すものか不明である。またP_2～P_3の間に床下土坑が検出されている。1.5m×1.93m、深さ22.5cmであり、P_3周辺の不定形のくぼみも、この土坑の一部の可能性が大きい。また柱穴の配置は、全体に南に寄っており、南壁西端の所が入口部とも考えられる。

竈　住居址南東隅に造られ、ほぼ全体が住居址外に張り出している。井戸状の土坑(D－10)に切られ、先端は未調査区に入る。掘り方そのままを使用面としている。燃焼部左側壁の先端部に近い所に瓦が2枚置かれており、側壁部の構架材と考えられる。竈主軸は確定できないが、住居址主軸より南へ傾いている。焚口部幅70cm、長さは現状で116cmであり、焼土が分布していた。

出土遺物　126点の遺物が出土しているが、実測可能なものは、No.274、No.359のカワラケ皿2点であった。No.359は灯明皿と思われるもので、底面周辺に煤が付着していた。竈から検出された瓦は3点で、内2点は同一個体であった。瓦の使用は、この遺跡の平安時代のものに共通しているものである。

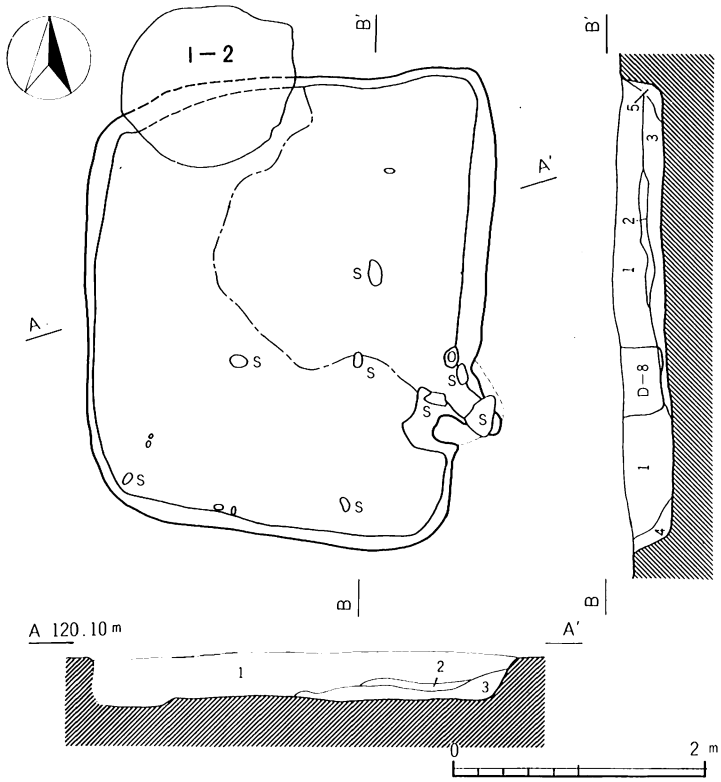
なお、新旧関係は、H-19→H-8→D-9かD-10となる。





第23図 H－8号住居址出土遺物（1/2・1/6）

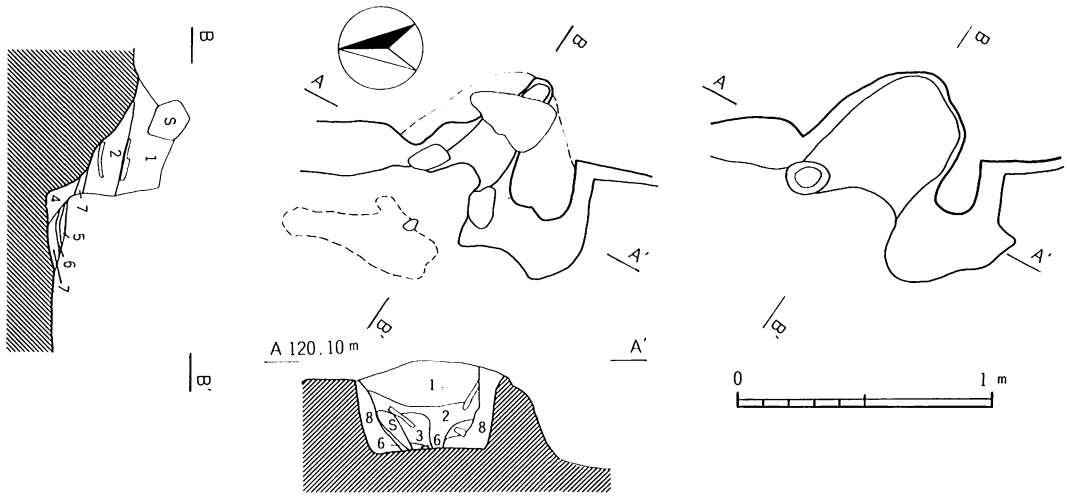
H－10号住居址



1層　10YR⅔黒褐　Ⅷa小ブロック7％混入、焼土とC軽石少量、炭化物5％、しまりやや弱い。
2層　10YR⅔黒褐　しまり強い、やや褐色味がある。焼土3％。
3層　10YR⅔黒褐　しまり普通、φ5㎜の炭化物5％、1層にくらべてC軽石が少ない。
4層　10YR⅔暗褐　Ⅶ層粒子を比較的多く含む。しまり普通。C軽石や炭化物を含まない。
5層　10YR⅔黒褐　基本的には1層と同じだが、やや褐色味が強い。しまりやや弱い。
これらの土は、基本的には、標準層位、第Ⅴ層に相当する。

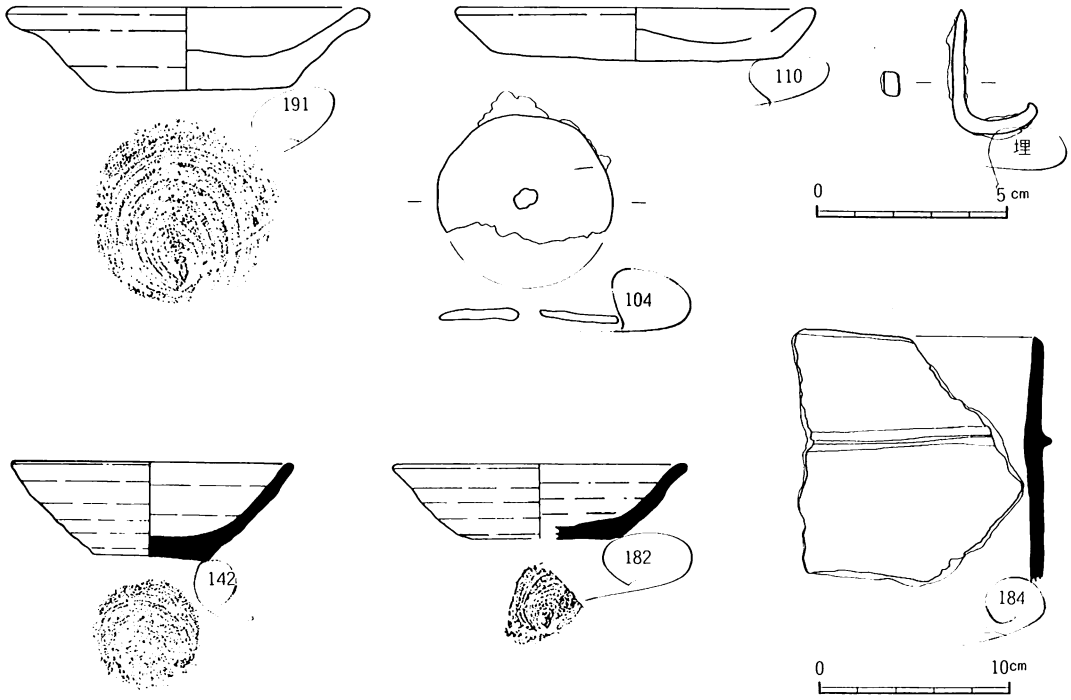
第24図　H－10号住居址（1/60）

遺構　調査区中央南寄りのK・L－8グリッドに位置する。H－9号住居址の廃棄後、その内側に構築されたもので、同住居址床面の5～12㎝上部に床面を置く。北東隅付近は中世のI－2号井戸により切られる。周囲のH－6・17・20号住居址とは、遺構の規模・方位・遺物相からみてほぼ同時代のものであり、これらで単位集団を成すものともみられる。　H－9号住居址と覆土が近似するため、壁面の検出作業は困難をきたし、壁面を切る小トレンチを設定して壁面の検出を行い、それをつなげて、住居址の輪郭線とした。住居址の形状は東壁に開く隅丸台形で、規模は最大で南北3.80m、東西3.20mを測る。主軸方位はN－94°－Eである。壁は直線を基本とするが、西壁のみゆるやかな弧を描く。壁高は検出面から最大38㎝を測る。床面は竈前から北西隅にかけて堅固に踏みしめられていたが、他は軟らかく、H－9号住居址の覆土をそのまま床面としている。前者の堅緻面では厚さ5㎜程の固い薄層を床面としていた。柱穴・貯蔵穴と壁下の周溝は確認されなかった。なお、ほぼ同時期とみられるH－6・17・20号住居址では、床面南西隅に深さ30㎝以上の貯蔵穴状のピットが検出されたが、本住居址では検出されなかった。もしあれば、その痕跡はH－9号住居址床面にもあるはずだが、実際は全く認められなかった。

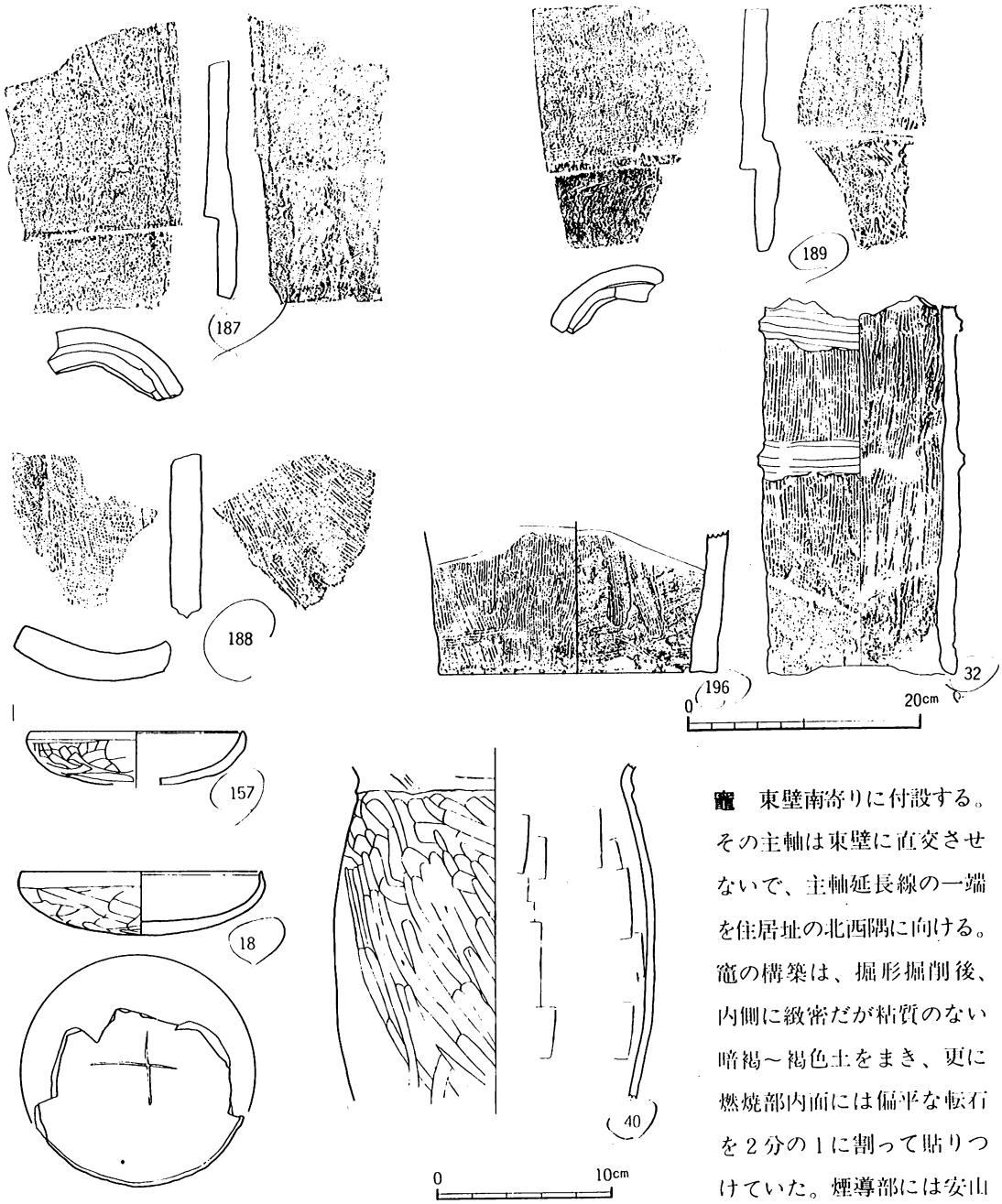


1層　10YR 3/4暗褐　C軽石、焼土粒、炭化物含む。しまり普通。
2層　10YR 3/2黒褐　焼土、炭化物含む。
3層　10YR 3/3暗褐　焼土粒を比較的多く含み、若干赤味がある。黒灰色灰1％、しまり弱い。
4層　10YR 3/3暗褐　φ20～50㎜灰ブロック、炭化物7％含む。しまり弱い。
5層　5YR 3/3暗赤褐　焼土粒焼土粒、焼土ブロック主体。しまり弱い。
6層　10YR 3/2灰黄褐　黒灰色灰を多く含む。φ5～10㎜の炭化物15％。
7層　10YR 5/3にぶい黄褐　黄灰色の灰を主体。
8層　7.5YR 5/3にぶい褐　C軽石を含む。焼けて赤味を帯びる。しまり普通。

第25図　H－10号住居址竈（1/30）



第26図　H－10号住居址出土遺物（1/2・1/4）



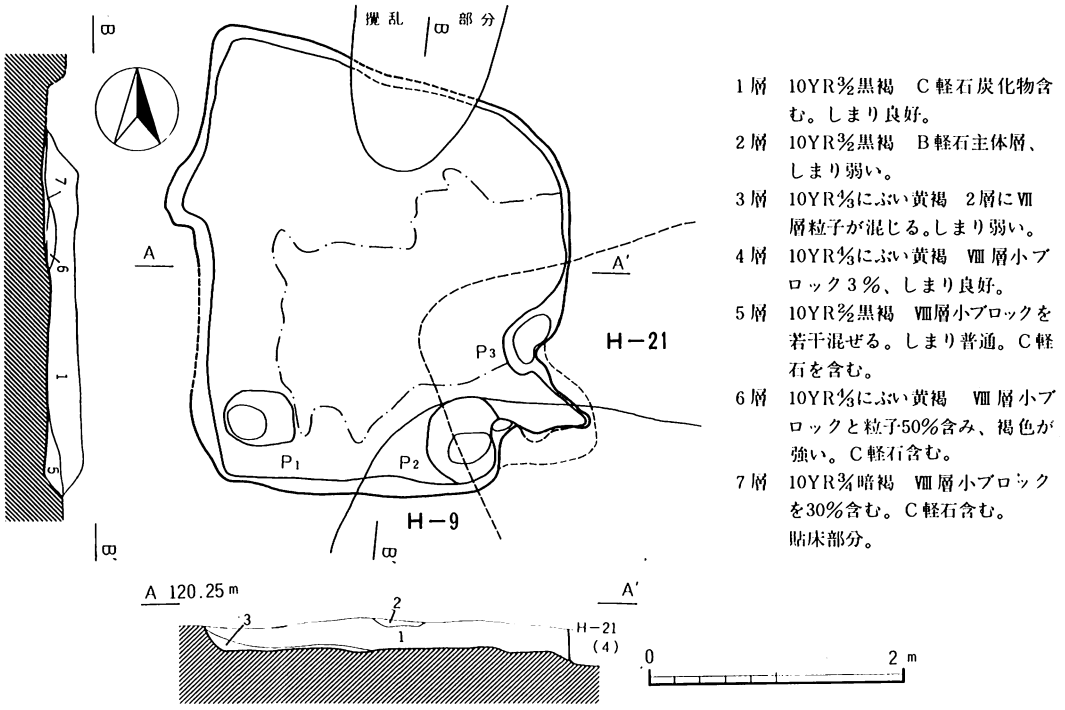
第27図　H－10号住居址出土遺物（1/4・1/6）

竈　東壁南寄りに付設する。その主軸は東壁に直交させないで、主軸延長線の一端を住居址の北西隅に向ける。竈の構築は、掘形掘削後、内側に緻密だが粘質のない暗褐～褐色土をまき、更に燃焼部内面には偏平な転石を2分の1に割って貼りつけていた。煙導部には安山岩亜角礫を天井にわたしている。また、後述するように、丸瓦や埴輪片も構築材として利用されたものと推測される。燃焼部～煙道部にかけては、厚さ5cm以上の灰が堆積しており、その手前側は袖部先端とほぼ一致することから、検出した袖部先端付近が焚口と推測される。これを基準に竈の規模を測定すると、全長77cm（煙道部先端は更に延びていたことが想像される。）焚口部幅30cm、燃焼部長20cm弱である。燃焼部先端からは徐々に

立ち上がって煙道部へ続く。竈内面は、火床面を除き全体に赤橙色に焼け込んでいたが、レンガ状に硬化した所はなかった。なお、焚口部手前には、細木状の黒色炭化物が散布していた。

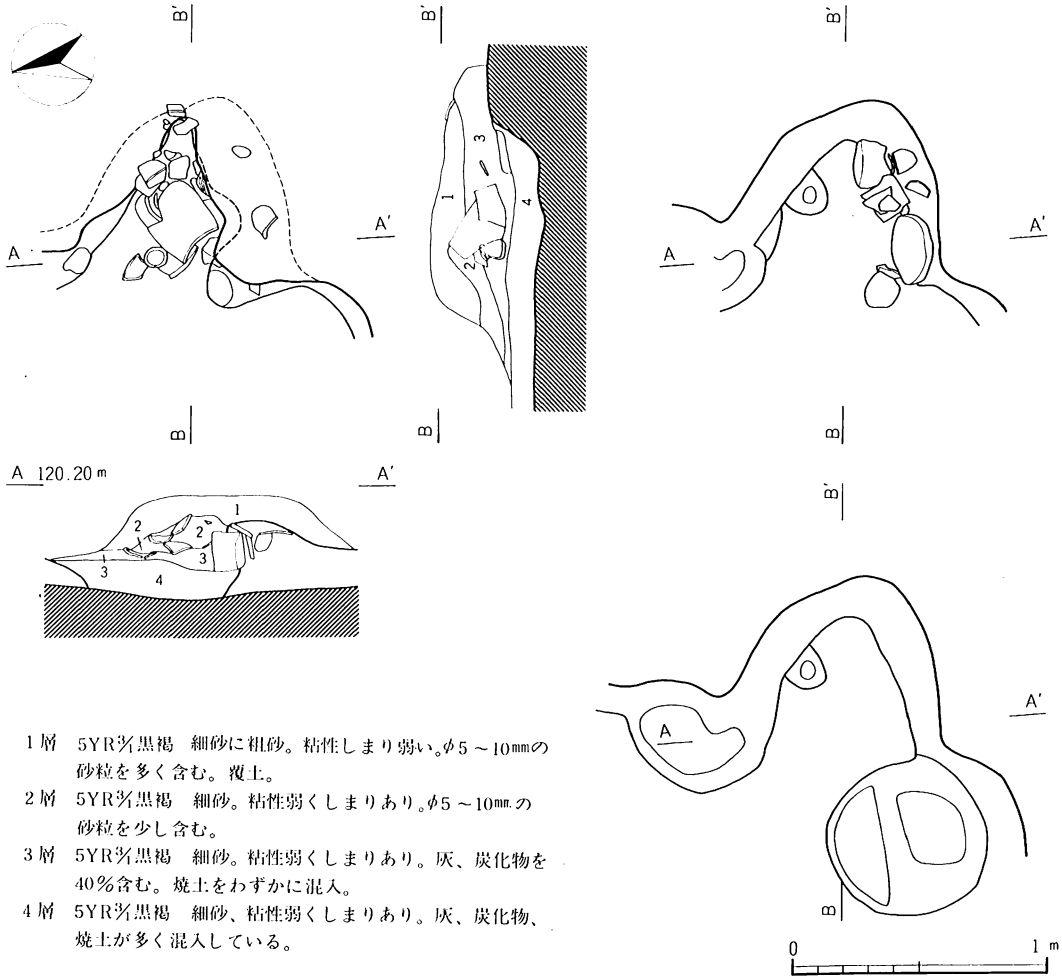
出土遺物　覆土中のものを含めると約200点の遺物が出土した。注目されるのは、竈の覆土中出土の丸瓦（187・189）埴輪（196）羽釜（184）須恵器（182）等であって、これらはH－17号住居址のあり方からみて、竈の構築材の一部とも考えられるのである。191は竈左袖部付近床面から出土し、上述の羽釜184と共に本住居の時代相を知る手がかりになろう。鉄製の紡錘車円盤104は、ほぼ床面で出土した。18・40・157は覆土中で、本住居と直接に関連するものではなかろう。142は床面、L字形に残存する鉄製品と188・32は覆土中の出土である。

H－17号住居址



第28図　H－17号住居址（1/60）

遺構　遺跡中央やや北に検出された不整形の竪穴住居址。四辺の長さが異なる他、西壁は北と南でくい違いがあり、北半分が張り出す形になっている。北側の一部を攪乱で掘り取られていたがほぼ完全な形で検出されている。長軸寸法は3.62m、短軸寸法は3.28mで、面積はほぼ9.6m²である。周溝は確認されなかった。貯蔵穴は、住居址南東隅で、竈右袖部近くと、住居址南西隅に検出されている。南東隅のものは、径50cm、深さ24cmの円形で、北半分は、5cmと浅くなっている。南西隅のものは、この遺跡の平安時代の住居址には、必ず伴うもので、方形に近い円で深さ40cmを測った。主軸方位は、N－100°－Eである。土層は基本的には3層、レンズ状に堆積している。最



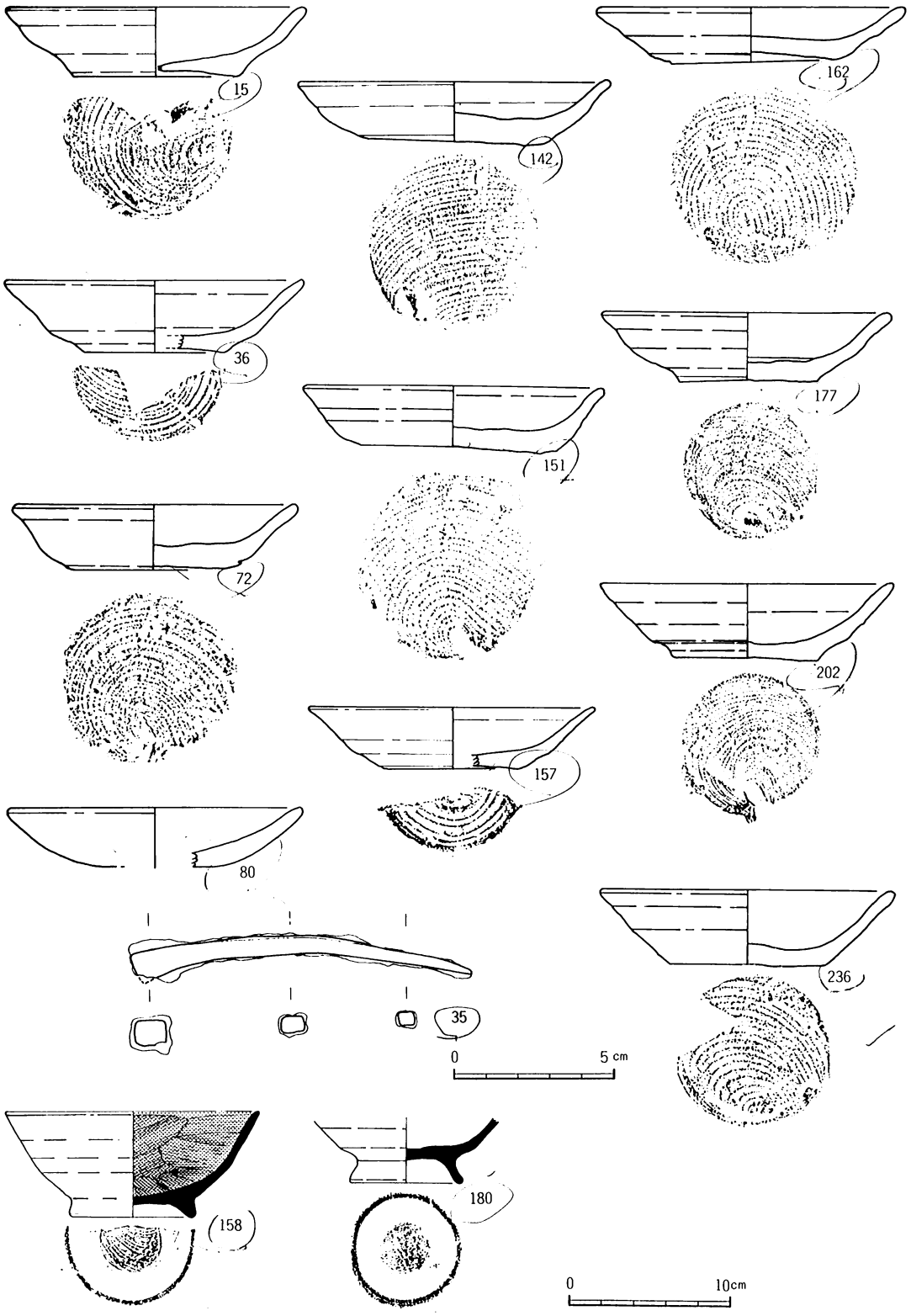
1層　5YR氷黒褐　細砂に粗砂。粘性しまり弱い。φ5～10㎜の砂粒を多く含む。覆土。
2層　5YR氷黒褐　細砂。粘性弱くしまりあり。φ5～10㎜の砂粒を少し含む。
3層　5YR氷黒褐　細砂。粘性弱くしまりあり。灰、炭化物を40％含む。焼土をわずかに混入。
4層　5YR氷黒褐　細砂、粘性弱くしまりあり。灰、炭化物、焼土が多く混入している。

第29図　H－17号住居址竈（1/30）

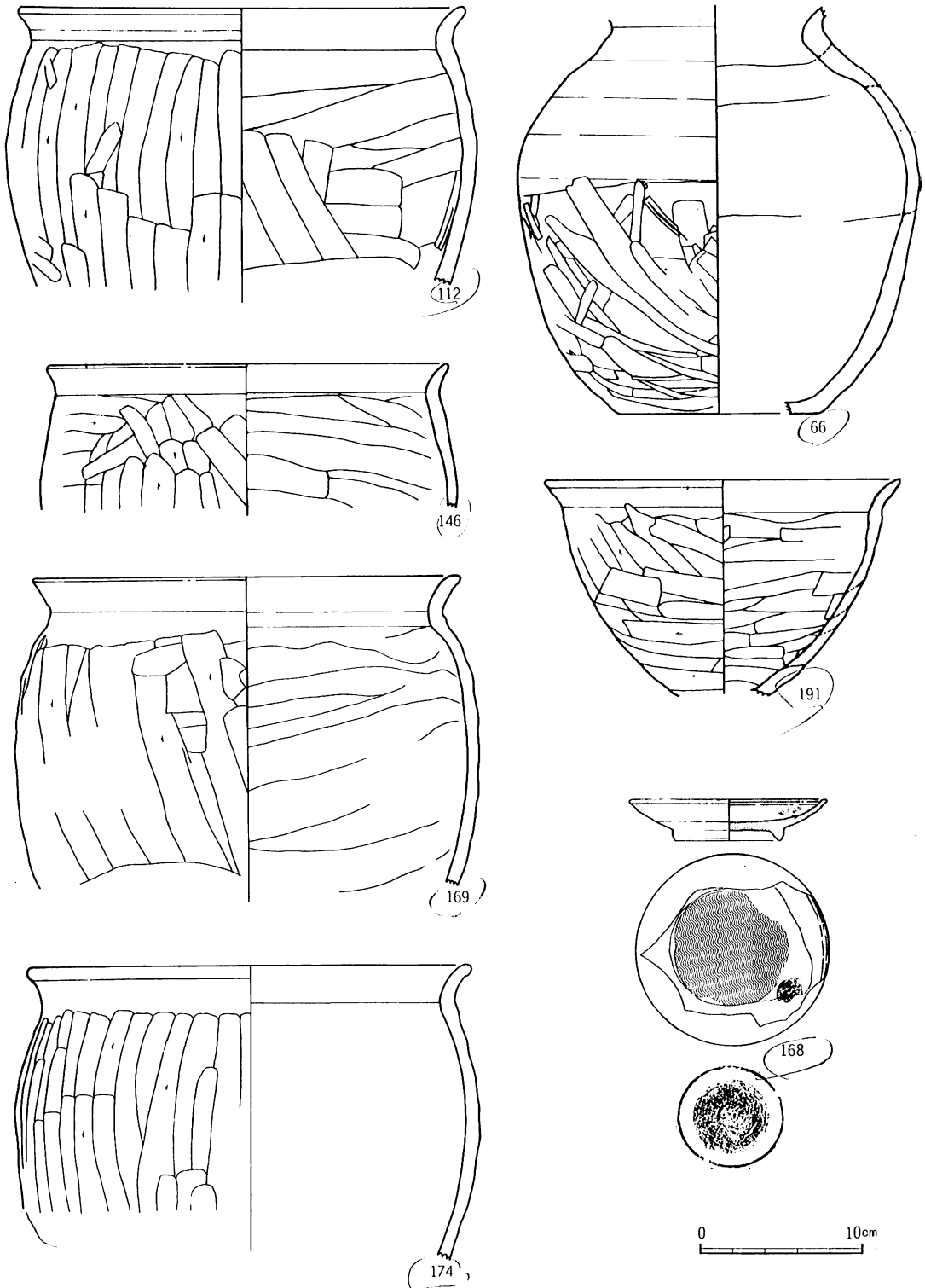
上部にB軽石主体の層、中間層にはC軽石を含んでいる。壁の残存状況はあまり良くなく、西壁北で20㎝ほど、他は13～16㎝で、平均16㎝、角度も平均65°でゆるやかである。

壁は、しっかりした形では検出できなかった。北壁が攪乱により、西壁が土坑により掘りとられている。床面は、標準土層の第Ⅵ層を切りこんで造られている。ほぼ平坦で凹凸もない。住居中央から東壁にかけて堅い床の面があり、竈の周囲には、灰の流出がみられた。住居址北からピットが2基が検出された。西のピットは94×84㎝のだ円で深さ20㎝、住居外まで及んでおり、床下土坑と思われるものである。東のピットは40×38㎝の単純円で、深さ10㎝で、同時代のもの。

竈　住居址東壁で、北：南＝2.2：1で南東隅に造られている。竈主軸はN－106°－Eで、住居址主軸より6°南を向いている。残存状態は比較的良好で、燃焼部天井は落ち、左袖石も取り去られ、窪みのみであったが、構架材、構築材とともに良く残り、構造が明確に判断できる状態である。構築材の右壁が弱いのは、重複のため地山が弱かったからと思われる。焚口部幅48㎝、長さ45㎝、



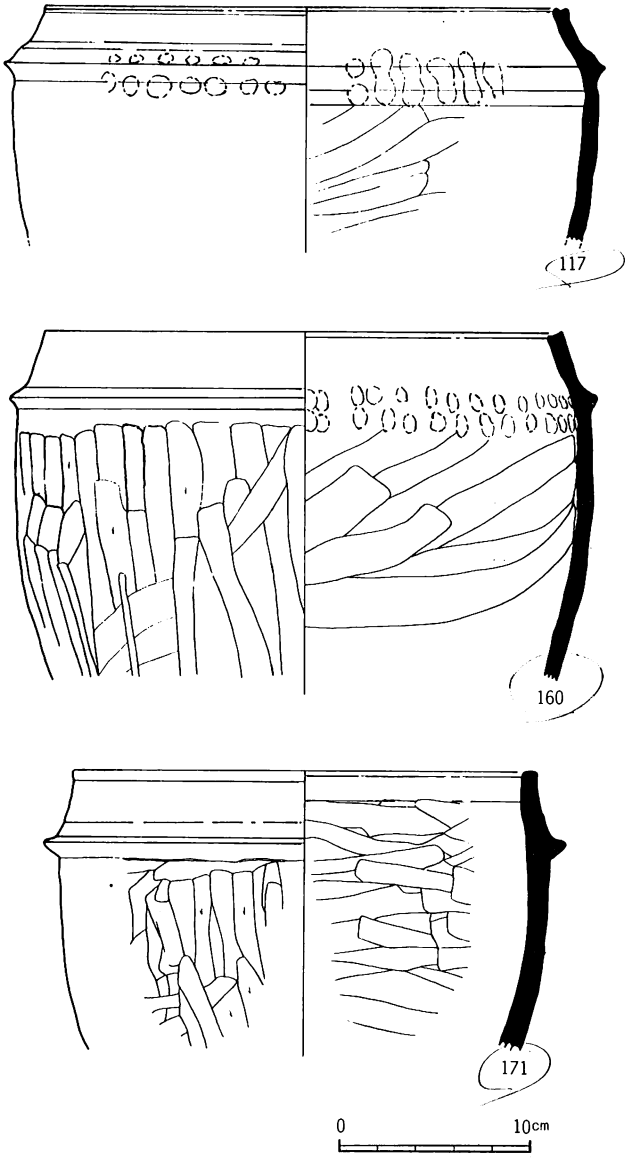
第30図　H－17号住居址出土遺物（1/2・1/4）



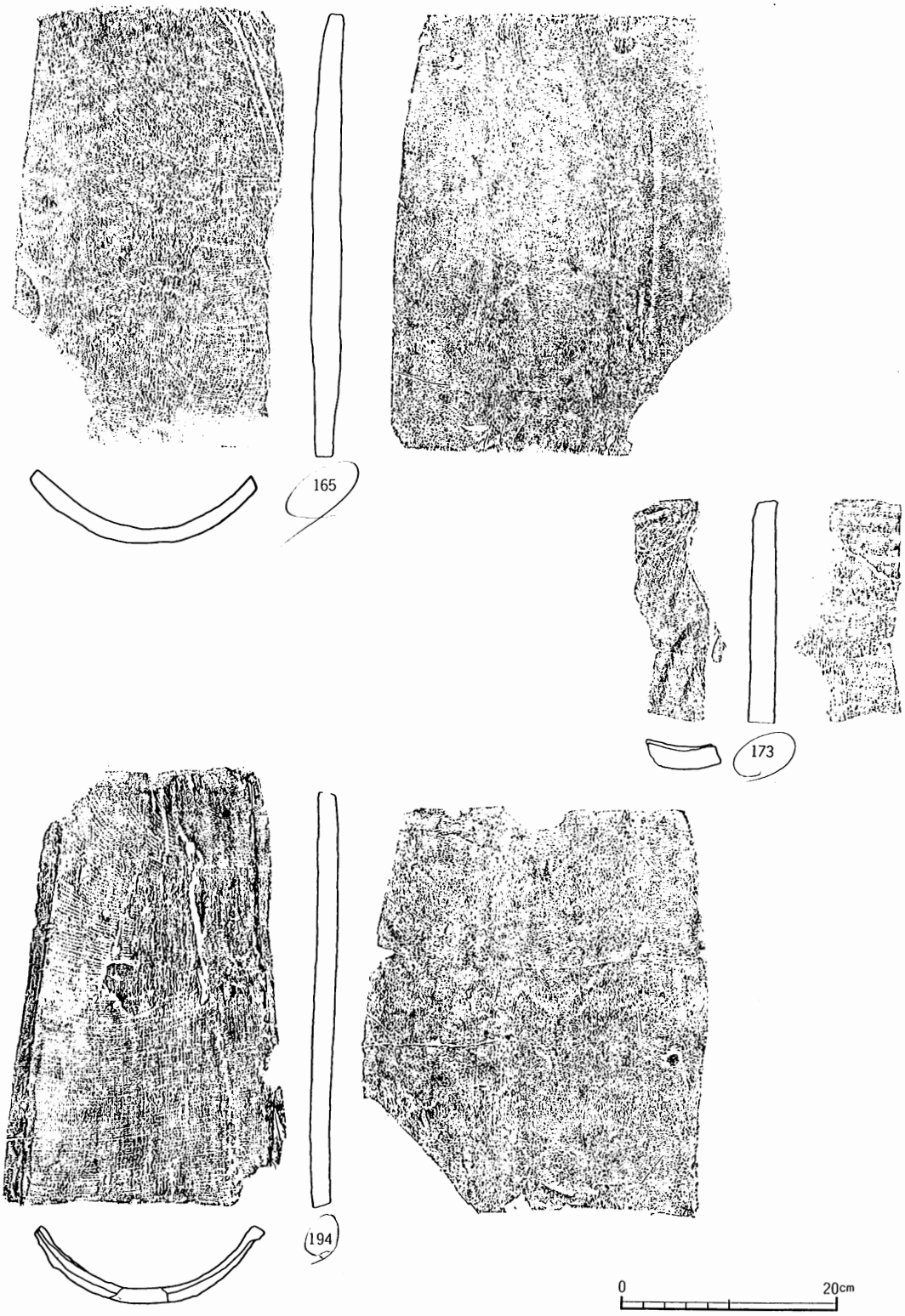
第31図　H－17号住居址出土遺物（1／4）

最大幅43㎝、煙道部長12㎝、幅10㎝である。支脚は検出されていない。

出土遺物　住居内から170点出土している。うち竈内が65点と構築材を含め多く出土し、実測可能なものも多かった。皿11、高台埦２、甕７、羽釜４、釘１、灰釉の高台皿１、瓦４などである。土師の高台埦のうち１点は内黒研磨である。他に鉄滓が出土しており、たたらの存在が予想された。出土遺物内で注目されるものは、竈から出土した瓦である。復元により３点の丸瓦になったが、元は12点に分かれ、竈の構築材である。松田猛氏の御教示によれば、No.166として取り上げた瓦に２本の線刻が入っており、これは国分寺で出土例の多いものである。また、窯は吉井方面のもののようで、山王廃寺の後のものに近いとのことであった。瓦はいずれも竈に使用されていたため、二次焼成を受けており、黒褐色になっている。瓦の供給先は、山王か国府と考えられることや、他の出土遺物から、住居址の年代が10世紀後半ころと考えられることをあわせてみると、この住居址が造られる頃には、自由に瓦を持ってこられる状態であったことが推定される。これは、隣接の国分寺中間地域遺跡でも、同じことがいえ、逆に、この住居址の年代から、瓦の供給先がおとろえている年代をさぐる資料となるものである。他の遺物を見ると、No.112、No.169、No.174の土釜は、頸部がくびれ「く」の字状に外反するものである。羽釜は、口縁部が比較的短く、つばが三角形の断面をしている。No.171とNo.160の羽釜は、口辰部が面どりしてある。また、灰釉の皿が１点出土している。これは転用硯として使用されていたもので、三日月高は第２類、大原２号窯併行と見られるものである。

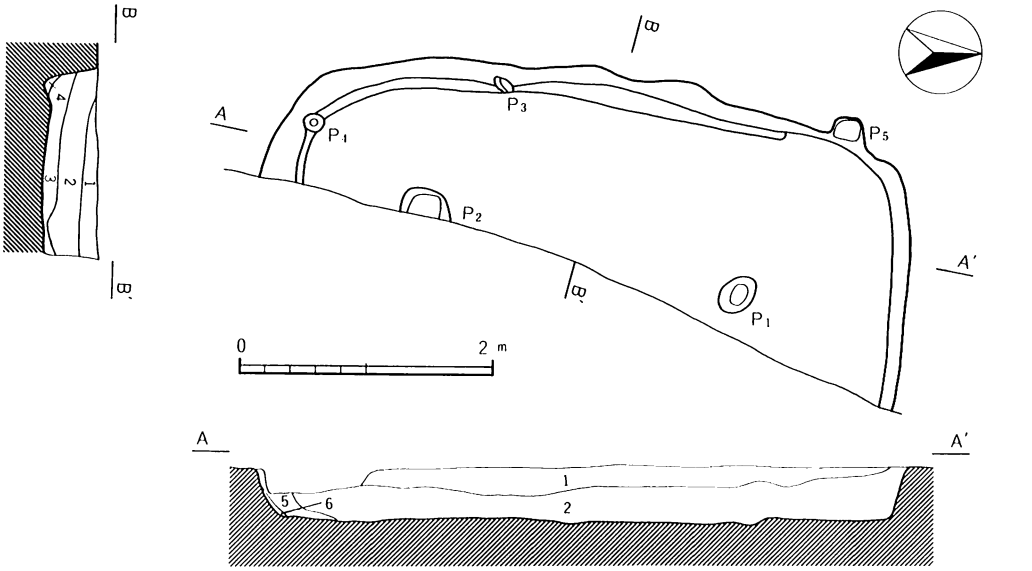


第32図　H－17号住居址出土遺物（１／４）



第33図　H－17号住居址出土遺物（1／6）

H－18号住居址



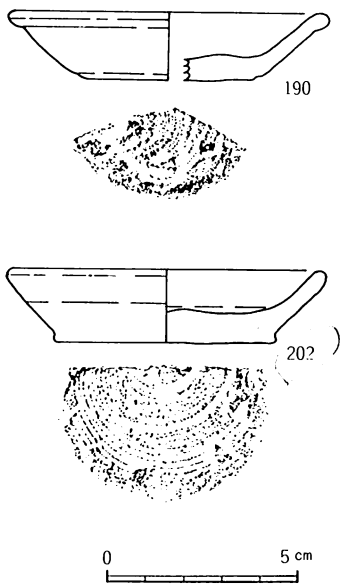
1層　10YR⅔暗褐　Ⅷ層ロームブロック2%、C軽石、焼土を含む。しまり普通。
2層　10YR⅔暗褐　C軽石と焼土を含む。しまり普通。
3層　10YR⅔暗褐　Ⅷ層ロームブロック3%含む。
4層　10YR⅔にぶい黄褐　ロームブロック7%、多量のローム粒を含む。しまり弱い。
5層　10YR⅔暗褐　Cが少量混入しているのみ。しまりやや弱い。
6層　10YR⅝にぶい黄褐　多量のローム粒を含む。しまり弱い。

第34図　H－18号住居址（1/60）

遺構　調査区東の壁際に存し、I・J－9・10グリッドに位置する。H－19号住居址と重複関係にあり、プラン確認の段階で、本址の覆土がH－19号住居址との重複部分に入っているという所見を得、時期の新しい本址の方から排土作業を進めていった。本址の北側にあるH－8号住居址とは、遺構の規模、方位、遺物等からみて、ほぼ同時期のものであると思われる。

プランは、住居址の東側約60%が調査区外にかかるため、全体の形状を確認することはできなかったが、隅丸方形で、西壁は5.3mを測る。主軸は、N－98°－Eを指す。確認面からの壁高は40cmで、東壁の地断では44cmを測る。周溝は、北壁、西壁の一部を除き、幅7cm前後、深さ2～5cmの規模でめぐる。床面は基本層序第Ⅷ層の下端で、堅くしまっている。

ピットは、合計5個検出された。主柱穴はP1（34×25cm、

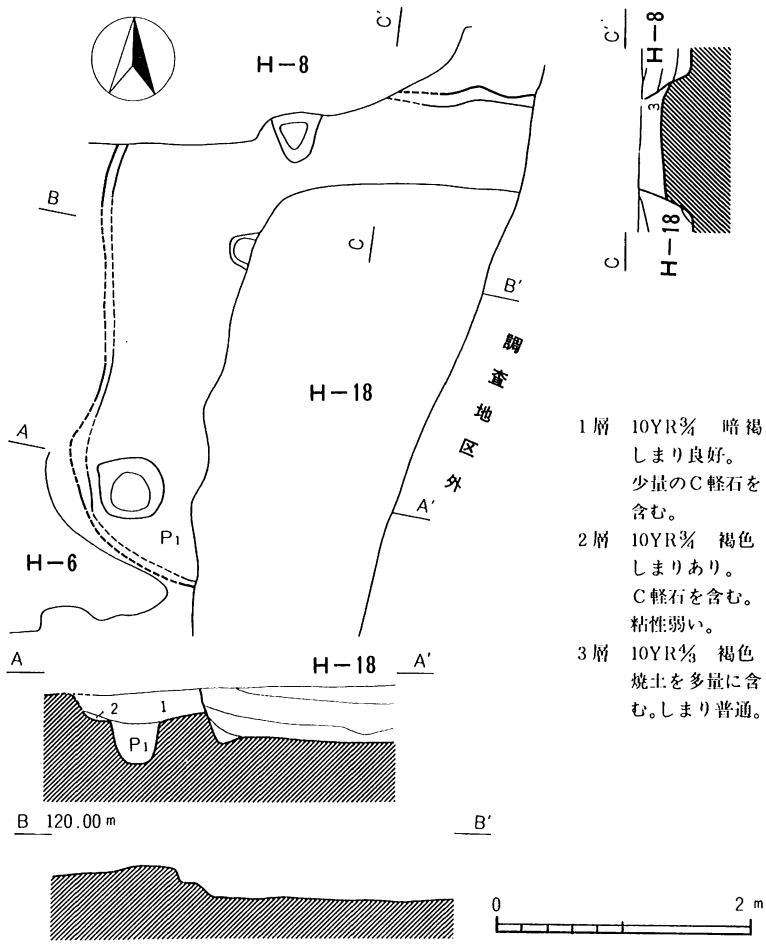


第35図　H－18号住居址出土遺物（1/2）

深さ45cm）P_2（42×26cm、深さ44cm）で、残り２個は未発掘区内にあると推定される。P_3（20×10cm、深さ７cm）P_4（15×14cm、深さ３cm）は周溝中にある。P_5（24×18cm、深さ14cm）は北西壁上にあり、本址に関係するものであるか不明である。竈及び貯蔵穴については未発掘区内にあると推定され、検出することはできなかった。

出土遺物　本址の出土遺物は、土師器119点、須恵器片20点、瓦２点、鉄滓１点と若干の埋土遺物である。140点を越える出土遺物がありながら、実測可能の遺物は、190と202のカワラケ皿２点であった。

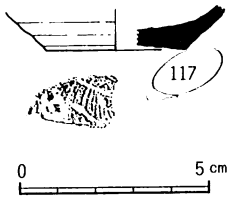
Ｈ－19号住居址



第36図　Ｈ－19号住居址（１/60）

遺構　遺跡北西、Ｉ・Ｊ－９・10グリッドから検出された隅丸方形と推定される竪穴住居址である。東側は調査区外に入り、また18号住居址と重複、北は８号住居址と重複しているため、正確な形状はわからない。北西壁は鈍角ぎみに開いている。住居址長軸寸法は約４ｍ、短軸寸法は約3.7ｍである。面積は、この検出状況からでは測ることはできない。柱穴は確認できなかった。周溝もみつかっていない。貯蔵穴についても不明であるが、南西隅に貯蔵穴状の円形ピットが検出されている。規模は、49×52cm、深さ45cmである。この位置と貯蔵穴は、本遺跡の同時代のものから検出されており、これもその中に含まれるものかもしれない。主軸方位は不明であるが、ほぼ東を向くものと思われる。土層は１層を確認したのみである。Ｃ軽石を含む暗褐色土で、自然堆積のも

のである。地断で確認できた壁高は20cmであるが、原状がどれくらいあるかは分からない。傾斜は60～70°くらいで、やや傾むいている。 東壁は調査地区外にあり不明、 南壁はH－18号住居址に、北西隅はH－8号住居址に切られる。東壁は地層のみきわめがむずかしく、一部不明の所がある。床面は標準土層の第Ⅷ層をそのまま表面としている。調査範囲の中では、ほぼ全面が固く踏みしめられている。住居内やや中央北のピットは、本住居址に属するか、H－18号住居址に属するか不明であるが、半円形で完掘している。



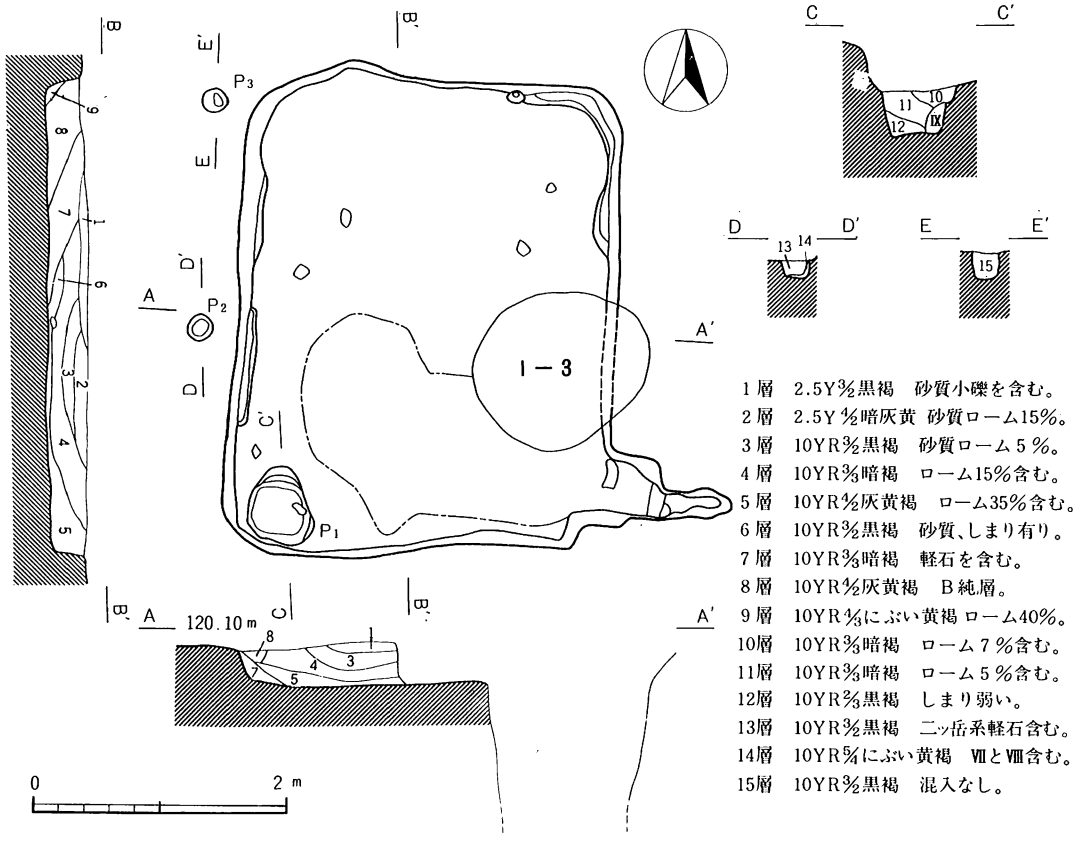
第37図　H－19号住居址出土遺物（1/4）

竈　調査区外にあると思われる。検出されないため規模などは不明。

出土遺物　70点の遺物が出土しているが、実測できたものは、須恵の坏底部が1点のみである。

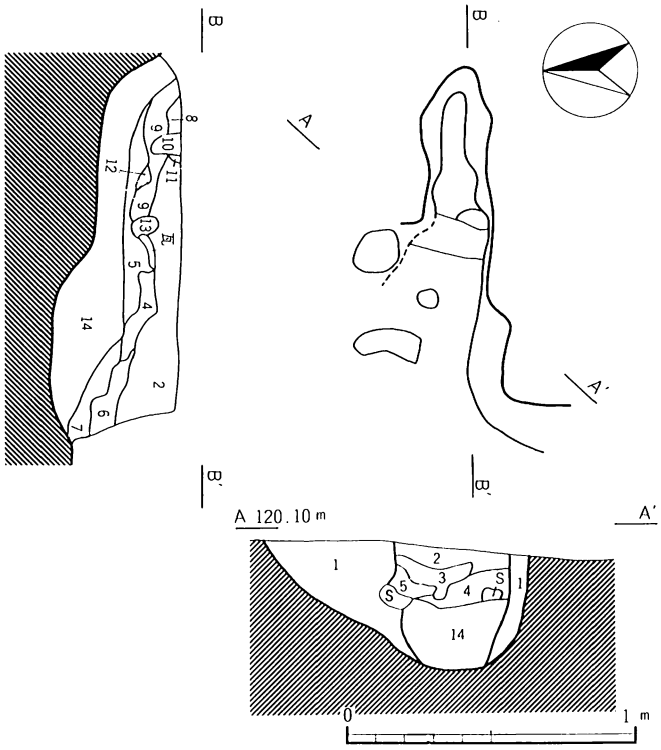
尚、本住居址は、H－8号・18号住居址より古い。またH－6号住居址に近すぎることから、H－6号住居址と同時代に存在することは、不可能であると考えられる。

H－20号住居址



1層　2.5Y3/2黒褐　砂質小礫を含む。
2層　2.5Y 4/2暗灰黄　砂質ローム15%。
3層　10YR3/2黒褐　砂質ローム5%。
4層　10YR3/3暗褐　ローム15%含む。
5層　10YR4/2灰黄褐　ローム35%含む。
6層　10YR3/2黒褐　砂質、しまり有り。
7層　10YR3/3暗褐　軽石を含む。
8層　10YR4/2灰黄褐　B純層。
9層　10YR4/3にぶい黄褐 ローム40%。
10層　10YR3/3暗褐　ローム7%含む。
11層　10YR3/3暗褐　ローム5%含む。
12層　10YR2/3黒褐　しまり弱い。
13層　10YR3/2黒褐　二ッ岳系軽石含む。
14層　10YR5/4にぶい黄褐　Ⅶ とⅧ含む。
15層　10YR3/2黒褐　混入なし。

第38図　H－20号住居址（1/60）

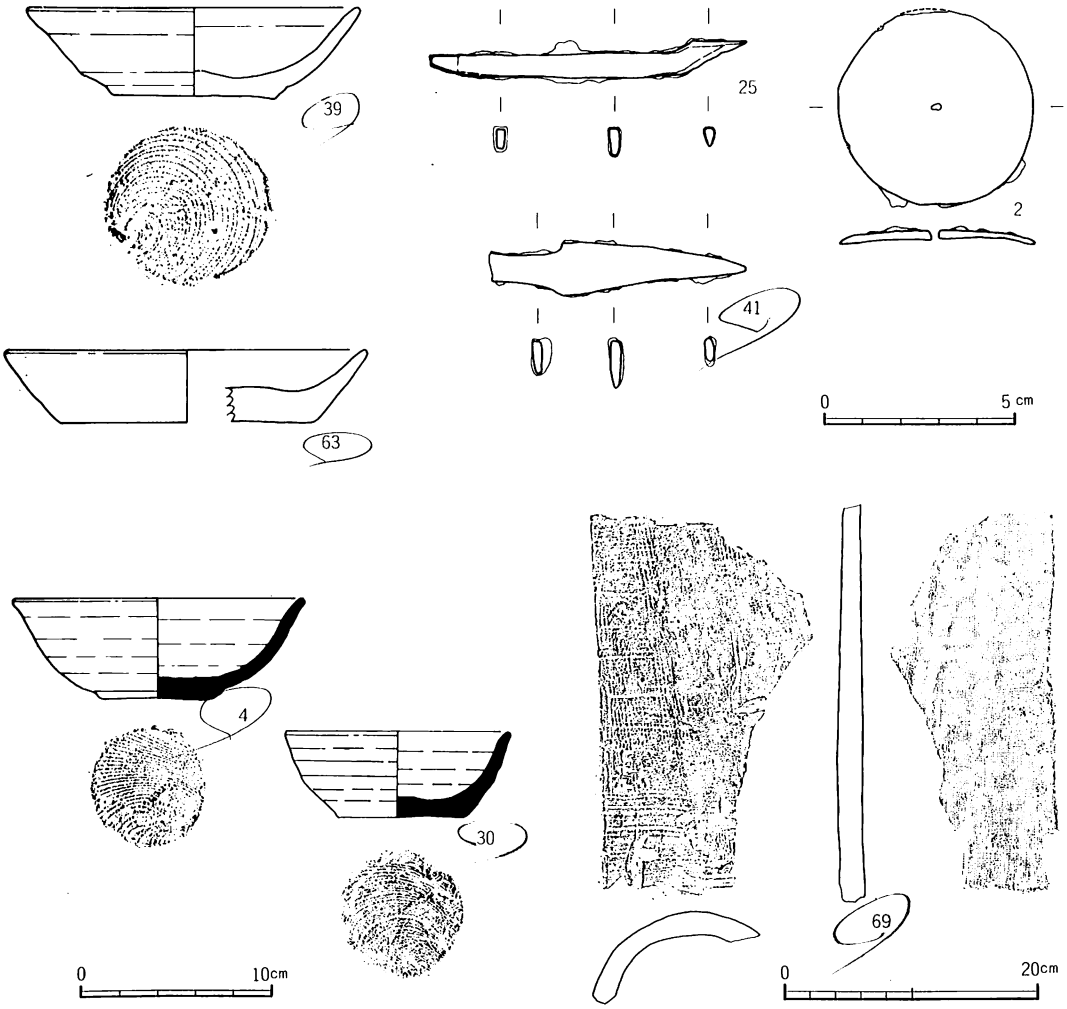


1層　7.5YR⅘褐　細砂。礫、軽石混入。ローム、焼土粒わずかに含む。粘性、しまりともにあり。
2層　7.5YR⅘褐　細砂。礫1％含む。粘性、しまりともになし。
3層　7.5YR½灰褐　灰層。黒色、褐色土5％含む。
4層　7.5YR⅝褐　細砂。焼土、灰、礫1％混入。粘性弱く、しまりあり。
5層　2.5YR明赤褐　焼土層。
6層　7.5YR⅔褐　細砂。礫1％含む。しまりなし。
7層　7.5YR⅘褐　細砂。ロームブロック混入。φ2～5㎜の礫1％含む。粘性、しまり弱い。
8層　5YR⅘にぶい赤褐　細砂。φ2～5㎜の礫少量混入。粘性なし、しまり強い。
9層　7.5YR⅝褐　細砂。軽石1％、φ2～10㎜の礫1％、焼土粒1％混入、しまり強い。
10層　5YR⅔暗赤褐　細砂。φ2～5㎜の軽石1％含む。粘性、しまりともになし。
11層　2.5YR⅘にぶい赤褐　焼土ブロック含む。粘性なし、しまり極めて強い。
12層　7.5YR⅝明褐　焼土層。しまり、粘性共になし。
13層　5YR⅝明赤褐　焼土層。粘性なし、しまり極めて強い。
14層　2.5Y½暗灰黄　灰と焼土の混土層。燃焼部。

第39図　H－20号住居址竈（1/30）

遺構　調査区南西隅にある竪穴住居址である。L・M－7・8グリットに位置する。平面の形状は不整長方形を呈し、長軸3.92m短軸3.00mを測り、推定面積は11.6m²である。住居址内に柱穴はないが、住居址外西側部分に、本住居址にともなうかも知れないと思われるピットが2個ある。南に位置するP_2は楕円形を呈し、長径24cm、短径20cm、深さ15cmを測り、北に位置するP_3はやはり楕円形を呈し、長径22cm、短径20cm、深さ22cmを測る。周溝は、北東隅に幅2～6cm、深さ1.5～2cmで、西壁にそって、幅2～4cm、深さ2～2.5cm、長さ88cmで検出された。貯蔵穴(P_1)は、住居址の南西隅に位置し、形状は楕円形を呈し長径62cm、短径46cm、深さ38cmを測る。住居址の主軸方位はN－93°－Eである。土層は9層に分けられレンズ状に堆積している。B軽石純層が東西地断の西側部分に東西18cm厚さ8cmで床面上13cmの高さに見られた。確認壁高は26cmで推定壁高は36cmである。壁の立ち上がり角度は平均74°を測る。重複関係は、北壁の東側部分がH－9号住居址を切り込み、東壁の約半分がI－3により切り込まれている。床面は標準土層のⅦ層を26cm掘り込みつくられている。凹凸は少なく、全体に平坦で5cm内外のレベル差でおさまり、竪緻部分は東西地断より南側の一面に広がっている。張り床はなかった。

竈　東壁南東隅、北：南＝5.6：1の割合の箇所に取り付けられている。残存状態は比較的良好ではあるが、左袖部はI－3により切られている。掘り方に褐色土を埋め構築されており、さらに天井部の構架材として平瓦を使用。焼土は焚口部、燃焼部に多量に分布。袖の補強材として両袖に山石を1つずつ使用。竈自体の構造は最大幅40cm、全長123cm。主軸方位N－88°－Eである。



第40図　H－20号住居址出土遺物（1/2・1/4・1/6）

煙道部立ち上がり角度は51°。焚口部付近から凝灰質砂岩がよく焼け出土している。燃焼部には、直径7㎝高さ18.5㎝の石が支脚として使用され、火床面から左袖部付近にかけ、10～20㎝厚さで焼土が分布。煙道部には焼土はあまり見られなかった。

出土遺物　出土したカワラケ皿は胎土、焼成、製作技法がいずれも異なり注目される。また、No.39は油煙が付着しており、油杯として使用したと考えられる。No.4の杯は、底部静止糸切りで、丸味を帯びた器形である。図示した以外にも、東濃系虎溪山1号窯併行と考えられる灰釉陶器が出土しているが、小破片のため図示していない。刀子No.41は両関(せき)造りである。No.25は用途不明の鉄製工具。このほか鉄滓が出土しており鉄器との関連で興味深い。また、丸瓦は、赤彩された痕跡を持ち、当初の建物の性格を考える上で興味深い。

ところで、本住居址覆土中にB軽石の純層が含まれていることや、カワラケ皿の出土ということから、本住居址の年代は11世紀中葉頃と推定される。

2．井　　戸

井戸は、遺跡内で3基検出されている。検出順に北から1号、2号、3号と命名した。

1号井戸

遺跡ほぼ中央、H－6号住居址とH－9号住居址の中間に位置する。径は1mほどで、下に行くにつれて、狭くなっており、約2.5m掘り下げたところで、径が70cmほどになっている。3m近くまで掘り下げ、またボーリング棒によって調べたところでは2m以上続いているが、他の井戸と同じく作業の危険性と、調査日程を考えあわせ、完掘はしなかった。井戸覆土は標準層位のⅣ層を基本とするもので、上層にB軽石が多く混入していた。また標高118m付近にえぐれが形成されていた。

2号井戸

遺跡中央やや南で、H－9号・10号住居址と重複している。住居址より新しく、径は1mほどで、漏斗状の掘り方をしており、70cmほど下がってからは、ほぼ径70cmほどになっている。土層は1号と同じ、Ⅳ層が基本である。深さ1mほどのところに植物繊維が腐植し、土壌化しつつある様子が見られた。3号井戸でも同様であった。また標高118m付近にえぐれが形成されていた。

3号井戸

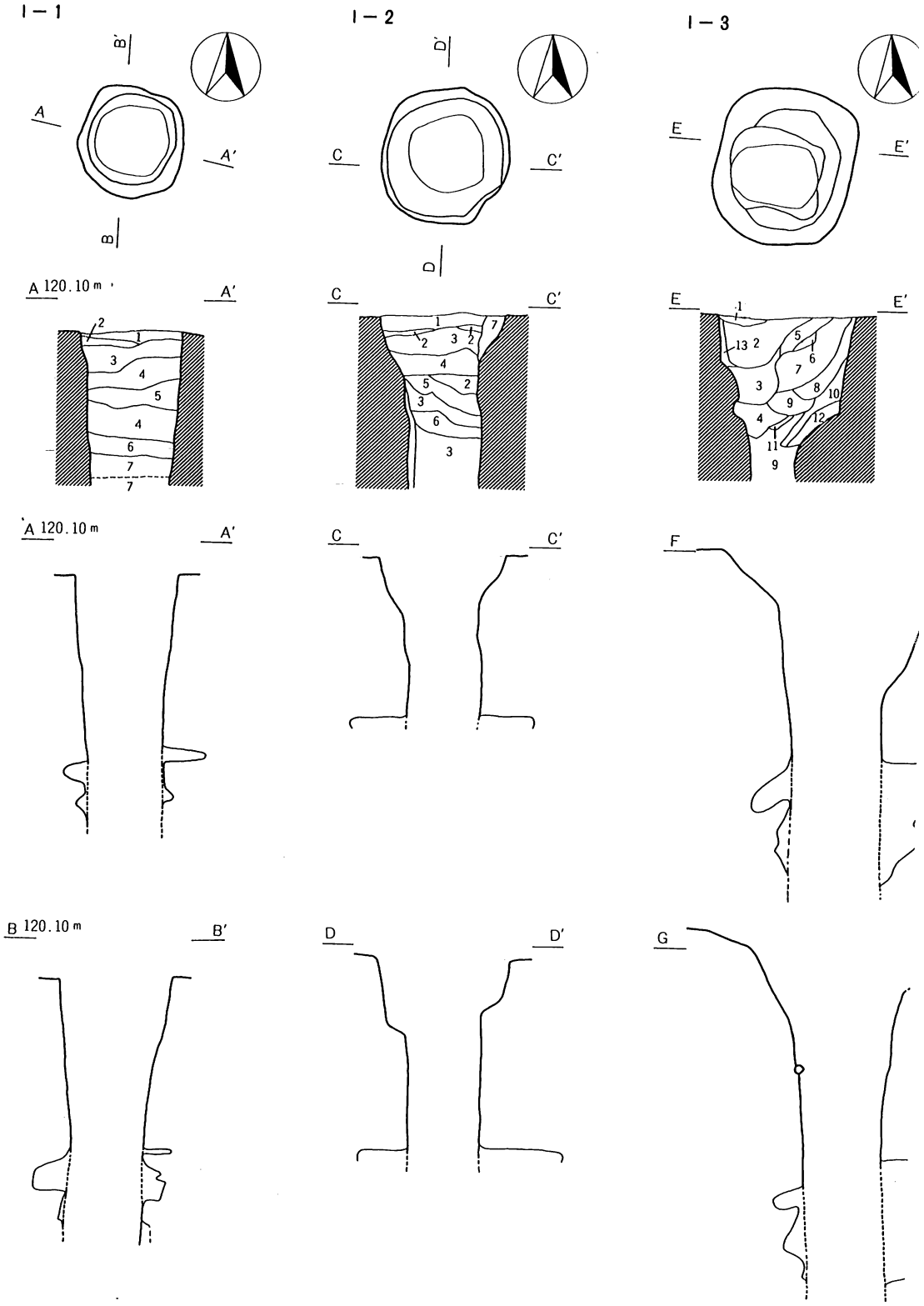
遺跡南端、H－20号住居址と重複して開口した。遺構確認の大きさは、径1.4mほどであるが、掘り方検出時では、径2.3mで、漏斗状をしていた。1.5mほど下がったところでは、径70～80cmほどである。覆土は、1・2号井戸と同じ標準土層のⅣ層が基本である。2号井戸と同じく、植物繊維の腐植層が見つかっている。標高は118m付近にえぐれが形成されていた。

まとめ

これら三基の井戸の覆土は、標準土層のⅣ層を基本とし、中にB軽石が多量に二次堆積として入っていること、古墳後期、平安時代の住居址を切って作られていることを考えあわせると、中世のものと考えられる。ほぼ等間隔に造られていることや、この遺跡の歴史的な立地条件、また調査地のすぐ東から中世の大溝が検出されたことなどから、蒼海城に伴うものかもしれない。

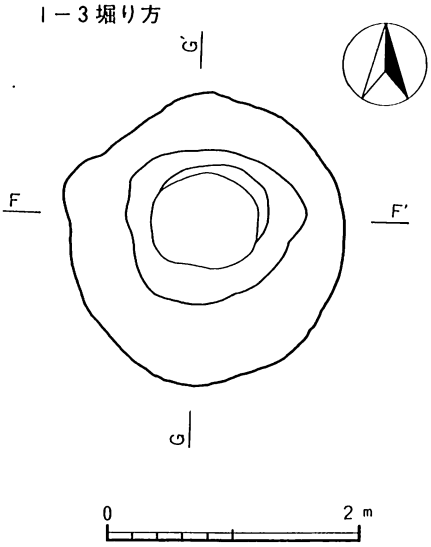
また、標高118m付近に共通してえぐれが形成されていた。これは、井戸の地山が、えぐれ部分を含め粘性の強いロームであり、えぐれ部から下が砂質土であることから、自然に落ちたものではなく、形状から見ても、井戸に満ちていた水の波により、壁が掘り込まれたと考えられるものである。

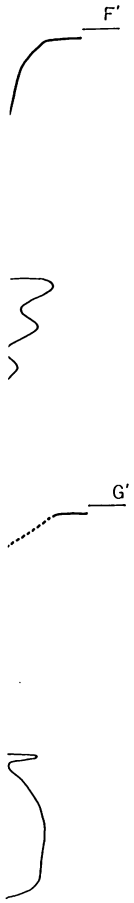
現在の地下水位はずっと下になっている。井戸が造られた当時、標高118m付近であった水位が、現在のように下がった原因としては、旧利根川の変流が一番大きいのではないか。これだけの資料でそれを結びつけることはできないが、今後旧利根川の変流の時期を考える上で、1つの材料を提供することになろう。



第41図　1・2・3号井戸

I－3堀り方





1号井戸　覆土は基本層位Ⅳ層を基本とする。
1層　10YR4/3にぶい黄褐　Bを多く含む。炭化物2%しまり有り。
2層　10YR4/3にぶい黄褐　1、3層の中間。
3層　10YR3/3暗褐　1層よりBが少なく、しまりも弱い。
4層　10YR3/2黒褐　Bを多く含む。Ⅸ層の砂粒。しまりやや弱。
5層　10YR2/3黒褐　Bを多く含む。Ⅸ層の砂粒含む。φ5～10mmの炭化物3%。しまりやや弱い。
6層　10YR4/2灰黄褐　Bを多く含む。Ⅸ層砂粒。しまり弱い。
7層　10YR灰5/2灰黄褐　Bは少ない。層砂粒とシルト粒が多い。
2号井戸　覆土は基本層位Ⅳ層で炭化物5%を含む。
1層　10YR3/3暗褐　やや固くしまり灰黄色粒含む。
2層　10YR3/3暗褐　灰黄色小ブロック5～7%、しまり弱い。
3層　10YR3/3暗褐　しまり弱い。
4層　10YR3/3暗褐　灰色小ブロックを若干含む。
5層　10YR3/3　全体にやや白味がかる。
6層　10YR3/3暗褐　層全体に植物繊維状の細い灰色又は黒灰色の腐植途上のものを多量に含む。植物繊維状物質は、土壌化しつつある。
7層　3と灰黄色シルト質との混土層。
3号井戸　覆土は基本層位Ⅳ層を基本とする。
1層　10YR3/2黒褐　Bを多く含む、標準層位Ⅲ層。
2層　10YR2/3黒褐　Bが特に多く、部分的に純層ブロック状。
3層　10YR2/2黒褐　B主体層、7層ブロック15%、しまり弱い。
4層　10YR2/3黒褐　7層ブロック30%、他は3層に同じ。
5層　10YR2/3黒褐　ブロック状にB純層に近いものを混ぜる。
6層　10YR4/2灰黄褐　腐植途上の植物繊維を多量に含む。
7層　10YR2/3黒褐　B純層に近いブロック含む。他は5層に同。
8層　10YR2/3黒褐　7層主体。Ⅸ層砂ブロック50%。
9層　10YR2/3黒褐　7層主体。Ⅸ層砂粒少量混ぜる。
10層　10YR2/3黒褐　7層主体。Ⅸ層砂粒7%。
11層　10YR2/2黒褐　3層主体。Ⅸ層砂粒ブロック3%。
12層　10YR3/2黒褐　Ⅸ層砂粒を少量含む、しまり弱い。
13層　10YR2/3黒褐　7層主体でBを少量混ぜる。しまり普通。

(1/60)

3．グリッド出土遺物

(1) 縄文土器

本遺跡から出土した縄文土器の大方を図示した。1～10は渦巻と三叉沈刻を伴う隆帯文、およびこの隆帯文の縁取りをする半截竹管による沈線文を特徴とする。色調は赤褐色を呈し、小砂粒を含んでいるが胎土、焼成とも良好である。1・2とも口縁であり、口唇が内側に張り出し段を作出している。3は把手部分である。4は隆帯文が楕円形を区画し、内部を刺突文で充填している。5も隆帯と竹管文であり6・7は三叉沈刻、8は把手部分である。9は隆帯による渦巻文、10は竹管による沈線文である。11は半截竹管による浅い沈線によって区画し、刺突文で内部を充填している。12は半截竹管による平行沈線と曲線による区画を縄文ＲＬによって施文している。13は沈線区画内は斜行する沈線によって充填する。以上のように1～10のうち特に3に見られる文様は新潟県信濃川流域に濃密に分布する火焔型、王冠型土器の文様構成と極めて類似するものといえる。本遺跡出土の土器は時期的には勝坂～加曽利E式に該当するものといえる。

第42図　縄文土器（1／3）

(2) 出土陶磁器類

本遺跡より出土した陶磁器類には、中国製と考えられる青磁をはじめとして貴重なものが数多く含まれている。これらのうち灰釉陶器を除けば、いずれも13～15世紀に比定される中世陶磁器で、鎌倉開幕以降急激に流通したと考えられる高級飲食器類である。県内では浜町屋敷内遺跡、元島名遺跡等、近年、城郭、館址を中心として出土例が増加している。本遺跡の性格を伺わせる貴重な資料である。

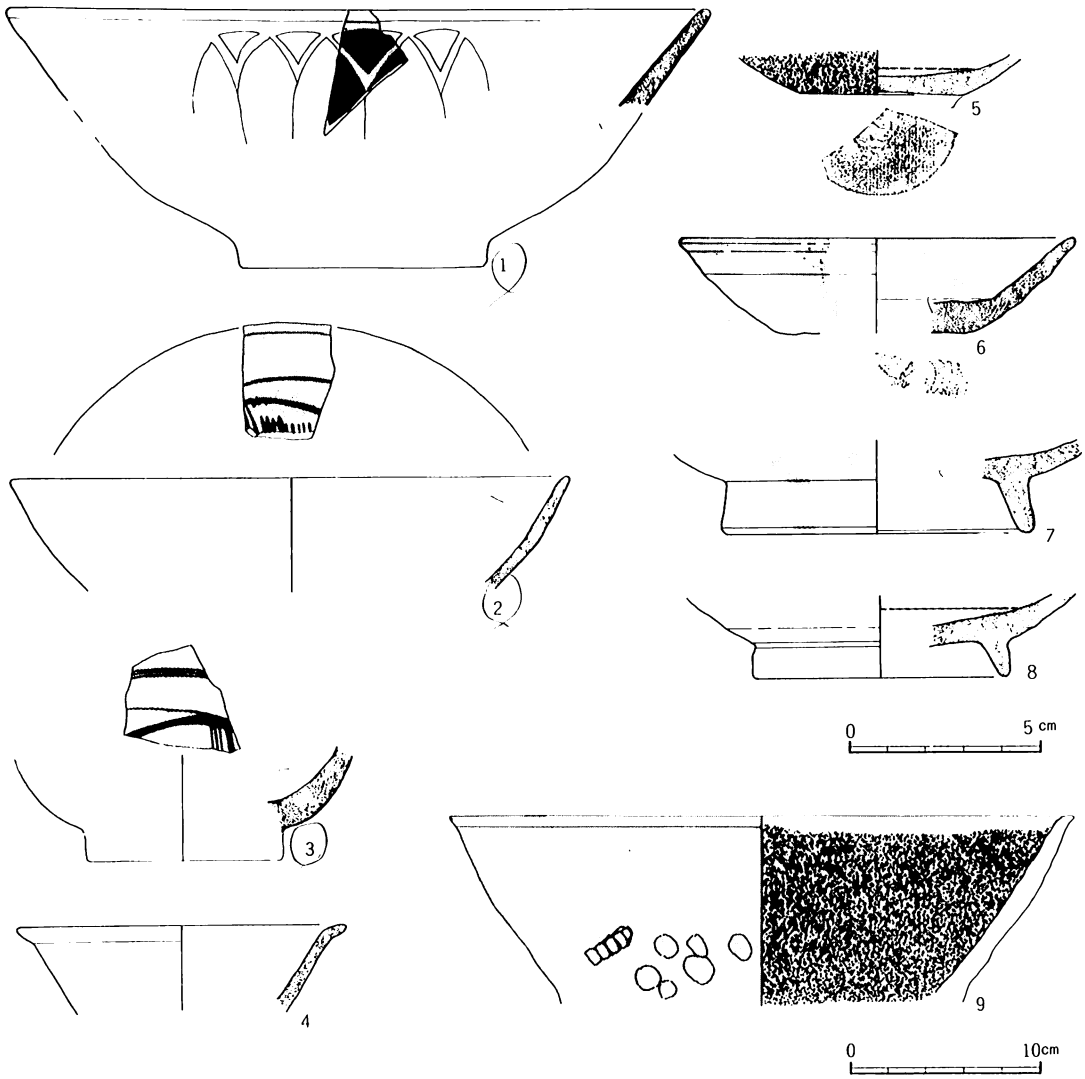
No.1 の龍泉窯系青磁蓮弁文碗は、発色の良い優れた出来で、外面に蓮弁を彫り出している。貫入は無く両面に施釉されている。13世紀に比定される。No.2 は龍泉窯系青磁劃花文碗で、内面に猫描文を彫り刻む。やや深目の器形で、13世紀代に比定される。No.3 も青磁劃花文碗で、内面は

猫描文を彫り、両面に施釉されており、細かい貫入が入る。龍泉窯系で13世紀代に比定される。

白磁は２点あり、いずれも皿の破片と考えられる。No.４は口縁をくの字に外反させる比較的深身の皿で、口径が小さく、胎土は緻密である。つくりは薄手でしっかりとしており、内外面ともに施釉は薄く貫入はない。No.５は比較的厚手のざんぐりとした胎土で、施釉のしかたも荒く、一面に貫入が逆る。内面は底部と口縁部の境界を削り込んで弱い段が施される。外面は底部ヘラおこし後、周辺部のみヘラ調整が施され、若干上げ底気味で施釉されていない。

No.６は美濃瀬戸焼の卸し皿である。比較的小型の器形で、口唇付近のみ施釉されており、貫入が入る。底部厚手で右回転ロクロによる糸切り未調整である。15世紀代に比定される。

遺構外の灰釉陶器はNo.７、８の２点が図示できたが、他にも小破片は10数点出土している。い



第43図　出土陶磁器類（１/２・１/４）

ずれも東濃系と考えられ、大原２号窯～虎渓山１号窯併行であると考えられる。椀、皿類がほとんどであるが、袋物も数片認められる。No.７は高台の高い椀底部付近で、形態調整から虎渓山１号窯式に併用する。No.８は灰釉つけかげの椀底部片で三日月高台第２類から大原２号窯式である。

No.９は常滑焼の鉢で、外面は全面珪酸粒による暗赤灰色を呈し、口唇と内面は淡緑色で貫入が入る釉がかけられている。器形は比較的ゆがみが大きく、調整は荒い。内面施釉後、横方向の擦痕が顕著であり、擂鉢として使用されたらしい。常滑編年Ⅳ期に比定される。

(3) その他の遺物

試掘の段階で確認した遺構からは鉄器類を中心とした貴重な遺物が出土している。ここでは図示できる遺物について紹介したい。

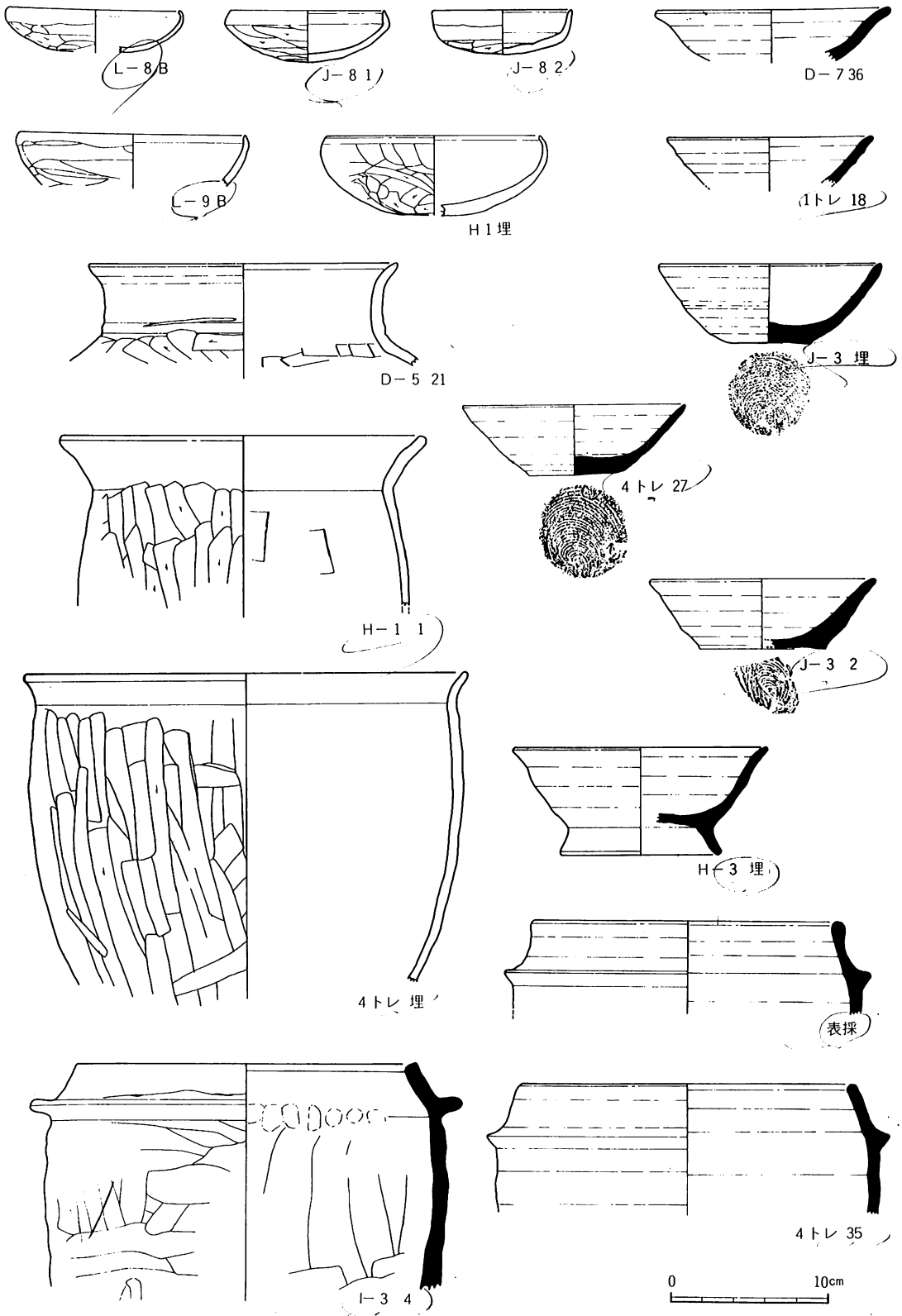
Ｉ－３からは須恵器杯底部を転用した紡錘車と、刀子と推定される鉄器が出土している。木質が一部に付着しており、棘(なかご)の部分の可能性が考えられる。鉄器はこの他に、Ｌ－８グリッド出土の両関(りょうせき)造り刀子、Ｌ－７グリッド出土の鋏(かこ)具、Ｈ－４号住居址埋土の方頭大刀柄頭、等が出土している。なお、Ｋ－９グリッドからは鉄製金具と、両側面に折り返しを持つ鋤先状の工具が出土しているが、これは近世以降のカンナの裏押し金具の可能性もある。又、Ｈ－16号住居址の攪乱土層からは馬の左上顎前歯が出土しており、年令は壮年後半と推定される。

土器類では、Ｈ－１号住居址から所謂「真間期」の素口縁杯と「く」の字口縁甕が供判しているが、Ｈ－９号住居址等の須恵器供判例からみて、これらは７世紀中葉頃の所産と考えられよう。さらに、Ｊ－８グリッド１や２のような土師器杯の小型化、省略化がピークに達するのは、７世紀後半代になってで、須恵器のピークよりも若干遅れていると考えられよう。

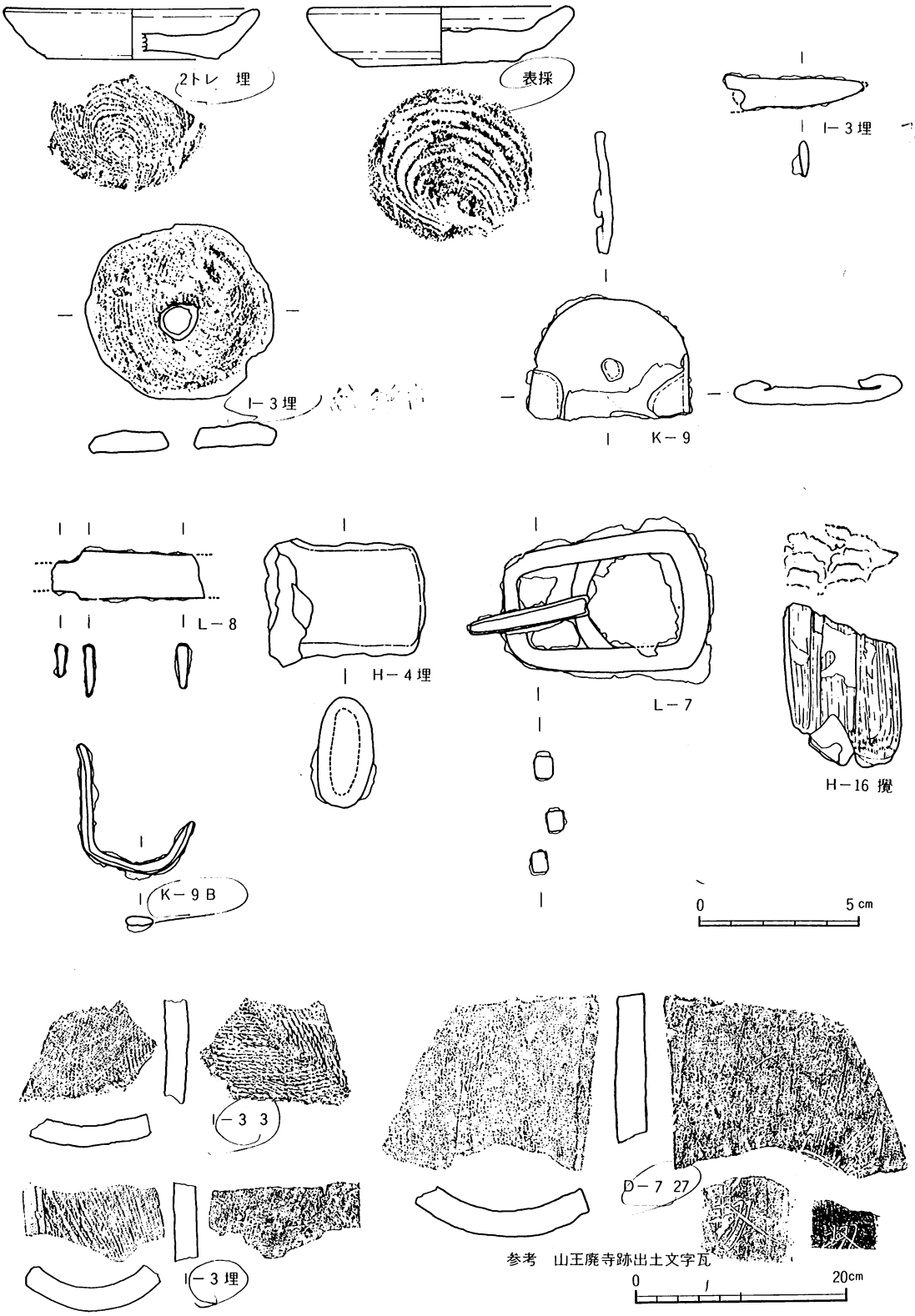
Ｈ－３号住居址出土の高台椀は酸化焔焼成で、紐作り成形の可能性がある。高台はひじょうに高く、10世紀後半代の所産と考えられる。この他にも４トレンチからは、羽釜、土釜と10世紀後半代を中心とした遺物の出土がみられており、これらに伴うと考えられる灰釉陶器小破片も、大原２号窯から虎渓山１号窯併行とそれらを傍証している。

瓦類では、Ｉ－３、３が異形形態を呈し特筆される。瓦の横断面はその中央部において長軸に平行する稜部があり、その稜部を境にして凸面に、方向性の異なる縄タタキが施され、凹面には布目の圧痕、模骨痕と思われる段部、「大」ヘラ記号が数単位施される。なお、稜部の形態と異様なタタキから道具瓦の可能性もある。(註１) Ｉ－３からはこの他に男瓦が出土しているが、これは両側面を面取りして台形を呈している。又、Ｄ－７の27は器内の厚い女瓦であるが、凸面にヘラで文字書きされている。『山王廃寺跡第６次発掘調査報告書』文字瓦集成の33～36の「圾」と考えられる。横骨痕は無く、側面形態は台形を呈する。山王廃寺跡では塔跡において使用されておりその性格が注目される。

（註１）従来の道具瓦では凹面に文字やヘラ記号を入れることは無く、又、その位置も中央部であることから普遍的な女瓦に共通した要素である。



第44図　その他の遺物A（1/4）



第45図　その他の遺物B（1/2・1/6）

Ⅵ　ま　　と　　め

1．遺跡の立地について

草作遺跡は、上野総社神社の西へ600mほどいった、前橋市元総社町にある。この地区は、上野国府の推定所在地ということで、研究者により、その位置をめぐる論考がいろいろ述べられてきたところである。

自然条件から見ていくと、この地は利根川西岸の前橋台地上で、榛名山から流れ出る中小の河川が土地を開析し、舌状台地を形成しているところである。遺跡のある台地も、染谷川と牛池川によって造られたものである。この台地上に国分寺、国分尼寺も建てられている。この台地の突端から東にかけてが、国府の推定地とされているところである。

本遺跡地は、台地の突端部の西で、1mほど高くなっている。南から東へかけて跳望がひらけ当時は、国府を目のあたりにすることができたであろう位置である。

国府の範囲は、研究者の説により異なっているが、近藤説によれば、本遺跡は国府域の内側、松島説によれば、北西隅の外側、金坂説では、西の外側になっている。すぐ西から北にかけてが、布目瓦の散布地であり、この散布から推定する国府域では内側に入っている。昭和58年2月の閑泉樋遺は、昭和58年5月の元総社明神遺跡の発掘調査で検出された大溝から推定した国府域では、やや西の外側という位置である。

東に隣接して、中世の城郭である蒼海城に関係する讃岐屋敷や清徳寺がある。蒼海城は、国府の地割りを利用して造られたともいわれている城である。北には、国分僧寺、国分尼寺、そして、「放光寺」ではないかと考えられている山王廃寺がある。南には、東山道がはしっている。西には、現利根川が前橋台地を切って北から南へ流れている。この変流の時期についても論議されているところである。

こういった立地条件は、本遺跡地を考える場合、国府、国分寺、山王廃寺、あるいは蒼海城との関連を考慮する必要が出てくるものである。以下述べる住居址や井戸についても、これらの関連に注目したものである。

2．住居址について

本遺跡地で調査した住居址11軒の時代を見ると、古墳時代後期4軒、平安時代7軒となっている。古墳時代のものは、7世紀前半から7世紀中葉にかけてのもの。平安時代のものは、10世紀後半から11世紀にかけてのものである。推定国府域東にあたる元総社明神遺跡の調査においても、ほぼ同様の傾向が見られる。

これから考えられることは、国府が造られ、律令政治が充実していると思われる8世紀後半～10世紀前半代の住居址が存在していないということである。国府に隣接している位置から考えて住居の立地に制限があったであろうことは容易に想像されることであり、国府と住居址との係り

方を考える上で注目されるものである。

この平安時代の竪穴住居の構造に次の２点の特徴が見られ、遺跡の性格を考える上で、住居址の年代と同じく、問題点となっているものである。

第１点は、竈を構築する際に、河原石と共に、丸瓦、平瓦を構築材、構架材として使用していることである。竈が検出されたＨ－６号・Ｈ－８号・Ｈ－17号・Ｈ－20号住居址すべて、竈から瓦が検出されている。具体的な様子は、各遺構の項を参照していただきたいが、竈の袖石や基礎に河原石を立て、あるいは割って立て、その上に瓦をおき、瓦や遺物を立てて壁を造る形で使われている。その典型的なものは、Ｈ－６号・Ｈ－17号住居址の竈である。他の平安時代の住居址の竈も同じように、しっかりした形で造られていただろうと推定される。

この瓦は、松田氏の御教示によれば、国府あるいは山王廃寺からもたらされたものではないかとのことである。瓦を持ってこられることから、これらの官衛施設や寺が衰亡していく状態を想定される一つの材料になるだろう。

逆に、こうした国府域周辺の調査を積み重ねていくことで、国府域の位置と共に、国府の造られた時期、国府の衰えた時期を推定する資料が得られていくことにもなるだろう。

第２点は、平安時代の住居址の南西隅に、貯蔵穴状のピットが検出されていることである。これは、本遺跡地北にある中島遺跡でも、同時期のものには見つかっており、この頃、竪穴住居址の構造に一部変化があったことも推定される。

３．井戸について

井戸については、井戸の項で述べたとおりであるが、井戸の性格については、立地や西隣から検出された溝からみて、国府域をそのまま使ったといわれる中世の城、蒼海城に伴うと考えるのが、最も自然ではなかろうか。

井戸のえぐれから水位の変化を考え、その要因を旧利根川の変流に持っていくのは、あくまでも推定の域を出ないものである。ただ、この井戸のえぐれは、地山の様子、えぐれの様子から見て、井戸が使用された当時の水面の波により、壁が侵食されてできたものであることは、まちがいないように思える。

現在、地下水位がさがった原因、水位を下げる原因については、旧利根川の変流、台地の開削が一番にあげられるということで、この点については、周辺の遺跡において、十分検証を積み重ねていかなくてはならないだろう。

４．その他の遺構について

遺跡内では検出されなかったが、この遺跡地を考える上で重要な遺構が２つ存在することが想定されている。

１つは、古墳の存在である。これは、遺構に流れこんだ遺物と、地元の伝承から推定した。出

土遺物の中に方頭太刀柄頭、埴輪があること、南に塚があったという話からである。この塚は上毛古墳総覧には未記録のもののようで、現在は宅地開発のため削平されている。

２つは、たたらの存在である。住居址内から、金属製品が出土しているが、他に鉄滓・羽口が出土していること、またすぐ東が比高差１ｍほどの崖であるため、存在することが予想されたがその位置をつかむには至らなかった。

５．遺物について

縄文、古墳、平安、中世のものが出土している。いずれも遺構に伴うものである。この中でまとめとしてふれることは、ここは羽釜の出土範囲であるということと、遺物の時代を考える時、時代としては続いていても、空間の時間があるということで、これについては、2.住居址の項でふれた。

瓦については、松田猛氏の御教示によるところが大きい。これらの瓦は、山王廃寺出土のものに似ているが、大きく藤岡・吉井方面の窯と秋間の窯に大別される。特にＨ－６号住居址出土のNo.62の丸瓦は注目すべきものである。またＤ－７グリッドから出土したNo.27の平瓦には、表面に「丸」のヘラ書きがあった。これは山王６次で出土した文字瓦の「圾」にあたると思われる。

特殊遺物として、金属性の鉸具（かこ）が出土している。住居址の年代、こういった鉸具は一般の人々が身につけられるものではなく、ある程度の身分を持った人物が住んでいたことが想定される。

出土陶磁器類は、灰釉を除けば、13～15世紀に比定される中世陶磁器である。県内で城郭、館址を中心に出土が多いことから見て、蒼海城に伴うものと考えられるものである。青磁は、中国伝来のものと見られるもので、龍泉窯系と考えられる。中国から流入した高級飲食器が、この地まで及んでいたことを示す貴重な資料といえよう。

なお、本遺跡の住居址が大きく古墳、平安時代に分かれることは前述したが、その中での前後関係を重複や遺物から考えると、次のように判定される。

古墳時代　Ｈ－21 ⇨ Ｈ－11 ⇨ Ｈ－16 ⇨ Ｈ－９

平安時代　Ｈ－19 ⇨ Ｈ－８・Ｈ－18 ⇨ Ｈ－10 ⇨ Ｈ－６・Ｈ－17・Ｈ－20

主要参考文献

『陶邑古窯址群Ｉ』（1966）平安学園考古学クラブ
『山王廃寺跡第６次発掘調査報告書』（1980）前橋市教育委員会
『前橋市史　第１巻』（1971）前橋市史編さん委員会
『清里・陣馬遺跡発掘調査報告書』（1981）群馬県埋蔵文化財調査事業団
『元総社明神遺跡Ｉ・II発掘調査報告書』（1983・1984）前橋市教育委員会
『中島遺跡発掘調査概報』（1981）前橋市教育委員会
『柿木遺跡発掘調査報告書』（1984）前橋市教育委員会

59A3 草作遺跡遺物集計表

	土師器							須恵器				石製品	鉄製品	灰釉	ハニワ	瓦	その他	備考	
	皿	坏	埦	高台埦	甕	羽釜	その他	皿	坏	蓋	その他								
H－1		1			1														調査地区外
H－2																			〃
H－3				1															〃
H－4													1					埋土中で方頭太刀柄頭	〃
H－5																			〃
H－6	2	2	1		1	4										11			平安時代
H－7																			調査地区外
H－8	2			※1	2											2		※内黒研磨あり	平安時代
H－9		2			1					2	※2※		※1					※紡錘車の心棒か ※※高坏脚部(窓付き)、脚付き皿各1	古墳時代
H－10	1	3	2		1	1	1(鉢)	1					※1		2	3		※器種不明	平安時代
H－11									1										調査地区外
H－12																			〃
H－13																			〃
H－14																			〃
H－15																			〃
H－16					1						1(脚付皿)						※1(臼玉)	※滑石製	古墳時代
H－17	11			※2	7	4							1(釘)	1(高台皿)		4	※1※	※2個体中1個体に内黒研磨あり ※※甕または壺底部の転用か	平安時代
H－18	2																		〃
H－19			1																〃
H－20	1	1	1		1						1(埦)		2(刀子)			1			〃
H－21		1	1		1							1(石鏃)							古墳時代
I－3			2			1							1(刀子)			2	1(紡錘車)		

NO 12.13~20
NO91~98.

NO 21.22
NO99.100,101

NO1

NO23~31.
NO102.103.104.105

NO9.

NO32~54
NO106.107.108

NO55.56

NO57.

NO58~61
NO109

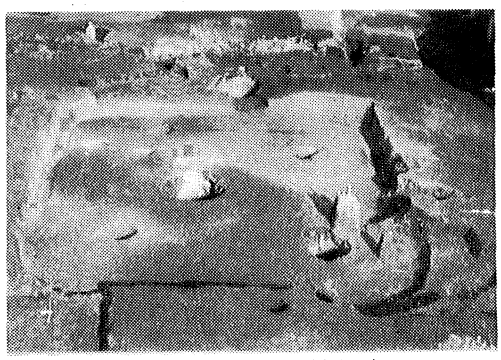
59A3 草作遺跡遺物集計表

		土師器							須恵器				石製品	鉄製品	灰釉	ハニワ	瓦	その他	備考	
		皿	坏	埦	高台埦	甕	羽釜	その他	皿	坏	蓋	その他								
D－5						1														
D－6																				
D－7						1				1							3			
1トレ										1										
2トレ		1								1										
3トレ																				
4トレ			1		1	1	1											※1(皿か?)	※白磁	
グリッド	J－3			1																
	J－5														1(皿)					
	J－6						1								1(埦)					
	J－7														1(埦)					
	J－8		2			1														
	J－9				2															
	K－6																1			
	K－8																1			
	K－9													※1					※器種不明	
	L－7					1														
	L－8		1																	
	L－?													1(刀子)						
	H10C																1			
表採		※1					1												※カワラケ様	

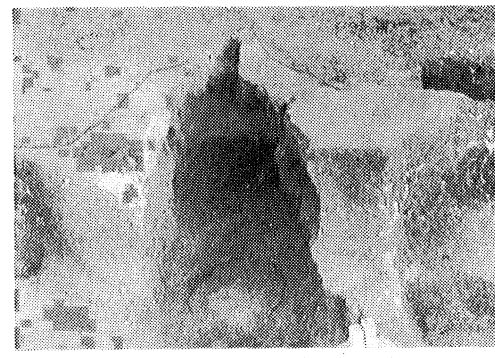
図版 1

遺　跡　全　景（西から）

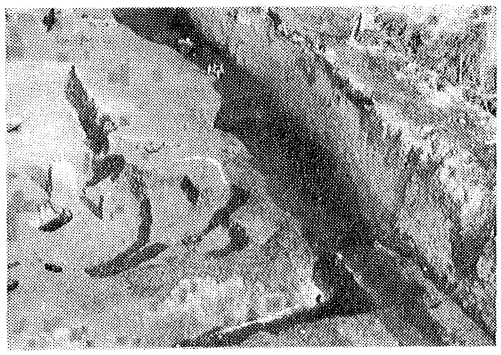
図版 2



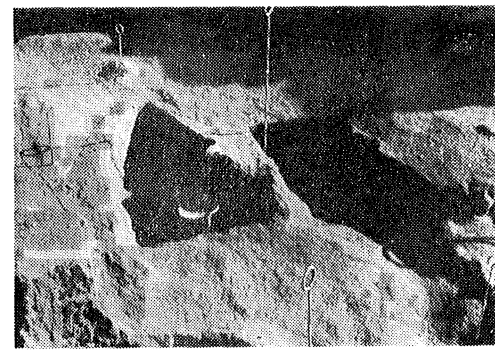
H－9号　住居址（南から）



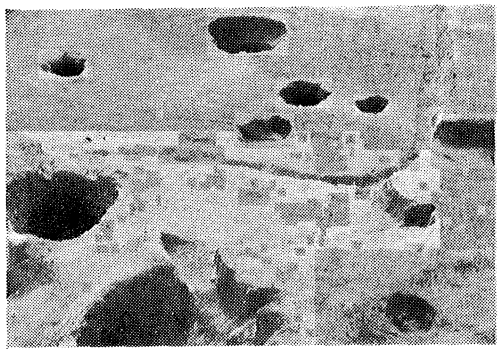
H－9号　住居址　竈（西から）



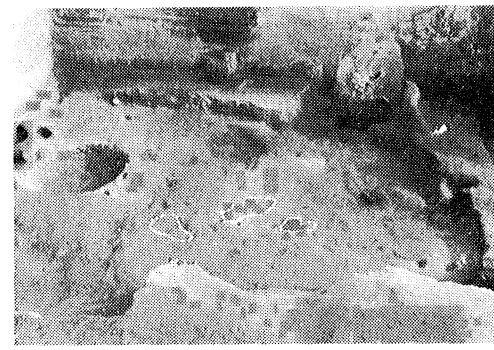
H－11・16号　住居址（南から）



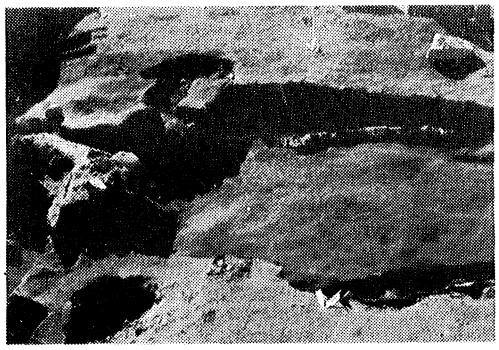
H－11号　住居址　竈（西から）



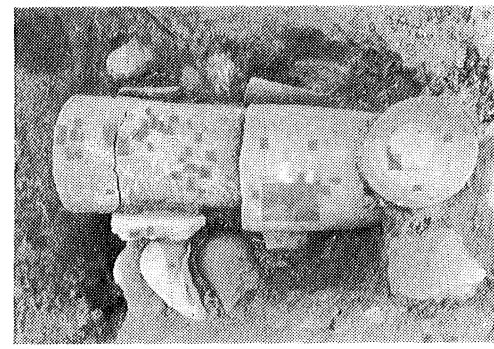
H－21号　住居址（北から）



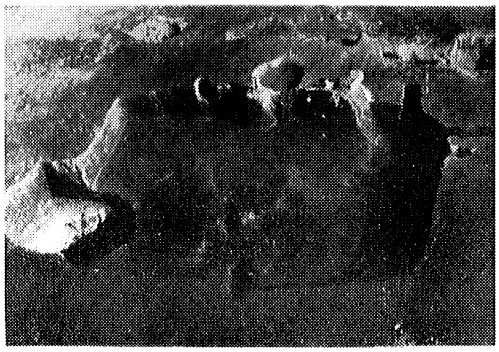
H－8号　住居址（西から）



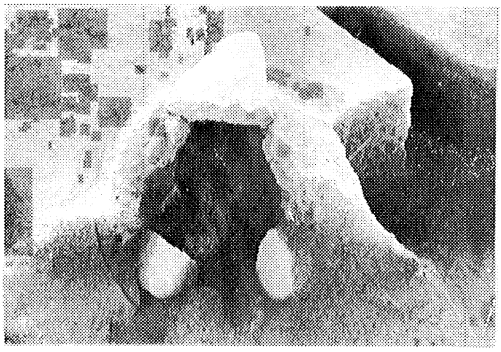
H－6号　住居址（北から）



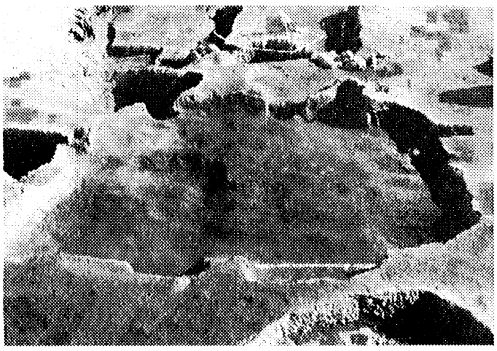
H－6号　住居址　竈（煙道上から）



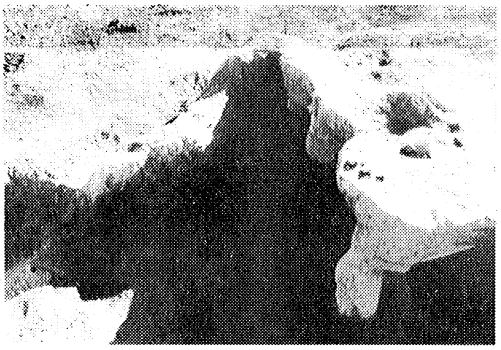
H－10号　住居址（西から）



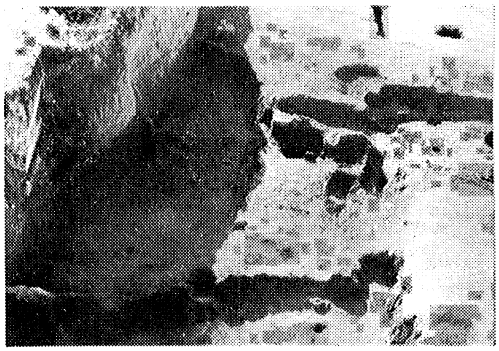
H－10号　住居址　竈（北西から）



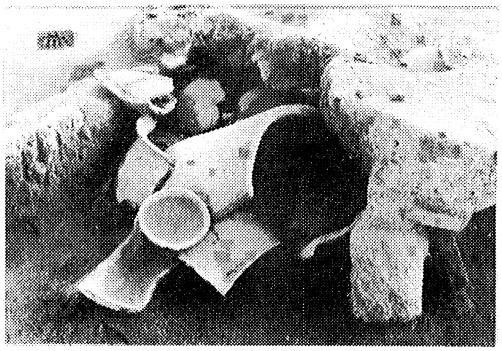
H－17号　住居址（西から）



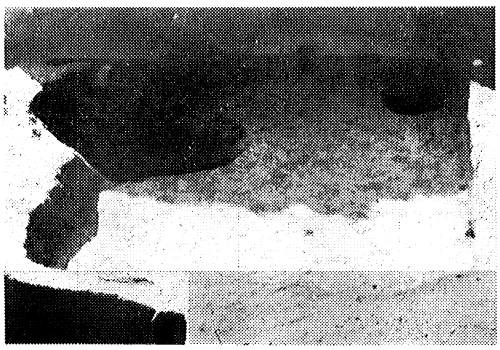
H－17号　住居址　竈（北から）



H－18・19号　住居址（北から）



H－17号　住居址　竈　遺物出土状態（北から）

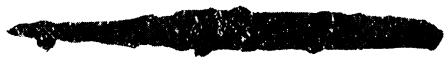


H－20号　住居址（北から）

I－2号　井　戸

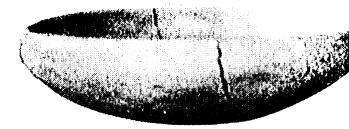
図版 4

H－9.118A



H－9.118B

H－9.208



H－9.147

H－6.20

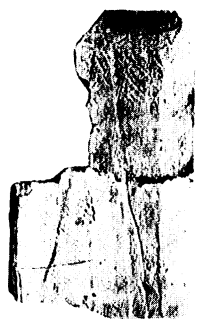
H－6.34

H－6.22

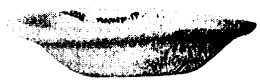
H－6.55

H－6.58

H－6.60



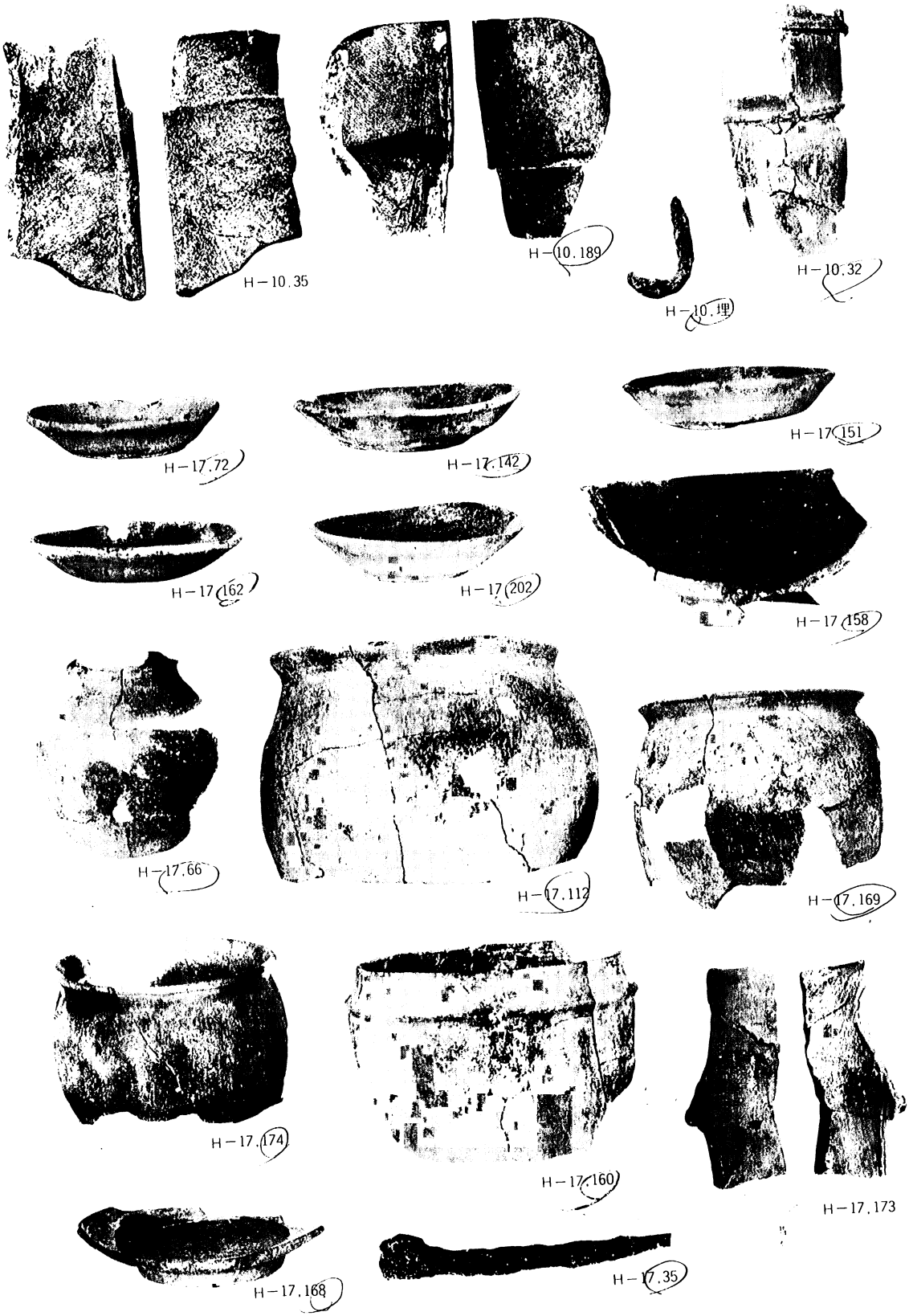
H－6.63



H－10.191

H－10.89

H－6.62


H－10.35
H－10.189
H－10.32
H－10.理
H－17.72
H－17.142
H－17.151
H－17.162
H－17.202
H－17.158
H－17.66
H－17.112
H－17.169
H－17.174
H－17.160
H－17.173
H－17.168
H－17.35

図版 6

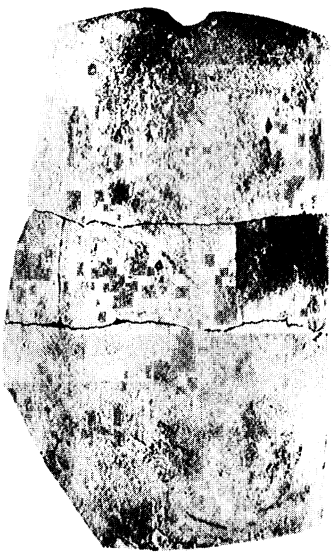
H－17.165

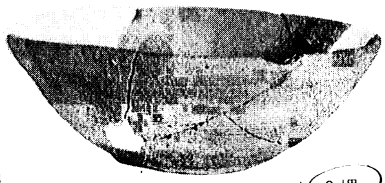
H－20.2

H－20.41

H－20.39

H－20.30





H－3埋

（表採）

表採

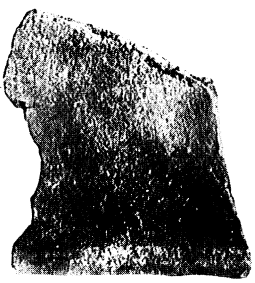
H－17.194

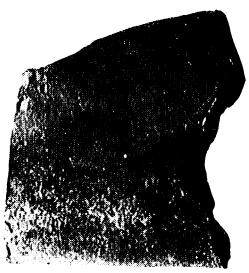
K－9

H－10.104

K－9B

H－4埋





D－7.27

1

2

3

草　作　遺　跡(59A－3)

昭和60年 5 月25日　印刷
昭和60年 5 月31日　発行

発行　前橋市埋蔵文化財発掘調査団
前橋市大手町二丁目12－1

印刷　株式会社　報　　通
前 橋 市 箱 田 町 361－ 3

草作遺跡

遺物観察表

1985
前橋市埋蔵文化財発掘調査団

No	番号	器形	寸法	器形の特徴	外面調整	内面調整	①色調②焼成③残存④胎土⑤備考
1	H−9 135	土師器 杯	(13.5) —	丸底、ゆるやかに直立して、やや内傾する素口縁杯。	手持ちヘラケズリ後、口縁部のみナデ。	口縁付近ナデ調整。	①橙色②良好③2/6④やや粗。
2	H−9 147	土師器 杯	11.2 3.4	丸味を帯びた底部からゆるやかに直立し、やや内傾する素口縁杯。	手持ちヘラケズリ後、口縁部のみナデ。	中心部を残して口縁から3/5の範囲をナデ調整。	①橙色②良好③5/6④やや粗。
3	H−9 150	土師器 甕	22.8 — —	口縁部を直線的に開く丸胴甕。口縁は比較的長い。	胴部上半縦方向ヘラケズリ、口縁部ヨコナデ。	口縁部〜胴部上半ヨコナデ。	①にぶい黄橙色②やや不良③1/6④やや粗⑤口縁部付近煤付着。
4	H−9 97	須恵器 高杯	— — —	長脚二段高杯の脚部と思われる。透し孔は三方向に開いていたと推定される。	ロクロ水びき成形、ヨコナデ。	ヨコナデ。	①灰白色②良好③脚部1/6④精良⑤外面自然釉付着。
5	H−9 107	須恵器 高杯	— — —	杯部の立ち上がり付近から脚部との接合面までの破片、杯部は盤状を呈す。	ロクロ水びき成形、回転ヘラケズリ後部分的にナデ。	回転ナデ調整後、不定方向ヘラケズリとナデで平担に仕上がる。	①灰白色②良好③杯部1/8④精良⑤胎土は97に類似しており同一個体の可能性あり。秋間古窯址群製。7世紀第Ⅲ四半期。
6	H−9 305	須恵器 蓋	(9.0) 1.4	袋物の蓋の可能性が強い。つまみは無く、カエリが極端に突出する。	ロクロ水びき成形、天井部は手持ちヘラケズリ。	ロクロ水びき。	①灰色②きわめて良好③精良④1/4⑤秋間古窯址群製。
7	H−9 309	須恵器 蓋	9.6 —	萎少化ピーク時の杯蓋である。つまみは欠損しており、カエリは比較的短かい。	回転ヘラケズリ。つまみは乳頭状を呈すると思われる。	ロクロ水びき成形。中心部つまみの裏側が他よりうすく仕上がる。	①灰色②良好③1/2④密⑤7世紀第Ⅲ四半期。

	番号	器　形	寸法	器形の特徴	外面調整	内面調整	①色調②焼成③残存④胎工⑤備考
8	H−11 11	須恵器 杯　蓋	(10.3) 3.2	天井部と口縁部との境界に凹線を巡らす小型な蓋である。天井部は薄く仕上がる。	天井部右回転ロクロによる回転ヘラケズリ。口縁部ヨコナデ。	全面回転ナデ調整。	①灰白色②良好③2/5④密⑤陶邑TK209型式併行か？
9	H−16 5	須恵器 高　杯	(22.7) — —	口径の大きい盤状高杯体部と口縁部との境界には明瞭な外稜を有し、開き気味に立ち上がって端部は丸味を帯びる。	体部回転ヘラケズリ後部分的に手持ちヘラケズリが施される。口縁部と体部外稜から1.5cmの範囲で回転ナデ調整。	杯部全面ロクロを利用してカキ目調整。口縁部回転ナデ調整。	①灰白色②きわめて良好③杯部1/6④密⑤無高台盤の模倣と考えられる。7世紀第Ⅱ四半期。
10	H−21 12	土師器 杯	(17.9) — —	大型の杯。丸底で口唇は断面三角形を呈する。若干内湾する。	体部、手持ちヘラケズリ。口縁部ナデ調整。	ナデ調整。	①橙色②良好③1/8④やや粗。
11	H−21 20	土師器 杯	14.7 5.7	大型の杯。丸底で若干内湾する素口縁を有す。	手持ちヘラケズリ後口縁部のみナデ調整。	ナデ調整。	①にぶい赤褐色②良好③3/5④やや粗。
12	H−6 20	カワラケ 灯明皿	8.6 2.2 5.2	肉厚、内部底面中央部盛り上がり、渦巻状に凹線が2本回りを囲む内面油煙付着。	底部左回転糸切り後未調整、口縁部ナデ調整。	ナデ調整、油煙により詳細は観察できない。	①明赤褐色②やや不良③9/10④やや粗⑤外面口縁部半載竹管による施文？2カ所。
13	H−6 22	カワラケ 皿	(11.0) 2.3 (5.9)	肉厚、内部底面中央部盛り上がり、口縁部は丸味が強い。	底部右回転糸切り後末調整。口縁部ナデ調整。	全面ナデ調整。	①橙色②やや不良③1/4④やや粗。

	番号	器形	寸法	器形の特徴	外面調整	内面調整	①色調②焼成③残存④胎工⑤備考
14	H−6 34	カワラケ 灯明皿	9.0 2.0 4.8	内部底面中央部若干盛り上がり口縁部は面取りをして角張っている。	底部右回転糸切り後未調整。口縁部ナデ調整。二次焼成痕あり。	ナデ調整。内面½二次焼成による変色。	①橙色②良好③1/1④やや粗⑤器高の低い油杯と思われる。
15	H−6 55	須恵器 杯	14.3 3.9 6.9	丸味を帯びた体部下半からゆるやかに外反する。内面中央にロクロ成形による凹あり。	底部右回転糸切り後未調整。口縁部ナデ調整。	ナデでロクロ痕を消している。底面周辺に煤付着。	①にぶい黄橙色②やや不良③9/10④やや粗。
16	H−6 58	須恵器 杯	14.2 4.6 5.5	底部を突出させ、丸味を帯びた体部下半からゆるやかに外反する。	底部右回転糸切り後未調整。口縁部ナデ調整。	全面ナデ調整。口縁部付近に油煙付着。	①橙色②やや不良③1/1④やや粗。
17	H−6 21	須恵器 羽釜	(23.9) — —	口縁部は比較的長くやや内傾する。鍔は断面三角形で下方に向く。	胴部上半は縦方を中心としたヘラケズリ。口縁部。鍔はヨコナデ。	ヨコナデ。	①にぶい橙色②やや不良③口縁部1/6胴部若干④やや粗⑤内面白色不着物あり。
18	H−6 24	須恵器 羽釜	(18.4) — —	口縁部は比較的長くほぼ直立する。鍔は断面三角形で水平にのびる。	胴部上半は不定方向ナデ。口縁部、鍔はヨコナデ。二次焼成痕あり。	ヨコナデ。	①にぶい橙色②良好③口縁部1/5胴部若干④やや粗。
19	H−6 32	須恵器 羽釜	(21.0) — —	口縁部は比較的長くやや内頃する。鍔は断面三角形で端部は丸味を帯びている。	胴部上半縦方向を中心としたケズリ。口縁部、鍔ヨコナデ後指オサエ。	ヨコナデ。	①明赤褐色②やや不良③1/8④やや粗。
20	H−6 37	須恵器 羽釜	(23.0) — —	口縁部は比較的長く内湾ぎみに立ち上がる。鍔は断面三角形でやや下方にのびる。	胴部上半縦方向後ナナメ方向ケズリ。口縁部鍔ヨコナデ。	ヨコナデ。	①橙色②やや不良③1/12④やや粗。

番号	器　形	寸法	器形の特徴	外面調整	内面調整	①色調②焼成③残存④胎工⑤備考
H−8 274	カワラケ 皿	(8.9) 1.7 4.2	若干底部を突出させ、体部は内湾気味に立ち上がり口唇部でやや開いて反る。	底部右回転糸切り後未調整。口縁部ナデ調整。	全面回転ナデ調整。	①橙色②やや不良③¾④やや粗⑤内外面ともに熱による変色。
H−8 359	カワラケ 灯明皿	(8.7) 2.0 (5.3)	比較的肉厚で、開き気味に直立し口縁端で外反。口唇は肥厚する。	底部右回転糸切り後未調整。口縁部ナデ調整。	全面回転ナデ調整。底面周辺に煤付着。	①淡黄色②やや不良③½④やや粗⑤器高の低い油杯と思われる。
H−10 18	土師器 杯	(13.8) 3.6	丸底。ゆるやかに直立してやや内傾する素口縁杯。口唇部は薄い。	手時ちヘラケズリ後、口縁部のみナデ。	中心部を残して口縁から½の範囲を回転ナデ調整。	①橙色②良好③⅗④やや粗⑤内面中心部に『×』線刻（後刻）。H－9の混入品。
H−10 89	土師器 杯	12.5 4.0	18に類似するが、より内傾する素口縁杯	手持ちヘラケズリ後、口縁部のみナデ。	不定方向ナデ後、中心部を残して口縁から½の範囲を回転ナデ調整。	①明赤褐色②良好③⅞④やや粗⑤H－9の混入品。
H−10 157	土師器 杯	(12.2) —	丸底。ゆるやかな曲線を描いてほぼ直立する。	手持ちヘラケズリ後、口縁部のみナデ。	中心部を残して口縁から½の範囲を回転ナデ調整。	①橙色②良好③⅙④やや粗⑤H－9の混入品。
H−10 40	土師器 甕	— — —	比較的長胴化した甕の胴部。最大径は胴部中央よりやや上にある。	比較的細い単位のヘラケズリが胴部全面に施される。くびれ部は横方向ケズリ。	ヘラナデ。工具痕の単位が縦線に残る。	①橙色②良好③¼④やや粗⑤H－9の混入品。
H−10 110	カワラケ 皿	9.3 1.4 7.5	極めて浅く底径が大きい。内部底面中央部は若干盛り上がる。	底部手持ちヘラケズリ。口縁部ナデ。	中心部を僅かに残して回転ナデ調整。	①明褐灰色②良好③⅚④やや粗⑤油杯として使用か？還元炎焼成である。

	番号	器形	寸法	器形の特徴	外面調整	内面調整	①色調②焼成③残存④胎工⑤備考
28	H−10 191	カワラケ 皿	9.5 2.2 5.1	肉厚。内部底面中央部盛り上がり、口縁部は丸味が強い。	底部右回転糸切り後未調整。口縁部ナデ調整。	全面回転ナデ調整。	①浅黄橙色②やや不良③7/8④やや粗。
29	H−10 142	須恵器 杯	14.7 4.8 6.2	底部を若干突出させ、開き気味に外傾する。若干ゆがんでいる。	底部右回転糸切り後未調整。口縁部回転ナデ調整。	口唇部ヘラケズリ。全面回転ナデ調整。	①浅黄橙色②やや不良③5/6④やや粗⑤外面タール状付着物。
30	H−10 182	須恵器	(15.4) 13.8 (7.3)	やや開いて外傾し、口縁付近で若干反る。	底部左回転糸切り後未調整。口縁部回転ナデ調整。	口縁部回転ナデ調整。底部は磨耗が著しく不明。	①橙色②やや不良③1/6④やや粗⑤内外面ともに二次焼成痕あり。
31	H−10 184	須恵器 羽釜	— — —	口縁部は非常に長く直立し、鍔は短く断面三角形である。全体に寸胴形を呈す。	全面ヨコナデ。	ヨコナデ。部分的にタテナデ。	①にぶい橙色②やや不良③口縁部1/8他は若干④やや粗⑤二次焼成痕あり。
32	H−17 15	カワラケ 皿	(9.3) 2.2 (5.2)	内面中央のロクロ痕に亀裂が入り貫通する。底面は薄く中央程著しい。	底部右回転糸切り後未調整。口縁部ナデ調整。	全面回転ナデ調整。	①橙色②良好③1/2④密⑤内面に若干油煙が付着するがはたして灯明皿として機能したかどうか疑問である。
33	H−17 36	カラワケ 灯明皿	9.2 2.3 4.3	若干底上げ気味でほぼ直線的に外反する。内面油煙付着。	底部右回転糸切り後未調整。口縁ナデ調整。	全面回転ナデ調整。	①灰白色②良好③3/5④やや粗⑤油杯として使用か？
34	H−17 72	カワラケ 皿	8.7 2.1 5.2	体部を開き気味に直立させ、口縁端でやや外反する。	底部右回転糸切り後、未調整。口縁部ナデ調整。	全面回転ナデ調整。	①浅黄橙色②良好③9/10④やや粗⑤口縁部付近橙色に変色する。

	番号	器　形	寸法	器形の特徴	外面調整	内面調整	①色調②焼成③残存④胎工⑤備考
35	H−17 80	カワラケ 灯明皿	(9.1) — (4.0)	ほぼ直線的に立ち上がる。底部は比較的丸味を帯び、油煙を付着。	底部右回転糸切り後未調整。口縁部不定方向ナデ調整。	口縁部回転ナデ調整。底部不定方向ナデ調整。	①橙色②良好③2/5④やや粗⑤金雲母を多量に混入する。⑤油杯として使用か？
36	H−17 142	カワラケ 灯明皿	9.7 1.9 5.6	やや内湾気味に立ち上がり、口唇付近で外反する。	底部静止糸切り、口縁部ナデ調整。	全面回転ナデ調整。	①にぶい橙色②良好③9/10④やや組⑤口唇部付近油煙付着。油杯として使用か。
37	H−17 151	カワラケ 灯明皿	9.3 1.9 6.1	底部からゆるやかに立ち上がり、口唇付近でやや外反する。	底部右回転糸切り後未調整。口縁部ナデ調整。	全面回転ナデ調整。	①灰褐色②良好③1/1④やや粗⑤内面油煙付着。油杯として使用。
38	H−17 157	カワラケ 灯明皿	(8.9) 1.9 (4.2)	やや開き気味に立ち上がり、口唇付近で若干外反する。	底部右回転糸切り？後未調整。口縁部ナデ調整。	口縁部回転ナデ調整。底部不定方向ナデ調整。	①にぶい橙色②良好③1/5④やや組⑤内外面ともに油煙付着。油杯として使用分。
39	H−17 162	カワラケ 灯明皿	9.5 1.7 5.2	やや開き気味に立ち上がる。底部は底あげになっている。	底部右回転糸切り後未調整。口縁部ナデ調整。	全面回転ナデ調整。	①にぶい黄橙色②良好③9/10④やや粗⑤内外面ともに油煙付着。油杯として使用。
40	H−17 177	カワラケ 灯明皿	8.8 2.1 4.3	若干底部を突出させ、やや内傾しながら外反する。	底部右回転糸切り後未調整。口縁部ナデ調整。	全面回転ナデ調整。	①灰白色②良好③8/10④やや粗⑤内面口縁部に油煙付着。
41	H−17 202	カワラケ 皿	(9.1) (2.3) 4.5	底部からゆるやかに立ち上がる。底部を若干突出させる。	底部右回転糸切り後未調整。口縁部ナデ調整。	全面回転ナデ調整。	①浅黄橙色②良好③3/5④やや粗⑤内面熱による変色。

	番号	器　形	寸法	器形の特徴	外面調整	内面調整	①色調②焼成③残存④胎工⑤備考
42	H−17 236	カワラケ 皿	(9.0) 2.3 4.9	内部底面中央部が若干盛り上がり、直線的に外反する。	底部右回転糸切り後未調整。口縁部ナデ調整。	全面回転ナデ調整。	①灰白色②良好③⅗④やや粗⑤内外面とも油煙付着。
43	H−17 158	須恵器 椀	(15.8) 6.5 7.7	高台から丸味を持って立ち上がり、直線的に開く。	底部右回転糸切り後付け高台。体部全面回転ナデ調整。	内黒磨。縦と横方向を交互に磨いている。	①にぶい黄橙色②良好③½④やや粗⑤陶器類の模倣か。
44	H−17 180	須恵器 椀	— — 6.7	高い高台から丸味を持って口縁に至る。	底部ヘラ調整後付け高台。体部下半から高台にかけてナデ。	残存部分は全面ナデ。	①にぶい黄橙色②良好③底部完存体部若干④やや組⑤内外面ともに二次焼成。
45	H−17 66	須恵器 壺	— — (12.3)	平底、胴部の最下径は中央よりやや上にあり若干肩がはる。口縁は欠損して不明。	胴上半回転ナデ調整後、胴下半〜底部手持ちヘラケズリ。部分的にナデ調整。	上半回転ナデ調整。下半ヘラケズリ。ナデ。	①にぶい赤褐色②やや不良③½④やや粗⑤酸化炎焼成土師器的様相を持つ。
46	H−17 112	土師器 土　釜	(27.2) — —	頸部はくびれて『く』の字状に外反する口縁を呈す。	縦方向ヘラケズリ。二次焼成痕あり。	ナデ、横方向の後に縦方向を行う。	①にぶい赤褐色②やや不良③⅙④やや粗⑤１０世紀後半。
47	H−17 146	土師器 甕	(24.5) — —	頸部はくびれて『く』の字状を呈すが、口縁はあまり外反しない。	ヘラケズリ後、部分的にナデ調整。口縁部回転ナデ調整。	口縁部回転ナデ調整。胴部横方向ナデ。	①にぶい赤褐色②やや不良③⅙④やや粗。
48	H−17 169	土師器 土　釜	25.9 — —	頸部はくびれて『く』の字状に外反する口縁を呈す。	ヘラケズリ後、部分的にナデ調整。口縁部回転ナデ調整。	口縁部回転ナデ調整。胴部横方向ナデ。	①にぶい橙色②やや不良③¼④やや粗。

	番号	器形	寸法	器形の特徴	外面調整	内面調整	①色調②焼成③残存④胎工⑤備考
49	H−17 174	土師器 土釜	26.1 — —	頸部はくびれて『く』の字状に外反する口縁を呈す。	縦方向ヘラケズリ。口縁部のみナデ調整。	ナデ調整。	①にぶい褐色②やや不良③⅜④粗⑤内外面ともに二次焼成痕あり。
50	H−17 191	土師器 鉢	21.6 — —	口縁に最大径のある鉢で、頸部は『く』の字状を呈す。底部欠損。	斜方向ヘラケズリ後、横方向ヘラケズリ。口縁部のみナデ調整。	口縁部回転ナデ調整。他は横方向ナデ。	①にぶい橙色②やや不良③⅛④粗。細砂粒を多量に含む。⑤煤付着。煮沸具として使用か。H−921の混入品。
51	H−17 117	須恵器 羽釜	27.4 — —	口縁は比較的短かく内傾する。鍔は断面三角形を呈すが異形である。	口縁〜鍔横ナデ。胴部不定方向ナデ。鍔周辺ユビオサエ。	鍔裏側ユビオサエ後、横ナデ、体部不定方向ナデ。	①にぶい橙色②やや不良③⅙④粗⑤内外面ともに二次焼成。
52	H−17 171	須恵器 羽釜	24.3 — —	口縁部をやや内傾させる。鍔は断面三角形で口唇部は面取りをしている。	口縁から鍔までヨコナデ。胴部縦方向ヘラケズリ。	ヨコナデ。	①にぶい橙色②やや不良③⅙④やや粗⑤二次焼成痕あり。
53	H−17 160	須恵器 羽釜	27.0 — —	口縁部を内傾させる。鍔は断面三角形で、口唇部は面取りをする。	口縁から鍔までヨコナデ。胴部縦方向ナデ。	鍔の裏面。ユビオサエ後、横ナデ。胴部斜方向ナデ。	①明赤褐色②やや不良③½④やや粗⑤床面に煤が厚く付着する。
54	H−17 168	灰釉 陶器 皿 (転用硯)	12.0 2.4 6.5	高台は稜不明瞭で内面が外傾する。体部はゆるやかに立ち上がり、口縁付近で外反する。	口縁から高台付近までヘラケズリ。底部は回転糸切痕をヘラケズリ。ナデ調整で消す。	床面回転横ナデ。灰釉はつけがけ。中心部は転用硯で磨滅している。墨が付着している。	①灰黄褐色②きわめて良好③⅜④精良⑤三日月高台第2類、大原2号窯併行か。
55	H−18 190	カワラケ 皿	(8.2) 1.8 (4.4)	内面中央が凹む。口縁端部は肥厚し、丸味を帯びる。	底部右回転糸切り後未調整。口縁部ナデ調整。	全面ナデ調整。口縁付近二次焼成痕あり。	①にぶい黄橙色②やや不良。金雲母を混入する。③⅙④やや粗⑤油杯として利用か？

	番号	器　形	寸法	器形の特徴	外面調整	内面調整	①色調②焼成③残存④胎工⑤備工
56	H−18 202	カワラケ 皿	(8.2) 1.9 (5.8)	肉厚。比較的直線的に外反し。端部は丸味を帯びる。	底部右回転糸切り後未調整。口縁部ナデ調整。	全面ナデ調整。底部に油煙付着。	①灰白色②やや不良③⅜④やや粗⑤油杯として使用か？
57	H−19 117	須恵器 杯	— — (7.4)	底部付近の破片。やや外反気味に立ち上がる。	底部右回転糸切り後未調整。体部ナデ調整。	全部ナデ調整。	①橙色②やや不良③⅛④やや粗⑤底部外面にタール状付着物。焼成時の付着か？
58	H−20 4	須恵器 杯	15.2 5.1 5.9	丸味を帯びた体部から若干外反して口唇に至る。底部は突出する。	底部静止糸切り後未調整。口縁部ナデ調整。	全面回転ナデ調整。	①にぶい黄橙色②良好③⅜④密⑤二次焼成痕あり。
59	H−20 30	須恵器 杯	11.6 4.4 6.8	比較的急に立ち上がる。底径に比して口径の小さい器形である。	底部右回転糸切り後未調整。体部回転ヘラケズリ後ナデ調整。	全面回転ナデ調整。	①橙色②良好③¼④やや粗⑤底部二次焼成痕あり。
60	H−20 39	カワラケ 灯明皿	8.7 2.3 4.3	若干底部を突出させ、開き気味に直立する。内面中央が盛り上がる。	底部左回転糸切り後未調整。口縁部ナデ調整。	回転ナデ調整。底部は剝離が著しい。	①にぶい橙色②良好③¼④やや粗⑤底部内外面に煤付着。油杯として使用。
61	H−20 63	カワラケ 皿	(9.4) 1.9 (6.6)	底部肉厚。直線的に外反する。	底部糸切り後ヘラ調整。口縁部ナデ調整。	全面回転ナデ調整。	①淡黄色②良好③⅙④やや粗。
62	I−3 埋	須恵器 杯	13.8 4.9 5.0	体部は比較的丸味を帯びる。内面中央部が若干盛り上がる。	底部右回転糸切り後未調整。体部回転ヘラケズリ後ナデ調整。	全面回転ナデ調整。	①浅黄橙色②良好③⅚④やや粗。

	番号	器　形	寸法	器形の特徴	外面調整	内面調整	①色調②焼成③残存④胎工⑤備考
63	I−3 4	須恵器 羽　釜	21.4 — —	口縁部を内傾させる。鍔は丸味を帯びやや上向きに付く。ゆがみがひどい。	ナデ調整。	鍔裏面ユビオサエ。ナデ調整。	①浅黄橙色②やや不良③⅛④やや粗⑤外面二次焼成痕あり。粗悪品。
64	D−5 21	土師器 甕	(19.6) — —	口縁付近の破片。口縁形態はコの字状を呈す。	体部ヘラケズリ。口縁部ナデ調整。	体部ヘラケズリ。口縁部ナデ調整。	①橙色②やや不良③口縁部½④やや粗。
65	D−7 36	須恵器 椀	(14.4) — —	底部を欠損する。比較的浅身である。	ロクロ水びき成形。体部回転ナデ調整。	回転ナデ調整。	①灰白色②やや不良③口縁部⅓④やや粗。
66	J−8 1	土師器 杯	(9.8) 3.1	外稜を有する小型の杯。口縁部を内傾させ、稜は不明瞭である。	体部ヘラケズリ。口縁部ナデ調整。	ナデ調整。	①橙色②良好③¼④密⑤外面二次焼成。
67	J−8 2	土師器 杯	(8.9) 2.7	ロクロ使用の小型の杯である。丸底で口縁はほぼ直立する。口縁端は面取りをしている。	体部手時ちヘラケズリ。口縁部ナデ調整。	回転ナデ調整。内面ロクロ成形痕が明瞭である。	⑤口縁部赤色塗彩。
68	L−8 B	土師器 杯	(10.8) —	底部丸底。小型の素口縁杯。口縁部はやや内湾する。	体部手持ちヘラケズリ。口縁部ナデ調整。	ナデ調整。	①橙色②良好③⅙④密⑤外面二次焼成痕あり。
69	J−3 2	須恵器 杯	(14.2) 4.4 (8.1)	ほぼ直線的に外反する。器形で口唇部でやや開く。	底部右回転糸切り後未調整。体部回転ナデ調整。	体部ナデ調整。	①にぶい橙色②やや不良③⅕④やや粗⑤外面二次焼成痕あり。酸化炎焼成。
70	L−9 B	土師器 杯	(14.2) —	丸底。口縁付近でやや内傾する。	体部手持ちヘラケズリ。口縁部ナデ調整。	体部ナデ調整。	①にぶい橙色②良好③⅛④やや粗。

	番号	器　形	寸法	器形の特徴	外面調整	内面調整	①色調②焼成③残存④胎工⑤備考
71	1Tr 18	須恵器 杯	(12.9) — —	口縁付近のみ残存。ロクロ成形痕が段状に残る。	ロクロ水びき成形。回転ヘラケズリ。ナデ調整。	回転ナデ調整。	①明紫灰色②良好③1/10④やや粗⑤外面自然釉付着。
72	2Tr 埋	カワラケ 灯明皿	(7.8) 1.6 (5.4)	比較的肉厚。底部若干底あげ。底部中央ロクロ成形痕明瞭。	底部右回転糸切り後未調整。体部回転ナデ調整。	回転ナデ調整。	①にぶい黄橙色②やや不良③1/3④やや粗⑤内面二次焼成痕あり。油杯として使用。
73	4Tr 27	須恵器 杯	14.1 4.3 6.0	ほぼ直線的に外反する。内面底部中央が若干盛り上がる。	底部右回転糸切り後未調整。体部回転ナデ調整。	全面回転ナデ調整。	①灰白色②やや不良③3/4④やや粗。
74	4Tr 35	須恵器 羽　釜	20.9 — —	口縁部をやや内傾させる。鍔は断面三角形でやや上方を向く。口唇部は丸味を帯びている。	全面ヨコナデ。	全面ヨコナデ。	①灰褐色②やや不良③1/10④やや粗⑤外面煤付着。
75	4Tr 埋	土師器 土　釜	28.1 — —	口縁部の外反は弱く胴部の張りも少ない。口唇部は面取りをする。	口縁部ヨコナデ。体部縦方向ナデ。	口縁部ヨコナデ。体部不定方向ナデ。	①にぶい赤褐色②やや不良③1/6④やや粗⑤外面二次焼成痕。
76	その他 表	カワラケ 皿	8.2 1.8 4.9	比較的肉厚。底部内面中央ロクロ痕あり。	底部右回転糸切り後未調整。体部回転ナデ調整。	全面回転ナデ調整。	①橙色②やや不良③9/10④やや粗⑤外面口縁付近煤付着。
77	H−1 埋	土師器 杯	(13.6) —	底部丸底。口縁を内傾する素口縁杯。	体部手持ちヘラケズリ。口縁部ナデ調整。	ナデ調整。	①橙色②良好③1/6④密。
78	H−1 1	土師器 甕	(22.8) — —	口縁部は比較的長く外反し、胴部の張りは弱い長胴甕。	口縁部横ナデ。体部縦方向ヘラケズリ。	口縁部ヨコナデ。体部ヘラナデ。	①橙色②良好③1/10④密⑤内面焼土付着。

番号	器　形	寸法	器形の特徴	外面調整	内面調整	①色調②焼成③残存④胎工⑤備考
H−3 埋	須恵器 椀	16.1 6.7 10.0	高い高台を付す。体部はロクロ成形による段上を呈し口唇部でやや外反する。	全面回転ナデ調整。	回転ナデ調整。	①にぶい橙色②やや不良③¼④やや粗⑤外面タール状付着物。
その他 表	須恵器 羽　釜	(19.0) — —	口縁部はやや内傾してから直立する。端部は丸味を帯び鍔は断面三角形でやや上方を向く。	回転ナデ調整。	回転ナデ調整。	①にぶい黄橙色②やや不良③口縁⅙④やや粗⑤内外面二次焼成痕あり。

番号	器種	出土地	形態	技法	素地	釉薬	備考
81 1	青磁蓮弁文碗	I-10-A	やや大型の碗でつくり丁寧。	ロクロ使用。外面に蓮弁を彫り出し、後に内外面施釉。	白地	淡緑色 0.5～0.8㎜	龍泉窯系。13世紀。蓮弁の鎬は明らかではない。
82 2	青磁劃花文碗	I－2	やや深目、口唇部で若干外反。	ロクロ使用。内面に猫描文を彫り、後に内外面施釉。	灰白色	緑灰色 0.2～0.3㎜	龍泉窯系。13世紀。
83 3	青磁劃花文碗	埋土	やや深目、腰は丸味を帯びる。つくり丁寧。	ロクロ使用。内面に猫描文を彫り、後に内外面施釉。	灰白色	淡緑色 0.2～1㎜	龍泉窯系。13世紀。
84 4	白磁　皿	3TrⅨA	口唇部がくの字に外反する皿である。	ロクロ使用。	灰白色	浅黄色 0.2～0.3㎜	14世紀
85 5	白磁　皿	4TrⅩ15	厚手の皿底部。高台は無い。	ロクロ使用。底部右回転ヘラおこし。	灰白色	灰白色。0.1㎜ 内外面ともに貫入を有する。	13～14世紀。
86 6	美濃瀬戸焼卸し皿	J－5	底部厚手の卸し皿。平底でやや小型。	底部糸切り（右回転ロクロ）ロクロ水びき成形。	灰白色	淡緑色、口唇付近のみ施釉。貫入を有する。	15世紀
87 7	灰釉陶器椀	J－6	高台の高い椀底部付近で、高台は外内面ともに外傾する。	ロクロ、水びき、成形、底部ヘラケズリ、ナデ調整。	灰白色	灰白色、部分的に淡緑色自然釉。	東濃系。虎渓山1号窯併行。

番号	器種	出土地	形態	技法	素表地	釉薬	備考
88 8	灰釉陶器椀	J－7D	三日月高台2類の灰釉椀。底部付近破片。	ロクロ、水びき、成形、底部へラケズリ、ナデ調整。	灰白色	灰白色、部分的に淡緑色自然釉。	東濃系、大原2号窯段階か。
89 9	常滑焼、鉢	I－1№2	大きく外傾する鉢で、ゆがみがひどい。	マキアゲ成形体部下半ユビオサエ。クシバ状工具オサエ。	灰白色	淡緑色、外面口唇付近と内面全体に施釉貫入が入る。	Ⅳ期（14世紀後半～15世紀前半）。

	番号	種類	厚さ	凸面調整	模骨	布目 縦×横	胎土	色調	焼成	備考
90	H－3 No. 1	平瓦	20 mm	1	無	7×6	b	灰褐色	良好	内面にヘラ書き「大」2カ所。
91	H－6 No. 15	丸瓦	26.5 mm	2	無	10×10	c	黒褐色	良好	二次焼成痕有り、指頭痕有り。
92	H－6 No. 40	丸瓦	14 mm	1	無	10×8	b	灰白色	良好	部分的に青灰色。
93	H－6 No. 42	丸瓦	24 mm	2	無	7×7	b＋c	灰褐色	良	
94	H－6 No. 60	丸瓦	18.5 mm	2	無	7×7	b＋c	茶褐色	良	指圧、掌圧痕有り。ほぼ完形。
95	H－6 No. 61	丸瓦	15 mm	2	無	8×7	c	青灰色	良	
96	H－6 No. 62	丸瓦	20 mm	3	無	7×5	b	灰白色	良好	軒丸瓦の丸瓦部、瓦当面がはく離、厚い瓦当がはめこまれていたらしい。内に布、外に粘土板の接合痕有り。山王の六葉単弁に近いものか。
97	H－6 No. 63 No. 65	平瓦	18.5 mm	1	無	8×7	b＋c	茶褐色	良好	二次焼成痕有り。H－17、No. 165と同じものである。
98	H－6 No. 48	丸瓦	23.5 mm	2	無	11×12	a	黒褐色	良好	二次焼成痕有り。
99	H－8 No. 69	丸瓦	25 mm	2	無	6×7	a	茶褐色	良好	二次焼成痕有り。

	番　号	種類	厚　さ	凸面調整	模骨	布　目 縦×横	胎　土	色　調	焼成	備　　考
100	H－8 No. 94	丸瓦	19 ㎜	2	無	6 × 7	a	灰褐色	良好	指圧痕有り。
101	H－8 No. 352	丸瓦	18.2.㎜	2	無	6 × 7	b	灰褐色	良好	二次焼成痕有り。
102	H－10 No. 168	丸瓦	26 ㎜	2	有	5 × 4	d	茶褐色	良	たたき　藤岡窯と同じ。
103	H－10 No. 35 No. 187	丸瓦	31.5 ㎜	2	無	10 × 9	c	黒灰色	良好	玉縁付、部分的に釉がかかっている。玉縁部の長さ 32 ㎜。
104	H－10 No. 189	丸瓦	19 ㎜	2	無	8 × 8	b＋c′	灰褐色	良好	二次焼成痕有り、炭素を付着させているところが国分寺のものに近い。
105	H－10 c	丸瓦	17 ㎜	2	無	6 × 9	b	灰褐色		二次焼成痕と酸化部分有り。国分寺創建期のものと胎土が同じ、東上州方面の窯か。
106	H－17 No. 165	丸瓦	28 ㎜	2	無	8 × 7	b＋c	茶褐色	良好	ほぼ完形。全体に偏平な丸瓦。
107	H－17 No. 173	丸瓦	25 ㎜	2	無	9 ×10	b	灰白色	良好	No. 138、167、193、209 227 で接合できた。内部は茶褐色。二次焼成痕有り。
108	H 17 No. 194	丸瓦	22.8 ㎜	2	無	8 × 8	c′	茶褐色	良好	No. 145、166、171、173 194 で接合。No. 166 に二本の線刻有り。国分寺で出土例多い。ほぼ完形。山王の後のものに近い。吉井窯か。

	番　号	種類	厚　さ	凸面調整	模骨	布　目 縦×横	胎　工	色　調	焼成	備　　考
109	H -20 No. 69	丸瓦	21 mm	2	無	10× 9	b	灰褐色	良好	固く焼きしまっている。
110	K - 6	丸瓦	27 mm	2	有	7 × 8	b + c	灰茶色	良好	固く焼きしまっている。
111	K - 7	丸瓦	16.6 mm	2	無	7 × 8	c	黒灰色	良好	
112	K - 8	平瓦	21.8 mm	2	無	6 × 4	c′	茶褐色	良好	
113	I - 3	丸瓦	21 mm	2	無	6 × 6	b	灰茶色	良好	二次焼成痕有り。
114	D - 7 No. 17	丸瓦	17 mm	2	無	10× 8	b	茶褐色	良好	
115	D - 7 No. 27	平瓦	27 mm	2	無	9 × 7	a′	茶褐色	良好	表面ヘラ書きの「π」は、山王６次出土の「圾」か。吉井あるいは藤岡窯。文字は狭端を上にして　cmくらいの所。
116	D - 7 No. 29	丸瓦	20 mm	2	無	8 × 7	b′	茶褐色	やや良	

（注）　凸面調整　1. 縦位の平行縄目調整で、狭端部には横位の縄目調整が入る。
縄目調整の後ナデ調整したものも含める。
2. 不定方向のナデ調整。
3. 横ナデ調整。
4. 縦ナデ調整。

胎　　工　a. φ３～５mmの石英等の砂粒を多量に混ぜる。
b. 黒緑色の微粒子を点在する均質な細かい胎土。
c. 石英、雲母の微粒子を若干含むか。比較的均質な細かい胎土。
d. ａと成分的に近似するが、横じま状に粘土が入る。